

# 谷中・首ふり坂

池波正太郎



新潮文庫

新 潮 文 庫

谷 中 ・ 首 ふ り 坂

池 波 正 太 郎 著



---

新 潮 社 版

4415

## 池波正太郎

Ikenami Shôtarô

(1923—1990)




東京・浅草生れ。下谷・西町小学校を卒業後、茅場町の株式仲買店に勤める。戦後、東京都の職員となり、下谷区役所等に勤務。長谷川伸の門下に入り、新国劇の脚本・演出を担当。1960(昭和35)年、「錯乱」で直木賞受賞。「鬼平犯科帳」「剣客商売」「仕掛人・藤枝梅安」の3大シリーズをはじめとする膨大な作品群が絶大な人気を博しているなか、急性白血病で永眠。

# 目次

尊徳雲がくれ	七
恥	四五
へそ五郎騒動	七九
舞台うらの男	一二七
かたきうち	一五一
看板	一五九
谷中・首ふり坂	一八九
夢中男	二三一
毒	二九五





Digitized by the Internet Archive  
in 2025

[https://archive.org/details/isbn\\_9784101156545](https://archive.org/details/isbn_9784101156545)

谷中・首ふり坂

伊勢屋の黒助……………三七

内藤新宿……………三九

解説 八尋舜右

尊徳雲がくれ



と、門前町を北へ折れた小路こうじにある料理旅籠はたご（八百伝）というのへ、金次郎は女を誘った。

もともと他人の身上話を聞くのが大好きな金次郎だ。暖い飯でも食べさせ、得意の訓話で死を思い止とどまらせた上、いくらかの金を与えてやるつもり以外の何ものもなかったといつてよい。すんなりした鼻を鳴らし、泣きじやくりながら、女おろくが語るところによると……。飲む打つ買うと遺憾なく揃そろった亭主が、賭場とばの借金ていしゅの抵当に、わが子こを売飛ばしてしまつた。亭主は元両国の見世物小屋に出つた曲鞠きくま芸人で、いずれ子供も芸人仲間を通じて金に替えたのだろうが、それは両国へ出かけて探つてみれば何とも見当もつくことと思う——が、先だつものは金だ。自分も今度こそは亭主と別れるつもりだが……。

「子供を、あの、取返すにも——あの、十五両という大金が……すっからかんのこの身に、頼るものといつては、神さま仏さまより他ほかにないのですから……」

しかし、今日という今日は、もうどうにもならないことを、つくづく悟つた。両親にも早く死別れ（これは金次郎と同じ身の上なので、彼は、この言葉にいたく共感と同情とをおぼえた）不幸な世渡りをしつづけてきた自分も、こころが命のつきるときなのだろうと心を決めた……。と、おろくは、舌つ足らずな甘ったるい口調で、語つて泣き、泣いては語る。

そのうちに、おろくは何時いつの間にか炬燵の向う側から、じりじりと金次郎の側そばへ近寄つてきていた。

「いや、私もなあ、お大師様に導いて頂くつもりで、やって来たのだがね」

我にもなく金次郎が嘆息を洩もらしたときには、もうぐったりと、おろくのこ小肥ふとりな体が金

炬燵こたつの中のこと

篤農家とくのうか、二宮金次郎が、野州のしゅう（栃木県）桜町の陣屋を出奔して、江戸へ向つたのは、文政十二年正月のことであつた。

金次郎は、江戸から真つすぐに川崎大師かわさきだいしへ向い、日頃信仰する弘法大師こうぼうだいし本尊の前にぬかずいてみたが、しかし、絶望と激怒に狂い出し、さうな彼の心身は、容易に鎮しずまつてはくれなかつた。

お札幌へ金十両の寄進を置き、金次郎は本堂を出て、鐘楼の東面にある戸村屋という茶屋へ入り、ぼんやりと茶を啜すすつた。

彼女が現れたのは、このときだ。

冬の陽射しも薄れ、参詣人さんぎにんの足も途絶えた宏大な境内を突切り、茶店の前までやって来た女は、チラリと、白くつり上つた眼で金次郎を見て、すたすたと通用門傍わきの木立へ入って行ったが……。

（あッ！）

金次郎は狼狽ろうばいして腰を浮せた。女の手には剃刀かみそりが握られていたのに気づいたからである。木立の中で、剃刀を喉のどに当てようとする女と揉み合い、やっと、なだめすかして連れ出す



立てられた。

男の胸元から発散する土の香りを嗅ぎながら、おろくは尚も泣く。泣きながら頭の上で金次郎が呑み込む生唾なまつばの音を聞いている。

「よし、よし。もう泣くなよ　わ、わかった。ようわかった」

金次郎は喉をつまらせ、うわごとのように女の耳朶みみたかへ囁いたが、怒張し切った全身の血管が命ずるままに、彼はいきなり、おろくを押し倒した。

「あらまあ——そんな、いや。いや……」

などと抵抗を匂におわせつつ、おろくの両腕は、するすると逞たくましい金次郎の首へ巻きついてしまふ。

炬燵かすこの上の置膳おきぜんで徳利が転倒し、灯ひを入れに来た女中が、あわてて引き返して行つたのに気づいたのは、おろくのみである。

（なあに、たかが小金持ちの肥桶臭い百姓のおじさんなんか……）

いいかげんに翻弄はんろうしてやるつもりだったおろくなのだが、終いには、岩のような金次郎の毛深いからだ軀からだでもみくちやにされてしまった

中庭の向うの座敷で三味線が鳴り、胴間声どうまこゑが唄うたっている。

こっちの肉も骨も粉々にしてしまふような、男の生一本なっぴんな迫力に圧倒され、おろくは我にもなく無我夢中になっていた。

次郎の胸元へ吸着して、おろくが肩を震わせて泣いたひに、しめっはい彼女の手が、チラチラと金次郎の骨太い指にさわるのである。

何となく金次郎は情感をそそられてきはしめた。

おろくは、二十四、五になるだろうか。眼が大きいのはいいとしても、低い鼻も上向きだし、丸い顔に、眉も唇も思ひ切った均衡の破れ方でおさまっている。しかし、ひつつめた髪の下からのぞいている襟足には、たつぷりと脂肪がのつていて、寒さむしい着物の下に息づいているものを、わかるものには想像させてくれる。

めそめそと、しくしくと話はずみ、おろくが、ついに、

「もし生まれ替って旦那さんのような方のおかみさんになれたら、あの……そんな夢でも見て、私はもう、死ぬより他に……」と、奥の手を出して泣き伏したとき、金次郎は、まさにち切れんばかりの欲求に耐えかねた。

七十両余りも腹に巻いている。女の不幸の大半は、応金で救えるものである。その代りに、というのではないが……平常は寸暇もなく心身を酷使し、身長六尺、体重二十五貫という、四十を越えたばかりの肉体に充滿するエネルギーのすべてを、知らず知らず仕事へ転用してきた金次郎だ。それがこのところ、哀しい無聊をかこちながら、半ば自棄気味に徒食しているのだから、女体への欲求が昂進するのも無理はなかった。

外はもう暮れたようだ。

股下から這いのぼる炬燵の温気と、甘酸っぱい女の体臭とで、金次郎の官能は大いに掻き

家としての手腕を試してみようと思いたったからである

金次郎が自ら仕法と名づけているものは――負債整理、殖産開拓、一村一藩復興や財政建直しなど、彼独自の事業を行うことをいうのである

金次郎は殿さまの内命を何度も断わりつづけたが、いよいよ断わり切れなくなり引き受けるときに当って、彼は条件を三つ出した。

先ず四千石の領地を一応、千石に復旧させることと、以後十年は自分に村の一切を任せること、領主宇津家は年千俵の収入で我慢をして貰うことの三カ条だ。これは許された

「百姓のぶんざいに生意氣千万!!」

などと息まく藩の重役達を押え、殿さまは言った

「言うままにしてやれ。あの幕場のごとき土地を失せようというのだ。失敗して元もとのや。成功すれば見つけものではないか」

しかも費用は、陣屋その他の維持費程度でよいというのだ

「金がなくても復興が出来るのか」と、殿さまはおどろいた

「あの村々には金をかけては元通りになりませぬ。金を出せばそれに寄るかかり、無為徒食をむさぼりたい気分が高まるばかりでござりまする。私めは、先ず、その氣風を一掃するところから始めようと考えおりまする」

こんなことを言う金次郎を見て、殿さまは、

「フーム。成程のう」

## 金次郎仕法のこと

大切な仕事を放り捨てて、二宮金次郎が桜町から失踪したのは、おろく、と出合う半月ほど前のことである。

金次郎が、小田原藩主の大久保忠貞おおくぼただざねから、桜町三カ村の疲弊荒廃を復興せよと命を受けたのは、八年前の文政四年、彼が三十五歳の春であつた。

野州桜町は、大久保家の分家の宇津家の領地だ。表向きは四千石だが、当時は、その四分の一も実収は上らず、田畑は荒れ果て、宇津家の負債もまた山のことである。旗本として人並な交際も出来なくなるし、宇津家では、何度も本家の小田原藩の腔うたいをかしりにくる。本家にしても、その頃の大名の大半が財政困難に陥っていたのと同様、衆ではない。といつて捨ててもおけない。

うっかりすれば「監督不行届き」とあつて幕府からも睨にらまれかねない。だから何度も役人を派遣したり金を注ぎ込んだりして桜町を復興させようと計ったが、焼石に水であつた。

桜町の村々には博徒や商売女が入り込み、村民の生活が荒れ放題となつてゐる。出張して来た小田原藩の役人などは、狡猾な土地のものが誘う酒の香、女の香に縛られて骨抜きになり、公用金を目的もなく消費してしまふのが関の山だ。

大久保侯が、小田原領内栢山村かぐまに住む金次郎に桜町建直しを委任したのも、金次郎の仕法

る十郎兵衛が百姓上りの自分に低頭して礼をのべたときのことは忘れようとしても忘れられない。

両親を失った十六歳のときから一粒の米もなしの躰一つで弟達を抱え、以後は独立独歩で、十一歳の頃には作徳十三俵、貸付米七俵を手中に握んだ金次郎である。

小田原城下に鳴り渡った服部家建直しの大評判を聞いた領主からの、直じきの依頼が桜町仕法であつたのだ。

この仕法が成功すれば、彼は小田原の金次郎から天下の仕法家としての金次郎になる。封建制度の腐敗は、この大名の領地にも武士の家にも充満している。

百姓一揆や打壊しは近年増大するばかりだ。

仕事に困ることはない。

金次郎の夢は、仕法家としての手腕を天下にとどろかせることにある。

桜町領内を調査し、村人とも親しむうち、彼は、この萎びた土地の息を吹き返させることに、またもたまらぬ興味を感じはじめた。

細君のお波が、

「建直しの見込みがつかなければ、人さまの謗りをお受けなさるばかりですよ—」

と念を押したが、金次郎は、

「なあに大丈夫。きっと成功して殿様や藩の重役方を、あつと言わせてやる。先ず十年はかかるがね」

眩<sup>つふや</sup>いたが、とても無理だと思った。

（夢のようなことを申しておる。やはり、やらせても無駄かな）

いつそ中止をと思ったが、そうなれば金次郎を抜擢<sup>はくやく</sup>した自分の見識が家来の物笑いになること必定<sup>ひつじよう</sup>だ。何だか頼りなくなってきたが、とにかくやらせてみることにした。

（今どき珍妙なる男が出て来たものじゃ）

珍妙だと思うのは他人だけだ。

わが独裁の下に人々を心服させ、練りに練った計画を一步一步と実現し、穴だらけ埃<sup>ちり</sup>だらけの木や家や、人を建直し復旧させる興味こそは何ものにも替えられぬものがある。むしろ金づくでやれるものではない。

芸術家が画筆や絵具の世界に没入するのと同じことだ。スポーツマンが炎暑に汗水たらして御苦労さまに飛んだり駆けたり、記録に挑むことと大差はない。

一家の仕法から一村の復興へ——村から国へと……金次郎の夢は果しくなくひろがる。

天災や飢饉<sup>きん</sup>に苦しむ農民から、やたらに貢租を取り上げるだけの大名や武家が支配している当時の日本だ。

少年の頃から貧農の一人として、こうした苦悩<sup>くなう</sup>を厭<sup>いと</sup>というほどなめてきた金次郎だけに、武家や大名を自分の指導に従わせ、しかも同朋<sup>どうほう</sup>たる農民を救い上げようというのだから堪<sup>こた</sup>えられない。実に愉快な仕事だと彼は思っている。

小田原藩で千二百石どりの服部<sup>はつとりじゆらふ</sup>十郎兵衛<sup>え</sup>の家計の復旧をしてやったとき、大身の武士であ

きよくまり  
曲鞠おろく及び桜町仕法のこと

「それからなあ、今年で六年だよ、おろくさん――私も一所懸命でさ、もう少しで何とか目鼻がつくというのに……そこへ、その悪役人がやって来やがってなあ」

「ほんに憎たらしい奴ですなあ」

おろくは舌打ちまでして相槌を打つ。

女の首から手を廻し、乳房を探りながら、金次郎は少年のように訴えている。  
今日は朝から雪であつた。

風は全くない。粉雪が一定の密度で、止むこともなく、静かに降っている。

川崎宿南外れの、水除上手の下にある「玉屋」という小さな旅籠へ、金次郎は、もう十日ほども滞在して、おろくと爛れきっている

我ながらうじゃじゃけた奴だと思ふのだが、失意落胆の中年男にとつて、女のやわらかい肌身ほど頼りになるものはない。

あれから、おろくは、金十五両を金次郎から貰い、江戸へ出かけたが、その金は愛宕権現下の楊弓場の女主人に納まっている友達のおでんに預けてきた。

もちろん子供など生んだことはない彼女だ。

おろくは、五年前まで曲鞠芸人菊川助六の女弟子で、小六と名乗り両国に出ていた。友達



「十年……そこまでお考えなら、おやりなさいまし」

お波は、もと服部家の下女をしていた女だ。

服部家仕法の五カ年間に、金次郎は他人の家の切盛りで夢中となつて、栢山村の先妻と子供のところへはたまにしか帰らなかつたものである。帰るときは肉体の欲求を細君に鎮めてもらうときに限る。

「うちのひとは、私を商売女と間違えていなさる」

先妻のキノは憤然として離別を申し出た。止めても聞かない。ついに子供を残して出て行つてしまつた。

金次郎が、当時十六歳のお波に手をつけたのは間もなくのことだ。

お波は服部家の下女として、大いに金次郎を助けて働いてくれたし、経済仕法家という彼の仕事にも並々ならぬ興味を示している。

「一家のやりくりと違い、今度は四千石の土地を育てるのですから……うまくゆけば面白うございますねえ」と、彼女は言い放つた。

すでにこのとき、金次郎は栢山随一の大地主となつていたが、彼は、その所有する田畑のはとんどを七十余両で売り払い、一家をあげて、勇躍、野州桜町へ出発したのであつた。

まさに仕法家としての生命をかけ、背水の陣をしいた、と言つてもよからう。

とがさ、十両をお札場へ寄進して後も見ずに本堂を出て行ったのを見て、ほんて手をうつたもんだが、むさくるしい風体に似合ず、胴巻きは重いんだよ。それにさ、それに……」

「それに何さ？」

「ふふふ……桁外れにあの方も、しつっこいっていうことさ」

「何だ、しつっこいところが気に入ったのかい。いいかげんにおしよ」

今度はどの手で泣き落してやろうかと、指を噛み噛み考えながら、おろくは愛宕下のおてんの家を出て、四里半の道を川崎宿へ引き返して来た。

「主人が子供を渡したという男が、どうしても見つからず、仕方がないので、昔から面倒を見て下すった小屋の太夫たゆうさんに、お金を預けて、ようく頼んでまいりました」

「そうかい、そうかい。私は、もうお前さんに会えないのじゃないかと思つてなあ。よくよく帰つて来てくれたよ、おろくさん——」

灰色に暮れかかる曇り空を窓から眺めていた金次郎は、飛びつくようにおろくを迎えた。

小田原領内では、すでに「宮先生と呼ばれている彼も、おろくの手管には、すっかり丸め込まれてしまつたらしい。

おろくのような女には疎いが、農事全般には卓抜した見識を持つ金次郎だ。

若い頃から他家の飯を食べ、一字も駄目だった論語や大学に鬻りつき、とうとう自己流に読みこなしてしまつたほどの苦勞もしている。

五勺の菜種を村の廢地に蒔き、翌年に七升もの收穫を得たのが、少年の金次郎が初めて手

のおでんもまた同じ小屋に出ていた玉乗り芸人だったが、この方はおろくと違い細面の美人なので、今は大店の旦那の妾となり、楊弓の店を出させてもらっている

「チビ六」だとか「おかめの出来損い」だとか「串団子」だとか「仲間や師匠からも嘲笑されるし、その方は余り器用ではない曲鞠の芸にも見極めをつけたおろくは、俗に「信心深い男ほど、奥底は……」何とかだと言われることから思いつき、新商売に鞍替えをした

江戸周辺の神社仏閣を廻り歩き、信心深そうな中年男を引つけて集めた金は、男にもてなかつたウツプンをはらすため、若い男を金ずくで誘って湯治場などへしけ込む遊びに使用果していたのだが、此頃では、やっ先行先にも提燈を向ける気になり、いずれは何処かの茶店の権利でも買い取って、女ひとり、のうのうと暮すための軍資金にしているおろくなのだ。この商売を始めたとき顔に自信のない彼女はビクビクものだったが、やってみると意外に儲かる。

（へへん。これで私も満更じゃアなかつた……）

と、低い鼻を此頃ではうごめかしているのだが、実は、彼女の泥臭い顔つきや、出来たての串団子のシコシコと温かい歯ざわりを感じさせる肉体を、中年男は却って好む。また美人でないところが男にとっては手を出しやすいのである。

何時もなら「売り飛ばされた子供」を枷に、金を貰えば、時も早く逃げ出すおろくなのだが、

「それがねえ、おでんちゃん。あのひと、まだたんまりと持ってるんだよ。私もね、あのひ

進めてきている。大儲けを狙うのではなく、何処までも困っている者を助けるといふことまでだから、利益は少いが投機に誤りがない。

だから金次郎は、まとまった金もある。金がなくては仕事もやれないのだ。

桜町仕法にしても、廢地を復旧させるまでの年月と辛抱を村民に強いるためには裏づけがなくてはならない。

怠け者の腰が、いくらかでも鋤鋤を動かすようになれば、その保障を与えてやらねばならない。瘦せた人間が肥るのには今日明日というわけにはいかないのである。

金次郎は、小田原藩から貰う年俸も全部、桜町仕法へ注込んできたのだ。

馬鹿馬鹿しいと他人はいうだろうが、自分の金を注込んでやるところに値打ちがあるのだ。

「ろくに金も使わず、よくも復興させたものだ」と殿様は眼を見張るに違いない。

従つて、金次郎の成功は何倍もの反響をともなつて天下にとどろくのである。それか愉快だ。

しかるにである。

保身に汲々たる小田原藩の重役や藩士のうちには、彼等には出来得ない金次郎の働きを、近頃では、殿様がベタ賞めになつてきているので、大いに金次郎を妬み、隙あらは赤恥をかかせ、金次郎を葬つてしまおうと画策する輩が、かなりいるのだ。

むろん金次郎派の連中もいる。だから小田原でも江戸屋敷でも、金次郎について、派に分

にした財産であつた。当時の廢地廢田は貢租の対象とならない。彼はこれに眼をつけ、恐るべき天賦の精力をふりしぼつて荒地を開墾し、徐々に收穫を得た。

村の人びとは「キ印の金さん」とか「ぐるり一辺」とか言つて嘲笑したが、金次郎の努力が着々と実を結ぶのを見てからは口をつぐんだ。

「偉いんですね、旦那さんは……」

女に甘えて語る金次郎半生記に、おろくも肚の中では「うまい嘘をつきやアがる」と思つたが、眼を見張り唇をすぼめては、大げさに金次郎を讃仰して止まない。金次郎、良い氣持である。

「でも、そんなに働きなすつて、よく病氣もせず、今まで……」

「それがさ。私は生まれつき呆れ返るほど、精も根もつづくのだよ」

「お情け深いのも、やっぱり生まれつきなのでしょうか。ほんとに神さまです。旦那は……」

「いやあ。神さまはよしておくれ」

「いいえ、ほんと。ほんとなんですものウ」

おろくが、金次郎の首筋に唇を当て、舌でなぶつてやると、金次郎の息づかいは、たちまちに荒くなる。

（この男、どれ位お金を持っていやがるのかしらう）

金次郎の濃い体臭に埋まりながら、おろくは、またそれを考えている。

おろくには語らなかつたが、現在の金次郎は、金融業者としても小粒ながら着実な歩みを

置するところは、ことごとく僻論へきろんをもつてこれを破り、邑中うちゅうに出れば此件々を二宮命みやのいのちせりしといえども我は許さず、速やかに之を止めよ。もし我言に従わずんは必ず汝を罰せん。と、村民を威しつけたようだ。

そのために――奸民これに詔い、共に良法の成らざるをもつて愉快とす。のみならず良民を退け佞人を賞し、三邑を横行し大酒を飲み、口を極めて先生を嘲る。――ということになった。

豊田と結びついた無頼漢どもにより再び激化した暴力や博打の横行に、折角金次郎が柏山村その他から招んで人百姓にした者達も、堪えかねて逃げ出す始末だ。

金次郎は豊田を詰問した。

豊田は尖った鼻を指で撫でながら、青黒く腫んだ顔の表情ひとつ動かさず、押し殺したような無気味な声で、

「おぬし、武士に対してあらぬ言いがかりをつけた罪は勿論覚悟の前なのだろうな――」

「なれども、あなた様は――」

「おれが何をした？ 何の証拠がある？ え？ え？ おい、言つてみなさい――」

そう突込まれると確固たる実証を握つたわけでもない。

豊田は、貢租の取り立てや、それを逃れんとする村民からの賄賂わくわくの中を泳ぎ廻つて来た。たたか者だ。中々尻尾を掴ませないし、下手をすれば逆ねじを喰わされ、今までの苦心も水の泡となるばかりか、吉野一派の奸策によつて公吏侮辱罪のときものを押しつけられかね

れ、これが藩政にまでも微妙に影響してくるといった状態なのである

江戸家老の吉野図書は、反金次郎派の首魁であつた

「豊田。おぬし桜町へ行き、金めのやることを何から何まで打ち壊してこい」

吉野家老の密命を受けた藩士の豊田正作も、出世欲が並外れて強いくせに、出来ることと  
いったら、国許の郡奉行の下で村々の監督をやっていた頃に培われた弱いものいしめと収賄  
位なもので、まことに陰險極まりない奴だ。

吉野家老は巧みに工作し、豊田正作を組頭格の名目で、桜町陣屋の主席として派遣した。  
分家の宇津家では、もう一切口は出せない。金次郎が年々送る二千俵の米を貰つては、本  
家にペコペコしているばかりである。

ともかくも豊田正作は、名目上、金次郎の上役として桜町へ着任した

細君や子供と共に陣屋に起居していた金次郎は、内庭に面した八疊十畳の二間を豊田に譲  
つた。自分達は上間近くの六疊二室を使用し、充分に、豊田へは礼をつくしたつもりであつ  
た。

しかし豊田は金次郎の誠意などに全く応えることなく、早速に煽動工作をやりはしめたの  
である。

豊田正作について、あの有名な報徳記は、こう記している。

——性ははなはだ剛奸にして、先生（金次郎）の徳行を忌み、その事業を妨ぐ。先生の処



ばかりであつた。

細君も二人の子供も、陰惨な明け暮れに影響され、顔つき言葉つきまで変わってくる。「もういっそ辞めさせて頂き、栢山へ帰りましょう。あなたがお厭なら、私、子供を連れて帰ります！」などと、細君も声を震わせて口走るようになってきた。

「私もずいぶんと我慢をしたものだよ、ここで手を引いたら、今まで手塩にかけた土地も人も、死ぬ。私もまた、この仕事に失敗したら……世間の笑いものになるばかりか、これから先の自分の仕事に、全く自信が持てなくなるものなあ」

おろくに言つたところで、とてもわかつてはもらえまいと思ひながらも、つい愚痴をこぼしてしまう金次郎だ。

「何といつても今のおれには、この女が只一人の味方なのなものなあ」

金次郎は、おろくの温い乳房の谷間に顔を埋め、甘ったれては、わが苦渋と哀しみを、めんめんとのべたてる。

（存外ウブだよ、このおじさんは——）

と密かに嘲笑しながらも、おろくは満更ではなかった。分別盛りの大男に頼られているということは、おろくのような女にも格別な味がする。

（おれが行方不明になったら、殿様も家中の人びともきつと驚くに違いない。少しは困らせてやれ）

ない。

陣屋に詰めている藩士達も豊田正作の睨みに恐れ、または百姓上りの金次郎に従うことはないという下らぬ見得から、いっせいに金次郎の施策に難色を見せはしめた。

豊田は、こやつ等と語らい、小田原藩庁へも金次郎排斥の願書を数回にわたって出した模様である。

今までは、金次郎に仕法を頼む人は、金次郎の指導に背いたことはない。いや背くものは金次郎一流の親切な説得指導によつて、必ず勤労精神の復活を与えることが出来たものだ。それだけに、豊田の喉笛に噛みついてやりたいほどの憤怒を、卒倒する思いにこらえつつ、金次郎は、ついに決意した。思い余つた揚句にである。

即ち酒花の饗応によつて、豊田を懐柔せんというわけだ。

金次郎は陣屋の一室に酒肴をととのえ、女をはべらせ、屈辱を内蔵した硬張つた愛想笑いを浮べ、懸命に豊田をもてなしたのである。

「ふむ、左様か、折角の志ゆえ、よし、有難く頂戴しよう」

ニコリともせず、たらふく飲み食らい、白粉やけのした女を抱いて……後は知らん顔をして、依然、覆面の煽動と脅迫をつづけ、村民の勤労意欲を抹殺しようと暗躍する豊田正作なのだ。

饗応の代りに豊田の弱点を押えるなどという狡さは、まだこのときの金次郎にはなかった。後に残されたのは、以前に倍加した怒りと、豊田の嘲笑に疎む劣等感と、後悔の悩乱がある。

「でもねえ、旦那さん。この六年の間、旦那が面倒を見ておやりなすったお百姓さん達は、今頃、旦那のことを何と思っているんでしょうか」

「え……？」

「いい気味だと思っているのか、心配しながらも、悪人どもに押えつけられ、旦那を探しに行くことが出来ず、困っているのか……」

「ふうむ……」

さっと、金次郎の脳裡のうりをよぎっていくものがあつた。

「成程、お前さんにそう言われてみると……三カ村百数十軒の百姓達のうち、少く見つめて三分の一は、まだ私の味方だろうよ」

「だったら旦那。その人達が、何とか騒ぎ出したらよかりそうなものじゃありません」

「騒ぎ出す……？」

「旦那のお仕事を邪魔する奴がいたら、何とか手を使って騒ぎ出したらいいじゃありませんか。謀はかり事をもって謀り事を討つとか何とか、講釈でも言いますよ」

「ふうむ……」

三分の一の村民が味方なら、まだ打つ手もないわけではないか……

「おれは、この六年間に、自分で蒔いた種のことを、怒りに任せて、すっかり忘れていたわい！」

金次郎は、おろくの乳首を、またなぶりながら、

掬ねた感情と、吉野家老一派への面当つらあてが一緒になり、半は自暴自棄で、金次郎は桜町を出奔してしまつたのだ。

（まず弘法大師様こうぼうだいしの前で、静かに考えてみよう）と、川崎かわさきへやって来たのだが、とてとても考えがまとまるどころではなかつた。

その代りに金次郎は、身心をさいなむ毒虫を、いくらかでも吐き出すゴミ箱を得たともいえる。おろくもゴミ箱にされては、ちよつと可哀相かわいそうだが……。

（だがなあ、女房にようぼうや子供は、今頃、何をしているだろう。どんなにおれのことを心配していることか。いかん！ おれも、こんなところで女狂いをしては……）深沈たる冬の夜の闇ぐみの中で、金次郎は眠れなくなつてきた。

「ねえ、旦那さん。私、また明日、江戸へ行つてみるつもりなんですけれど……」  
悲しげなおろくの囁きである。

「何だ、まだ眠らなかつたのかい。ともかく、子供を早く取り戻もどすことだなあ、おろくさん」

「はい……」

明日は江戸へ出て、また戻つて来るつもりのおろくだ。悪い奴やつの手に子供が移されてしまつたので、あと二十両ないと、子供を返して貰もらえない——と、金次郎にふっかけてみるつもりなのである。

おろくは先ず、金次郎の意を迎えようと、

会い、私がひとつかけ合ってみよう」

「でも——あの、でも……」

「まあよい！ 私に任せておきなさい」

金次郎は断固として言う。何だか急に元氣一杯になってきたようだ。声にも威厳のようなものが感じられるし、おろくは今までの金次郎とは別人のような圧迫感をおぼえて、首をすくめた。

「畜生め、余計なことを思いつきやがって——」

夜廻りの拍子木が、雪の夜更けの宿場を縫って近づいて来る。

「ちよいとばかり、このおじさんの軀には別れにくいところだけれど……」

翌朝——金次郎が眼ざめたとき、おろくはすでに消えていた。

金次郎の蒲団の下（マコト）の胴巻きから、ごっそり中身を抜いて消えたのである。それでも胴巻きの底には、互面ほど、おろくの志が残されてあった。

### 金次郎出現のこと

金次郎が、おろくに逃げられたのは、おそらくこの年の正月下旬であつたろうと思われ  
が——二月十日の夜更けに、桜町領内の物井村に住む岸右衛門宅の戸を、そつと叩くもの  
があつた。

「騙すに手なしか……」と、呟いた。  
おろくは、ぎよっとした。

金次郎へのお世辞のつもりで、ペラペラとしゃべったことが、とんだ敷蛇になつては大変である。

おろくは思いきりよく、またも寝巻をかなぐり捨て、金次郎に挑みかかった。

「ねえ、旦那さん——ねえ……」

「ふむ、ふむ……」

「私、坊やを取り返したら、成田山へおこもりをします 断食のおこもりをね 旦那さんの

お仕事が、うまくゆくように……」

「そ、そうかい。よく言っておくれだなあ」

金次郎は落涙した。

彼は、急に、勢い込んで言つた。

「よし！ 明日は私も江戸へ出よう」

「え……う」

おろくは困つた。世話になる太夫元へ、両も包まないと、などと言つて小遣いをせしめてから出かけるつもりだったのである。

「いいんですよウ、旦那——」

「何、私も用がある。だが、お前さんの方が先だ。一緒に行って、その両国の太夫元さんに

良民達が、豊田一派の監視の眼を逃れつつ協議すること数回。正月二十日には、東沼村の七郎次と藤蔵が代表として、ひそかに江戸へ向い、小田原藩邸へ訴え出たというのだ。

二人は口を揃えて——二宮先生なくしては村々が立ち行かない。このままでは、六年も先生と共に苦しみ働いて来た良民達の努力は水泡に帰してしまふ。どうか、先生を探し出して頂きたい——と訴えたが、これが運悪く居合せた家老の吉野図書に、いち早く入ってしまつた。

「二宮のことは我らが処置をする。村民の口さはさむところでない。早々に立ち去れ！」呆気なく追い返されてしまつた。

青くなつて桜町へ帰つて来ると、村役人一同と共に陣屋へ呼びつけられ、豊田正作から大眼玉を喰つた。

「二宮は仕法行詰りを解決出来ぬ為、みずから辞任を申し出ておるのだ。この上、きこま達が騒ぎたてると、入牢申しつけるぞ！」

百姓達は青くなつた。

金次郎の細君お波も、子供を抱え陣屋の片隅にちぢこまつて、こつそりと暮しているばかりである。

「いっそのこと、あの豊田の寝込みをやっつけ、先ず眼の玉をくり抜いてくれべえと考へたのだ」

岸右衛門も凄惨な眼つきになつて、こう言う。



独りものの岸右衛門が戸を開けると、意外、そこには金次郎が立っているではないか  
「先生よう！ お前さまはまあ、一体何処に居やんした？」

仰天して、岸右衛門が叫んだ。

「叱ッ——ちよいと入れておくれ」

「へい、へい……」

「あとは戸締りをしておきなさい。よろしいか」

炉には新たに薪まきがくべられ、白湯さゆが出る。

悠然と湯を飲み、端座している金次郎を、おろくが見たら何と言うだろう。

かつては桜町領内きつての無法者といわれた岸右衛門がかしこまっているその前に坐すわっている金次郎には、長者の風格、気品さえも漂っているのだ。

この岸右衛門という男は、金次郎が最も手こずった村民の一人である。豊田正作から両刀を引いて癰癤うんやうを加えたような乱暴者で、これを感化するのに、金次郎は五年もかかった。

金次郎が、黙々と自ら鋤わをとり、岸右衛門の瀕死に直面した瘦地せうちを耕すこと一年余——  
ようやく岸右衛門は、金次郎の前に詫わびた。

三十八歳になる岸右衛門も大男だ。左の眉まゆから頬ほ、唇ちゆうにかけて刀疵うたなきずがある。

「先生はまあ、どうして仕法をおやめなさったのだね、おら達を捨ててよウ……」

「私が辞めたと言うのは、豊田正作か？」

「へえ。実はおら達、先生が消えてしまったもんで、いろいろと相談ぶつてよウ」

「いや、もうよい。本当にお前達がだ、私に戻つて貰いたいのなら、もっと、もっと死物狂いになつてくれる筈だからのう」

「死物狂い……？」

岸右衛門は腕を組み、けだものじみた光を両眼にみなぎらせ、考え込んでしまった。

金次郎は、静かに言った、

「この村々に、私は精魂打ち込んできた。名残りはつきない。だから一目、村の姿を見てと思ひ、こうして忍んで来たのだが——お前の家の前を通りかかつて、つい、お前の顔が見たくなつてなあ」

「先生！ うわ、もうたまらねえだ」

岸右衛門は号泣した。

このとき、金次郎は、さつと立ち上り土間へ降りた。

「先生！ ど、ど、何処へ行きなさる」

「もう会うこともあるまいよ」

金次郎の姿が闇に呑まれた。

すぐに躍り出た岸右衛門が、狼狽してあたりを探し廻つたが、ついに見つけることは出来ない。

そして、金次郎の去つた後には、村のために使つてくれと、金二十両の包みが残されていたのである。

やりかねない男だし、やたらに豊田を恐れて決定的な腹が決まらぬ村民達に、彼は業を煮やしていたのだ。

それにしても先生は、一体、これから先、おら達のことを捨ててしまうつもりなのか岸右衛門は涙を流し、唾を飛ばして叫び出した

「黙っていたのじゃわからねえ。はつきりと、先生の氣持を聞かせて下せえ！」

「私はな、死ぬつもりだよ」

「げえッ」

「もうあきらめた」

「いけねえ。死んじゃいけねえ」

「私は一人ぼっちだ。味方がない」

「何言つてなさるだ。おら達のことを忘れたわけじゃなかつぺー」

「お前方は、がやがや騒いどるだけで、結局は、豊田を恐れて手も出ないではないか」

「だから、おらが一人で罪をかぶり、あの野郎を叩ッ殺すつもりだと言つてるじゃねえか」

「駄目だ。豊田一人なら私でもやれる。しかし、このことは小田原藩全体が、私の言うことを聞いてくれなくては、とてもとても領内の村々を救い出すことは出来ぬのだよ。しかるにだ、かんじんの村人達が、いたずらに首をすくめて木ッ葉役人の言うがままになっているのなら、私一人が、いくら氣張つてみたところで無駄だ」

「だからよウ、おらは、おら達は……」

同勢は二十四名。今度は首を斬られても動かぬと坐り込んだ。

「どうしてもお聞き届けがならねえのなら——へえ、へえ、私どもは御公儀へ訴え出る決心でおりますので……」

表玄関で、岸右衛門は喚いた。

ようやく度胸も据ってきているだけに、腰抜け侍などの威嚇よりも迫力がある。

さすがは以前、桜町一帯の博徒どもと喧嘩して、一歩も退けをとらなかつた岸右衛門である。

今度は藩邸でも大騒ぎになった。

金次郎派と反金次郎派が、騒然と争いはじめる。

殿様の耳へも入らざるを得ない。

しかも殿様の太久保侯は、現在、幕府老中の席に連なっているのだ。

迂闊に追い返して、今度は町奉行所へでも訴え出られたら大事になる。殿様の面目は丸つぶれとなるわけだ。

「これほどの大事を、そのほうは何故、わしに告げざつたぞ。この大たわけめ！」

殿様に叱りつけられ、吉野家老は這々の態で引き下つた。

かくて重役協議の結果、とりあえず岸右衛門他二名を代表として藩邸にとどめ、小田原へも急使が飛ぶ。

金次郎の故郷、栢山村一帯へも搜索の手を伸ばしたが、行方は全く知れない。

翌日、岸右衛門宅で、秘密緊急会議が開かれた。聞けば、金次郎は細君子供にも会っていないという。となると、どうも宮先生は只ならぬ決心をされているに相違ない。今更ながら一同は殺氣立ち、色めき立ってきた。

### 藩邸騒擾のこと

二月十五日 再び、岸右衛門や横田村の忠左衛門を先頭に同勢十五名が、小田原藩江戸屋敷へ押しかけた。

桜町から江戸への行程約二十七里である。旅費には金次郎が置き残した二十両を充て、一同の意気は天をつくものがある。皆、必死だ。

これを追って、豊田正作の命を受けた無頼漢、鬼神の清七が率いる八名が桜町を発し、江戸への道中筋で、請願隊一行に追いつくと、威したりすかしたりして連れ戻そうとかけた。

「こいつら！ 邪魔をしやがると片っぱしから首根っこを叩ッ斬るぞ」

岸右衛門が腰にぶち込んだ長脇差を引き抜き振り回した。皆とつた杵柄で、こうなると岸右衛門の面目、まさに潑刺たるものがある。

結局、無頼漢どもは岸右衛門に説得されてしまい、共に江戸へ向うということになった。小田原藩邸は、芝の北新網町にあって、増上寺の表参道に沿った一角にある。

帰村した代表を迎え、全村民も、ようやく団結して、二宮先生、本宿へ行こうという気配が濃厚となつてきた。

金次郎は雀躍せきやくりした。

今や何時いつでも、桜町へ帰つてよいのだ。形勢の見通しは明るい。

（だが、待てよ——おれほどの男が、おろくのような女の手玉にさえ乗つてしまったのだ。こつちが落着いて見ておれば、あわてふためいている人間の隙すきへ、どうにでも喰い込めるものなのだからなあ）

四千石の領地ともなると、農民だけが相手ではない。武家階級の、しかも封建制度の腐臭ふんぷんたる政治の網の目が、ひしひしと彼の仕事を取り巻いている。

（これから至誠一筋でもいくまいなあ）

状況が好転しそうだからといって、何もせかせかと嬉しそうな顔を見せるには及ぶまい。おろくは、あくまでも金次郎を騙だました。

（だが俺は、真実を嘘うその皮でくるんでみせてやろう——それにはどうしたらよいのか……江戸の町の片隅にある膳飯屋いんぜんめしやで、汁と飯を頼張りながら、作戦にふける金次郎の頭に、ひよいと浮んだのは、最後の夜に川崎宿の旅籠はたごの二階で、

「私、坊やを取り返したら、成田へ断食のおこもりをします。旦那の仕事がうまくゆくように……」

と、おろくが言った心にもないお世辞の言葉だった。

「おら達は今まで、昔からの習慣でよ。あんまり侍というものを怖がりすぎていたのだせうど。やれば、おら達にもやれるでねえか」

と、岸右衛門等は邸内の動揺ぶりを見て意気軒昂たるものだ。その反面には、

「先生に万一のことがねえように。見つけ出すまで間違いがねえように……」

彼等は与えられた一室で、終日、大声に、

「なむあみだぶつ」をとねえるのだ。

藩邸内は、異常な昂奮に巻き込まれはじめた。

（うむ。これなら大丈夫——）

と、金次郎は、ますます闘志が燃え上るのをおぼえた。

金次郎は、藩邸付近の盛り場や、茶店飯屋などから、こうした情報を集めていた。

大名屋敷の内のことなどは、洩れそうになくて案外洩れやすい。屋敷内の仲間や出入りの

商人達の口から、他愛もなく外へひろまるものなのである。

同時にまた、金次郎は桜町まで二十七里余の道を十日の間に二往復して、桜町領内の情報

を集めることもした。おどろくべきエネルギーだと言わざるを得ない。その間を縫って彼は

また、これからの働きのための資金調達に、小田原、箱根と、ひそかに駆け廻っているのだ。

その辺の宿屋、商店などに金次郎は大分投資をしてある。

金を持ち逃げしたおろくのことについては、もう考える暇もない。金次郎の五体には精気

と闘志が湯気をたてている。

「折角でございますが、丁度その、どの部屋も、ふさがっておりますので……」  
「黙れ！」と、大喝である。

今や行方不明の彼を探し出すために、藩庁も血眼になっている。噂も江戸市中にひろまりつつあるし、公儀の耳へ入ったら御家の一大事である。金次郎は着々と勝利の頂点にさしかかっているのだ。

今や、おろくの乳首をなめてよろこんでいた金次郎とはわけが違う。闘志は自信を生み、自信は余裕を生む。余裕は人間に威容を与える。

「御亭主は、一たん承知なすったではないか。私は心願の筋あつてまいったものだから、お前さん方は私の何を疑うのだな」

出した五十両には見向きもせず草鞋わらじを脱ぎにかかり、金次郎は悠然ゆうぜんと言った。

「私はな、大久保侯家来、二宮金次郎と申す。よろしいかな」

その翌朝——亭主豊蔵みずから、あたふたと江戸へ向つたらしいことを知り、金次郎は、ほくそ笑んだ。小田原藩十一万三千石の家来が本当ならともかく、もしや大盗賊の首領などではあるまいか。そうならば旅亭の主人として大変な手落ちになる。そうかと言って、むやみにお上へ届け出て、もしも小田原藩士が本当だとなれば、これまた容易ならぬ責任を引きかぶらねばならない。

成田から江戸まで約十三里。乗物を使って急げば丸一日で行ける。

いっそのこと、小田原藩江戸屋敷へ急報して、事の正否を確かめるが無難だと、亭主は決



## 断食参籠のこと

下総国、成田山新勝寺は、朱雀天皇の天慶二年に草創されたもので、本尊は不動明王堂塔伽藍三十三棟を数える有名な古刹である。

二宮金次郎が、門前の旅籠、小川屋の門口に立ったのは三月十三日の夕暮れであつた。大伽藍の彼方、ゆるやかにひろがる薄紫の丘陵が、夕映えの空の下で、けむるような春の匂いを漂わせている。

「心願あつて断食祈誓のため、当山へまいったものだが、泊めて頂きたい—

ぬーっと上間へ入つて来た金次郎を見て、亭主の豊蔵は、いささか異様の感を抱いた。垢くさいツギハギだらけの着物に破れ笠をかぶつた巨漢なのである。

鋭く光る双眸も尋常でないし、長く肥えた鼻から下は髭に埋まつている。それに耳の大きく長いことといったら、唇の後から顎のあたりにまで垂れ下っているのだ。

「へえ、へえ。そりやもう、お泊めはいたしますが……—

金次郎の風格に気押されながら、亭主は、しきりに彼方の番頭へ眼配せをする。番頭は首を振る。女中頭は手を振つて眉をしかめる。

金次郎はニヤリと胴巻きの中から、切餅二つ五十両を出し、ボンと置いた。これがまた、主人の不安を増大させることおびただしいものがあつた。

千馬は青くなった。

「さ、急ぎなされ、急ぎなされ」

上人に尻を叩かれ、永山千馬は、あたふたと江戸へ引き返す。七日ほどたつと、今度は桜町から岸右衛門以下五名が成田へ来て、帰任を嘆願する。これも追い返した。

これからは一切、金次郎の指揮に従うという村民一同の連署をとつてこいというのだ。岸右衛門達が引き返して行くと、人れ違いにまたもや永山千馬である。殿様白筆の誓約書を持つて来たのだ。

金次郎の出した条件は、文句なしに容れられたのである。

「あのな、金どのがな……」

「は——まだこの上に？」

「この紙に何か書いてあるそうな——」

「げッ」

千馬は蒼白そうはくとなつて紙面に眼を走らせる。

陣屋に於て金次郎を助けて働く役人は、かねて金次郎と仲のよい温良誠実な横山周平以下、足軽仲間に至るまで人選され、すぐさま豊田一派を一掃し、この人びとを桜町へ派遣せよ、とある。

（いかに何でも、足許を見すぎるわい。）

心したものでらしい。

その日の夕刻に、金次郎は山門を潜り、ときの成田山第八世の貫首、照胤上人に面会して事情をつぶさに語った上、翌十五日から参籠堂へ入り、二十一日の断食を開始した。

江戸藩邸では、引っくり返るような騒ぎになった。

「二宮は当家の重臣である。丁重に取扱うてくれ」と亭主を帰す一方、またもや殿様を中心に重役会議だ。その結果として、藩士永山千馬他二名が、急遽、成田へ飛ぶ。

永山千馬は成田へ着くと、直ちに金次郎へ面会を求めたが、金次郎は断然これを承知しない。何度頼んでも駄目だ。

「二宮氏が戻らねば、当藩すこぶる困惑いたす。何とぞ御上人よりおとりなし願いたい。お願いつかまつる、お願い……」

千馬は照胤上人に低頭して泣きついた。

上人は、のこのこと参籠堂へ出かけ、やがて戻ってくると紙に書いたものを千馬に渡し、「そりゃな、金どこの条件じゃそうな」

「はッ——」

読んでみると——桜町帰任の条件として「今後は一切、藩庁からは自分の仕事に口さしはさせぬこと」と「陣屋へ出張の役人は、自分の選択に任せること」と、この二件を殿様の名をもって書類にして持つて来いというのである。

もしも駄目ならば自分は幕府奉行所へ一切の事情を訴え出た後、自決する決心だとある。

四月七日の朝——金次郎は、厚く照胤上人をはじめ、小川屋の主人にまで礼をのへ、桜町へ向つた。

若葉は燦々<sup>さんさん</sup>と陽に輝<sup>ひ</sup>き、空は底抜けに青い。

二十一日の間というものは、一日二碗の水だけでした金次郎である。

今朝ようやく、重湯<sup>おもゆ</sup>一碗、大根おろし少々を摂<sup>と</sup>つただけだが、青白い顔<sup>おもて</sup>貌には勝利への歓喜と仕事への意欲が、すさまじい生氣となつて躍動している。躰<sup>からだ</sup>が空へ浮き上るようで、おぼつかない足どりだったが、彼は、一歩一歩と街道の上を踏みしめていった。

その一歩一歩は——徹底的な実践主義をもつて疲弊する町村を救うこと六百余件 偉大なる二宮尊徳へ、彼が成長する途<sup>みち</sup>に通じていた。

（みんな待つておれよ。すぐにおれは帰るのだからなあ）

金次郎が成田を去つて四日目の夕暮れどきに、まだ三十にはならぬ小柄<sup>こへら</sup>な女が、門前町の旅館を金次郎の名を告げて尋ね歩き、そのうちに町でも評判の金次郎の噂を耳にすると、間もなく、しょんぼりと夕闇<sup>ゆふぐみ</sup>の中に姿を消したという。

〔講談俱樂部<sup>クラブ</sup>〕昭和三十五年十一月号

千馬は、武士たるものが「百姓上りの金次」にこき使われる悲哀を味わいつつも、殿様から、「一宮を引き戻す重大な使命は、そのほうの首にかかつておるのだぞ」と威かされてきている。どうにもならない。

「ほい、急ぎなされ、急ぎなされ」

「はッ——」

汗みずくの千馬は、またも江戸へ駆け戻る。

数日すると、村民代表の連署をたずさえ、岸右衛門が成田へ到着した。

「金どのはな、満願の日に、ただちに帰るそうじゃよ」

照胤上人の言葉を聞き、岸右衛門は泣き伏した。実際ここで金次郎に放り出されたら善良な村民達は、どうにもなくなる。

岸右衛門は天にも上るような気持で桜町へ帰って行く。

二日後に永山千馬が報告に馳せつけて来た。言いつけ通り選抜した人員は、間違はなく桜町へ出発し、豊田正作以下は小田原へ左遷されたというのである。

「明日一杯にて、金どなの断食行は満願となる。ただちに桜町へ戻られるそうじゃよ」

「はッ。有難うござった。いや、これにて手前も……」

「宮仕えも楽ではありませぬのう」

「は——？ いや、その……」

「おつとめ大儀、あは、は、は……」

恥



原八郎五郎は、お登喜の方が御殿へ戻る前に、急用あつて退出をした。

児嶋右平次が花の丸に潜入したのは、この直後であつた。

右平次は、城をかこむ濠の闇の中に小舟をあやつり、千曲川ちまがわの方向から、花の丸の濠うゑぎわまで舟を入れ、そこから花の丸へ忍び込んだ。

右平次の目的は、お登喜の方よりも原八郎五郎を斬ることであつたのだが、信玄茶屋の近くで、警護の成瀬某という侍に発見され、斬合いとなつた。

右平次は、たちまち成瀬に傷を負わせ、猛然と信玄茶屋へ殺到したのだが、目ざす原家老が居なかつたので、もう仕方がなく、

「奸婦め、死ねい!!」

わめいて、お登喜の方へ襲いかかつた。

右平次の一刃は、お登喜の方の肩先を傷つけたが、二の太刀は送れなかつた。警護の藩士たち八人に囲まれて闘ううちに、お登喜の方は悲鳴をあげつつ、侍女や家来にまもられ、城内へ逃げ込んでしまつたのである。

児嶋右平次は齒がみしつゝ奮闘し、囲みを切り破つて濠の水へ飛び込んだ。

たちまちに、しずかな夏の夜の松代城下が火のついたやうになつた。

児嶋右平次を探索すること四日にわたつたが、ついに、右平次の姿を城下の内外に発見することが出来なかつた。

松代藩では、領内へ探索の人数をくり出すと共に、十余名の藩士を選抜し、諸方の街道筋



## 一

寛延二年（一七四九年）七月十八日の夜——五ツ時（午後八時）少し前のころであつたが……  
信州松代十万石の藩主・真田伊豆守信安の愛妾、お登喜の方が、児嶋右平次というものに襲撃をされた。

この日の朝から、真田信安は軽い下痢をおこし、城内本丸の居館に静養をしていたが、お登喜の方は、夜の涼気をたのしむため、花の丸の庭園へおもむいた。

花の丸というのは、城の三の丸西側にある宏大な庭園であり、濠（ほり）ばたに近い小高いところに（信玄茶屋）とよばれる亭（ちん）があつた。

この亭は、いま真田家の居城となつている海津城をはじめてきずいた武田信玄を記念して建てたものだ。武田の紋を壁にすきこみ、長押は大竹の二ツ割、釘かくしは松笠。垂木は松の皮つきという古雅なものである。

「殿さまが、おみえあそばさぬので、今宵は、ほんにさみしいこと……—

などともらしつつ、お登喜の方は、藩の執政として今をときめいている原八郎五郎を相手に、茶道の大沢晏全が点ずる茶を賞味した。

雪洞（ぼんぼり）が、いくつも運ばれてきて、夏の夜の庭園の情趣に、お登喜の方はひたりきつていた。

家も同じ有楽町だし、ともに徒士組に属してい、俸禄は十石二人扶持といったところで、下級藩士であつた。

万之助は三十一になるが、右平次は四つ下の二十七歳。母ひとり子ひとりの家である。この右平次の母が、息子が城下を逃げた晩に、自殺をした。息子のしたことを知つての上の覚悟の自決である。

「おれだったら、どうしたろう。父へ、事前に原襲撃のことをうちあけたらうか……う。う。右平次のかわりに、自分が花の丸へ忍びこむことになつていたかも知れないのだ。それは、梅雨期に入つたばかりのことであつたが、ふだんは道場で顔を合せるだけで、あまり深い交際もなかつた児嶋右平次が、

「明日の夕暮れに、奇妙山ふもとの地藏堂へ来てくれぬか。待っている、待っているぞ。」その日、万之助が城を退出して、大手前の道を紺屋町の通りに出たとき、うしろから万之助を追いぬいて行きながら、右平次がささやいた

「……………」

答える間もなく、右平次は駆けるようにして遠去かつて行つた。

翌日は、非番であつた。

どんよりとした曇り日だったが、万之助は傘をぶらさげて、少し早目に家を出た。右平次が指示した場所へ行き、しばらく待っていると、やがて、

「待たせたらしいな」

へ討手として、さしむけることになった。

「憎いやつ、憎いやつ。憎いやつじゃぞよ、右平次めは——」

溺愛<sup>できあい</sup>するお登喜の方へ刃<sup>やいば</sup>をあてた児嶋右平次への激怒で、真田信安は顔貌<sup>かほ</sup>をゆがめ、豈<sup>いか</sup>を踏みならし「右平次めは、釜<sup>うま</sup>ゆでにしてもあきたらぬやつじゃ」と叫んだ

三十六歳になる十万石の大名としては、いささか幼稚な怒りの表現である。

## 二

「早まったことをしたものだな、右平次も——」

森武兵衛<sup>もりぶへえ</sup>が、城から帰宅した息子の万之助<sup>まんのすけ</sup>に言った。

「はあ……」と答えたが、万之助は気が重くなった。

「実は……」

「何だ？」

「私、上意討ちの人数に加えられました——」

「右平次を追うのか？」

「当然でしょう、藩としては——」

「そりゃ、そうだが……だが、困ったな、それは——」

「はあ」

森万之助と児嶋右平次は、城下の青山大学の道場で一刀流をまなび、技倆<sup>きりよう</sup>も伯仲している。

今のところ、お為派の動きは、ごく目立たぬものであるし、同志の数も少ない。

原派でも「お為派」に対する警戒の目を光らせているから、うかつに動くこともならないのだ。

森万之助は、父にも妻のみのにも内密で、望月主米と志を通じ合っていた。この春ごろからである。

（このままでは、今にどうにもならなくなる）

と、万之助は思っていた。

（それにしても、何とか血を流さずに、藩政をあらためるようにしたいものだ……）

### 三

原八郎五郎は、百五十石の御納戸おなと見習から主君の真田信安に取り入り、千曲川の治水工事に卓抜した功績をあらわし、疲弊した藩の経済をたて直すことにも大手柄をたて、次第に信安の寵愛ちやうあいをふかめた。

そして、ついに家老職へ加えられ、千二百石の執政となり上った。

いまの真田家は、原八郎五郎の威勢になびかぬものなしといったところだ。

ここまではよかったのだが、原は権力を得ると同時に墮落をしはじめた。

参勤で出府をした殿様の信安と共に、新吉原しんきちげんでの遊びに我を忘れ、玉屋の桜木という遊女を身うけして、これを信安の愛妾にさせ、松代へ連れてきたのも、原が万事はかったこと

児嶋右平次があらわれ、万之助を地藏堂うしろの山林の中へさそつた。

「何だ？」

「うむ……」

右平次は、するどい眼<sup>め</sup>で、万之助がうんざりするほど永い間、黙つたままこちらを見つめていたものだが、

「実は……」と、きり出してきた。

つまり、一緒に原八郎五郎を襲撃しようというのである。

「おれ一人でもよいのだが、万一しくじると、取返しがつかぬ。そうなると原も油断をしなければならないだろうし、ともかくやるからには、ぜひとめてしまわねばならぬ。おぬしが力を貸してくれると百人力だ」

「なぜ、おれを見込んだのだ」

「まず、人柄<sup>ひとがら</sup>だ。次に、おぬしの剣<sup>けん</sup>だ」

「それにしても……」

「望月主米様<sup>もちづきしゅめ</sup>から、おぬしが、お為派<sup>ためは</sup>の一人であることを聞いておる」

「そうか……」

お為派というのは「正義派」ともいふべきもので、藩政を牛耳<sup>ぎやうし</sup>る原八郎五郎一派の勢力を倒し、真田十万石を安泰にみちびこうとする一派であつた。

望月主米は、家老の一人である望月治部左衛門<sup>じぶざゑもん</sup>の嫡子<sup>ちやくし</sup>で、お為派の指導者でもある。

それに、こんなうわさもある。

お登喜の方がみごもっている子は、殿様の子ではなく、原八郎五郎の子だといふのである。殿様が江戸にいる留守中、原は、しばしば、お登喜の方の部屋をおとすれ、欢笑にふけつて、はばかりことがない。今や二人の密通は間違いないと断言するおみ派の者も、かなり多い。それなのに、人のよい殿様は、

「そちの生む余の子の顔が早う見たい。男かの、女かの……なとて、お登喜の方へ、とこけるような眼を向けては、家臣の前もかまわず悦に入っているといふことだ」

「これは、おれ一人の考えでやることだ」と、児嶋右平次は言った。

「早ければ、早いほどよい」

それはそうだと、森万之助も考えている。

現代と違って、封建時代の大名家の家の政治機構は、米を中心とした経済機構と同じように、単純なのである。

今のうちなら、原八郎五郎さえ殺してしまえば、原派の勢力は、かなり動揺するといふといふ。

このまま放っておくと、原を殺しただけではすまなくなるおそれがある

原派の勢力が固まり、お登喜の方が男子でも生むようなことになつてからでは、めんどうになるばかりであつた。

である。

この遊女あがりの側室が、すなわちお登喜の方なのたそればかりではない。御殿は新築する、遊芸を汜濫<sup>はんらん</sup>させる、女、酒への耽溺<sup>だんじやく</sup>はむろんのこと、数年の間に、藩財政は、がたがたになってきてしまっている。

この時代の経済というものは、米の收穫を基盤にして成りたっているのだから、収支の関係が、単純かつ明快なものであり、だから、とこの大名の家でも、少し支出<sup>しゅしゅ</sup>がかさむと、その影響は、たちまちに具体化してしまう。

濫費のしわよせは、みんな領民と家来へ向けられる。

領民の租税に重味<sup>おもい</sup>がかかり、藩士の俸給は「半知御借り」ということで、半分も殿様に借りられてしまうのだ。

この半面に、原一派のものたちは、城下の豪商とむすびついたり、租税の取立をどうにかしてしまったり、殿様と原八郎五郎に尻尾<sup>しつぽ</sup>をふつては、悪いことはかりするようになる。

こういうところへ、お登喜の方が懷妊<sup>くわいにん</sup>をした。生れる子が男か女か、まだわからぬが、男だったら大変なことになる。「お為派」は眉<sup>まゆ</sup>をひそめている。

殿様には、すでに豊松<sup>とよまつ</sup>といって十歳になる男子が江戸藩邸にいるのだ。

けれども、お登喜の方におぼれきっている殿様だから、もしも愛妾<sup>あいせつ</sup>、男子をもうけるときは、その女狐<sup>めぎつね</sup>の口先ひとつで、どういう風に風向きが変るか知れたものではない。お登喜の方の子が貞田十萬石をつぐということになれば、原八郎五郎の権勢は不動のものとなる。

罪となるだろうが、それでもよい。きつと、お為派の人々が乗出して、くれよう。恩田様も黙つてはおるまい。殿を説きふせ、御家たて直しが、たやすくなることは必定だ。」

恩田民親は、お為派の信望になつてゐる真田家重代の家老の一人であり、原八郎五郎も恩田家老にだけは一目をおいてゐるほどの人物なのである。

「おぬしを見込んで、この大事をうちあげたのだ。何事も御家のため、命を捨ててくれい。一熱誠を面<sup>おもて</sup>にあらわし、児嶋右平次は、万之助に尚<sup>なほ</sup>も迫つた。」

「だが、右平次。血を流すことは……」

「まだ、それを言うのか!!」

「うむ……」

右平次は、白い眼をむき出し、万之助を睨んだ。殺氣が彼の体から発散しはじめた。

「おれを斬る気か——」

しばらく沈黙があつて、

「意気地なしめ」

右平次が吐いて捨てるように言つた。

「ともかく、もう少し待て。よく考えて見よう、二人して　な、右平次、それからでも遅くない」

「うるさい」

「おれは、決して他言はせぬ。信じてもらつてよい。どうだ、もう少し……」



「おれと右平次とで力を合せれば、やってやれぬこともあるまい」

このところ、毎夜々々、信安は、お登喜の方と原八郎五郎をしたがえて、花の丸庭園に涼をとることがわかつている。

その殿様の眼前で、奸臣の原を斬ってしまったおうと右平次は言うのだ

幸いに、御船蔵の足<sup>あし</sup>軽<sup>かる</sup>で内川小六という者がお為派の一人だし、これが、ひそかに小舟を出しておいてくれるという。

「どうだ？ 万之助殿。やってくれるか」

と、児嶋右平次は万之助に迫った。

「おぬしもおれも、まだ、お為派の一人だと思われてはおらぬ。原へ近づくな。今だ、いずれは、おれたちも原一派から睨<sup>にら</sup>まれるときがくる。そうなつては手も足も出なくなろう」

「それは、そうだな」

「やってくれるか？」

「待て」

「何!!」

「どうも、血を流すのはなあ……」

「何を言うか。御家のためにすることだぞ」

「わかっている」

「原を斬らねば、どうにもなるものではない。むろん、殿はお怒りになって、われわれも死

徳川將軍が諸国大名を江戸へよびつけるこの制度は、大名たちを監視すると同時に、領国における大名の反乱をふせぐための意味もふくまれている。

それはさておき、国もとにいて、一生、江戸へ行けぬ藩士もいるが、殿様の行列に加わり江戸という日本の大都會を見ることは、若い藩士たちにとって、胸がおどるような興奮にそえられるものである。

何しろ、約一年も江戸藩邸で暮すことが出来るのだ。

つとめの暇をぬすみ、江戸市中を見物するだけでは、どうしてもすまなくなる。

江戸藩邸の侍たちの手引きで、国侍も遊び方をおぼえるようになる。と言つても、森方

之助のような下級藩士では、せいぜい私娼となじものがよいところで、それには、深川の岡場所なぞは格好のところであつた。

そのころは深川も新開地といつてよいほどだったし、遊びどころにも活気がみなぎつていたものだ。土橋の娼家は、深川八幡の二の鳥居前を東へすぎたところに密集していて、後年になると、かなり高等な岡場所となつたようだが、万之助が通い出したころには、まだまだ気やすく遊べたものである。

女と泊ると十匁ほどだが、夜を明かすわけにはいかない。江戸屋敷へつとめる身であるから、主として昼遊びをやるのだが、これだと六、七匁で遊べる。

当時は、銀六十匁が一両である。十両あれば一年の貧乏暮らしに事を欠かぬというわけだから、たとえば一度出かけても、下級藩士には手痛い出費なのだ。

「もうよい」

児嶋右平次は、草の上へ唾を吐きつけ、濃い夕闇の中へ消えて行つた。

森万之助は、奇妙山ふもとの林の中に立ちつくしたまま、いつまでも動かなかつた。

（右平次は勇気のある男だ。よくも思い切つて、そこまで決心をしたものだ）

同感なのである。

斬る相手が原八郎五郎でなければ、万之助はよろこんで右平次と共に命を捨てる氣になつたろう。

けれども、万之助には、どうしても原八郎五郎という男を憎めないものがあつた。

（原にしても、殿にしても、もともとは決しておろかな人々ではないのだ。血を流さずに、何とかならぬものか……またそうするのが、お為派のつとめではないのか……）

どうしても、自分の都合のよい考え方になつてしまふのだ。

万之助が、原八郎五郎に敵意を抱けぬ理由は、次のようなものであつた。

#### 四

四、五年前のことになるが、森万之助は、参勤で江戸へ上る殿様のお供を、二度ほどつづけてつとめたことがある。

真田家では、六月に松代を出て、翌年の六月までが参勤であつて、一年おきに、藩主が江戸へ行く。いわゆる参勤交代だ。

だのが、おみのであった。

上橋の娼家は「呼出し」というので、女は外に暮らしていて、客が来ると呼び出されるのだ。おみのは、当時、十八か十九というところで、体も心も荒れていず、万之助を夢中にさせた。

おみのは、決して身の上を語らなかつたが、(武家の出だ)と、万之助はにやんでいた。戦争がなくなると武士もひどいもので、幕府は容赦なく大名の家を改易にしたり、取りつぶしにしたりする。そのたびに浪人があふれる。浪人の娘が暮しに困って娼婦になることなど、もう珍しいことではなくなつてきている。

だが、娼婦は娼婦だ。こうした女を、いかに微禄者だとはいえ、真田十萬石の藩士の嫁にすることは出来ない。

万之助は、一年して殿様と共に松代へ帰つて来たが、どうもいけない。おみののことが忘れ切れないのだ。

「万之助。後を引くなど申してあつた筈だ。そんなに、いい女だったのか？」  
父親の武兵衛に訊かれて、

「妻に迎えたいほんです」と、万之助が答えた。

「馬鹿も休み休み言え」

武兵衛も、あきれ返つた。

ところが、万之助は、見事、おみのを妻にしまったのである。

大方は、藩邸の人々に借金をこしらえて国もとへ帰ることになるのだが、万之助の場合は、はじめての出府のときに、

「江戸を見てこい」

父親の武兵衛が、金五両をぼんとくれた。

（ど、どこに、こんな金が……）と、目をまるくしていると、

「わしも若いころ、お前の祖父さまから、こうしてもらったことがある。始末してためておいたものだが、いずれは、お前にくれてやるつもりだったわ」

「はあ……」

「遊んで来い。だが、その金が無くなったら、びたりとやめるのだ。いずれは女房をもらい、子をうみ、十石二人扶持の微禄者として、お前も一生を終る。とてもとても、女遊びをすることなど出来ようわけがないものな……若いときは二度とない。金は少ないが、うまくつかえ。は、は、は……」

口やかましく、物堅い親父だとばかり思っていたのに、こんなことをしてくれるとは……万之助は感激した。

戦国の世が遠く去ってからの武家社会には、こうした家庭教育もかなり行われていたようである。

さて……。

森万之助が土橋の子供屋とよばれる娼家の中で「住吉屋」というのへ入り、はじめて呼ん

万之助が、はじめて出府したとき、駒井理右衛門は、わさわさ藩邸内の自室へ呼んでくれ、  
「御城下では、おぬしの剣術が評判じゃそうな……」

「いえ——めっそうもないことで」

「居合の名手だと聞いておるぞ」

「とても、そのような……」

「見せぬか、抜いて見せぬか」

「は——」

ほかならぬ駒井の言葉である。

「では……」

万之助は、大刀を取りよせてもらい、部屋の隅にあつた将棋盤の上から、歩の駒を一つつまみあげ、これを駒井にしめしながら、しずかに片膝を折つた

八畳じきの部屋の中央である。

駒井は目を見はつていた。

万之助は、つまんだ小さな歩の駒を、ひょいと天井へ向けて放り上げた。同時に「む!!」と、万之助はうめくような気合を發した。

万之助の手から光芒が走つたかと思うと、たちまちに鞘へ吸いこまれた。畳に落ちた二つの歩駒は、四つになつていた。

投げた駒が畳へ落ちるまでに、万之助の刀は、これをそれぞれに両断して、鞘へおさまつた。

これには、江戸藩邸で代々留守居役をつとめている駒井理右衛門が、役買つてくれた留守居役というのは、江戸における外交官のようなもので、金まわりもよく羽振りもよいそれだけに重要な役目だし、森万之助のような下士が近づきになれるものではない。

ところが、駒井理右衛門は、万之助の父・森武兵衛を非常に目にかけてくれていた。武兵衛は中年のころ、六年にわたって江戸詰めを命ぜられ「勘定方下役」をつとめたことがある。

駒井理右衛門も当時はまだ若く、家督したばかりであつたか、

（森武兵衛は、見どころがある」と目をつけた。

勘定方というのは、たとえ下役でも日常の経理を扱うものだから、こうしても、おこほれにありつこうとするし、出入りの商人などともなれ合つたりするものだが、武兵衛は、悠々として、大目に見られてもよいおこほれも拾おうとはしない。

十石という俸禄に、二人扶持の加増があつたのも、駒井理右衛門か、武兵衛の誠実な奉公ぶりをみとめ、藩の重役たちへ運動をしてくれたからであつた。

このとき、武兵衛は同僚たちの羨望と嫉妬にかこまれて、弱りぬいたものだ。

こういうわけで、今でも、武兵衛は季節の変り目に折目正しい挨拶状を江戸藩邸の駒井へ送っているし、駒井もまた、よく手紙をくれたり、江戸の菓子などを送りとどけてくれたりするのだ。

「おやじからの手紙を見たぞ。ふつつかな息子だが、よろしゅうたのむと書いてあつた」

「いいかげんにせよ。田舎侍が岡場所の女に迷うて、これを妻にするなどは、話にもならぬ」

きびしく叱りつけた。

「駒井様にそう申されては、仕方ありませんぬ。あきらめます」

万之助は、がつくりと首をたれて、しかし思いきりよく言つた。事実、どうにもならないからだ。

哀しかったが、それを顔や態度にはあらわさず、万之助は、黙々とつとめにはげんだ。

十日後になって、駒井が万之助を呼びつけた。

「万。あの女を、そつと見てきたぞ」

「は……？」

「あの女ならよい。お前が見込んだ氣持もわかる。感心しかねるが、どうしてもとお前が言うなら、うまくはからつてやろう」

「駒井様……」

「嬉しいが、馬鹿——」

おみのは「住吉屋」に、それほどの借金も残してはいなかった。もう少しで足がぬけるところだったという。あのような商売に身をせずめたのは、病父のためであり、その父親も去年死んでしまったので、おみのは天涯孤独の身となつていたのだ。

駒井は、親交のある旗本・下山伝八郎にたのみ、おみのを下山の養女ということにして、



というわけだ。

「ふーむ……こりゃ、おどろいたわ」

駒井が唸<sup>うな</sup>るように言うと、

「御他言下さいませぬよう……」

万之助は、つつましく頭を下げた。

以来、駒井が万之助を可愛<sup>かわい</sup>がることなみなみではなくなった。

「江戸へ来ることも仲々にあるまい。たのしんでこい」

駒井が、金十両をくれた。大金である。

「いえ。父からも……」と、父親がくれた金五両のことを話すと、駒井は破顔して、

「ほう。武兵衛も見かけによらぬ大した男じゃ。見直したぞ」と言った。

十両は、そのまま万之助にくれた。

藩邸での勤務をおこたることなく、余暇をぬすんで、おみのとの交情を思うままに深めることが出来たのも、その十両があればこそだったと言えよう。

一年おいて二度目の出府がきまつたとき、万之助は何となくおみのと自分の運命がきまつたような気がした。

（だが、おみのは、まだ深川にいるだろうか？）

いた。非番の日を待ちかねて深川へ駆けつけた万之助は、おみのと再会することが出来た。駒井理右衛門は、万之助から相談をうけたとき、さすがに、

原は、平然たるものであった。

万之助と違つて、原のすることだから、それが通つたのだが、それにしても、  
（原様のまねは、一寸出来ぬことだ）

万之助は感服をした

そのころは、まだお為派などというものもなかったし、原も、幕府から命じられそうになつた長野・善光寺修築の課役を、たくみに他の大名へまわしてしまい、外交手腕の冴えを見せたりして、藩内の人気をあつめていたものだ。

原は、この遊女あがりの妻をいたく愛し、この春には岩尾という男子をもうけた。

原の妻も、おだやかで親切な人柄らしく、当時は事々に輕蔑の目を向けていた原家の家来や女中たちまでもが、今では、すっかり「奥さま」に手なずけられてしまつてゐるさうだ。  
（原が、お登喜の方と密通をしたという噂なぞ、根も葉もないことだ）と、万之助は考へてゐる。

自分の場合をふりかへつてみても、原のしたことが痛いほど胸にしみてくるのだ。

（原八郎五郎という人は、女というもののよさを、しつかりとつかみとつてゐるらしい）

原への共感はず愛情に變つてきた

その原を自分が斬るなぞということは、思つただけでも厭であつた。

お為派は「何」という情ないことだ。真田十萬石の家老職が遊女あがりを妻にするとは……」と、怒り嘆いたものだが、おみのを妻としてゐる森万之助から見ると話は別になつて

森家への縁組をとりはからつてくれた。

さすがに、おみのは何度も辞退をしたが、いさとなると「では、よろしゅう……」と、臆する様子もなかった。

万之助の思つた通り、おみのは、陸奥・一ノ関三万石、田村家浪人の娘だった。

駒井理右衛門の若党がおみのを連れ、一足先に帰国した万之助の後を追うようにして、松代へやつて来た。

森武兵衛としても、駒井が仲へ入つてくれた嫁であるから、否やはなかった。

「万之助。くれぐれも気をつけよ。このことが知れたら、只ではすまなくなるぞ」

売女あがりの妻をもっているなどということは、貞田家中にも、かつて聞いたことはない。ところが、それから三年たった現在では、万之助のほかにも、もう一人、同じような侍があらわれた。

原八郎五郎であった。

威勢ならぶものなき執政の原八郎五郎の妻は、殿様の愛妾と同じ、新吉原の遊女あがりだ。つとめに出ていたところの名を「浜川」という。

原は、お登喜の方と一緒に、浜川をも身うけして、病死した前妻のあとにすえ、正式の妻にしたのだ。

しかも、堂々とやつてのけた。お為派からは嘲笑されたし、原派のものもあきれ返ったが、「言いたいやつには言わせておけ。好きな女を妻にするが、なぜわるい」

討手は四手に別れて、右平次探索の旅に出ることになっているのだ。

「早いものだ。お前が松代へ来てから、もう三年になるな」

「はい」

そのころは、細くて、しなやかな肢体しんたいをしていたおみのが、今では、むくむくと肥ふり出してしまひ、

「こう肥るのは、子が生れぬ体なのでしょうか——と、おみのは不安そうである

「そんなことはない、わしも万之助をもうけたのは、四年もたってからだったものな」と、却かえつて舅しゅうこの武兵衛がなぐさめている。

おみのが松代へ来たとき、武兵衛は、

「ときに嫁女、おぬしは、万之助のどこが気に入ってくれたのじゃ——と訊きいたことがある。

「はい。はじめてお目にかかりましたとき、万之助さまは、わたくしという女を、金で買うた女だという眼めで、ごらんになりませぬでしたもので、それが嬉うれしく……—

うなじを、まっ赤にして、ふるえながらも、はつきりと言いったものである。

娼婦しょうふとは金で買うものだから玩弄かんりゆうするものだという觀念があるかぎり、娼婦の愛をうけることは出来ない。

森万之助が、はじめて女を知ったのは、松代城下・長国寺門前にある娼家においてである。相手の女は越後・塩沢の生れで、せんといった。この女から、万之助は真情のこもったもてなしをうけたものである。とても金で買った女とは思えなかった。まごころのこもった女

くる。

これが人間の情というものだ。

政治家としての原八郎五郎は大きらいだが、人間としての原は好きだということになる。感情というものは、すべての規律や権威を乗り越えてしまうものであり、規律や権威に感情が迷いこむと、その力は、たちまちに弱くなってしまう……ということを、万之助は、つくづくと感じないわけには行かなかった。

## 五

児嶋右平次こじまうへいしが、お登喜の方を斬りそこねて逃亡してから七日目に、十二人の討手うちづが松代城下を出発した。

その中に、森万之助がふくまれていたのは皮肉である。

これは、原一派が万之助をお為派の一人だと思っていないうことになるわけだ。

「父をたのむぞ」

出発の前夜、万之助がおみのに言った。

「はい。なるべくは、あなたが児嶋右平次さまと出合わぬよう、みのは祈っております」  
「おれも、それを祈っているよ」

おみのは、単に斬合の危険を避けてもらいたいからそう言ったのだが、万之助の場合は別の意味からであるのは言うまでもない。

そのとたんである。

「早く、早く!!」

霧のようにけむる雨の幕につつまれ、ほんやりと見える中州才蔵が叫ぶと同時に、黒い影が中州へ躍りかかるのが見えた。

「わあ……」

岸へのぼりかけた中州が、悲鳴をあげて川水へ落ちこむのを、万之助も虫倉も、はつきりと見た。

「兎嶋だ! 右平次だぞ」

抜刀した虫倉が、左手で笠をはねのけ、川水をもとかしくはねあげながら突進した。兎嶋右平次は、川の向う岸で、ぱったりと中州才蔵に出合ったらしい。雨の幕にさまたげられ、互いに気づかなかったものだ。

「おのれ——」

右平次は逃げようともせず、川へ飛び込んで来て虫倉六郎を迎え撃った。あつという間もなかった。

絶叫をあげて、虫倉は川水の中へ倒れ伏している

「森万之助か——」

兎嶋右平次が刀をかまえながら、

「きさまも、原の飼犬になって尾をふりはじめたのか——」

体をはじめて知った男の幸福というものは、それが良家の子女であれ、娼家の女であれ、本質的には少しも変りがないのである。

女にとつても男にとつても、はじめての相手いかによつて、一生の異性観というものが無意識に決定される。万之助にとつて、せんという女を知ったことが、とりも直さず、おみのとの交情へつながっているのだ。

森万之助は、虫倉六郎・中州才蔵という二名の藩士と共に、中仙道へ向かうことになった。お為派の人々は、どういう眼で、児嶋右平次を討ちに行く万之助を見送ったことだろう。二カ月後のことである。

その日も、雨であつた。

雨ごとに秋の冷気が身にしむ季節で、万之助たち三人は、中仙道を京までのぼつてみて、それから引返し、前夜は関ヶ原泊りで、しとしとと降りけむる雨の中を垂井、赤坂、美江寺とすぎ、ぼんでん村の外れにある「いつぬき川」を渡り、合渡へ出ようとしていた。

その日は合渡泊りで、明日は、みなと町から岐阜へ出る予定であつたのだ。  
「いつぬき川」は徒歩渡りである。

三人とも袴はつけず、裾を高々とからげた着物の上に合羽をつけ、笠をかぶっていた。  
「早く来いよ」

中州才蔵が、先に川へ入り、さつさと渡つて行くうしろから、やや遅れて万之助が虫倉六郎と共に川へ踏み込んだ。

森万之助は、中州・虫倉両人の死体を合渡の宿へ運び込み、その始末をしてから、そのまゝ行方不明となつた。

赤坂・南部坂の真田家江戸屋敷へ、万之助の手紙がとどいたのは、その年も暮れようとする或日であつた。駒井理右衛門宛の手紙なのである。

万之助は、およそ次のように言つてきていた。

……もはや、すべての事情も判明したと存じます。殿の御上意をうけつつも、児嶋右平次を斬れなんだ私であり、同じように、原様をも斬れなんだ私であります。右平次の正義に共鳴しつつも、奸臣の原八郎五郎を誅することの出来ませなんだわけは……。

と、万之助は自分の妻と原の妻を通じて、原に抱いている好感の理由を率直に記してきている。

……同僚二人を眼前に斬られつつも、尚、殿の命にそむいた私であります。そして、命にそむいたことを正しいと今も信じている私であります。願わくば、血を見ずして御家安泰の日の早からんことを祈りつつ……俸禄を食む資格のない私は、二度とふたたび、松代の地を踏むまいと心にきめております……。

駒井理右衛門は、万之助の手紙を一読してむずかしい顔つきになつた。

国もとの老父や妻に対して、万之助は一言もふれてはいなかつた。

もちろん、使命を放り捨てて脱藩をしたわけであるから、森家のものは、すべて「押しこめ」というかたちになつてゐる。



「違う」

「来い!!」

「待て」

「ふん。二人斬られて、きさま黙っているのか」

「右平次。いかに上意とは言え、おれは、おぬしを斬れぬ」

「ふん。斬れるつもりでいるのか」

「逃げる。早く、逃げてくれ」

「ふん。それでもお為派か。原の言いつけをきいて、のこのことおれの首をとるため国もとを出て来たのに、いざとなると手も出せぬ。おい、森万之助。きさまは、つかみどころのない奴だ。意気地なしだ。いや、国もとにおるお為派なぞ、みんな意気地なしばかりだ。誰ひとり、おれの後につづこうとはせぬ。畜生!」

忿懣の叫びをあげ、児嶋右平次は身をひるがえし、向う岸にたちこめる雨の中へ駆け去ってしまった。

森万之助は、笠をかぶって川の中に立ちつくしたまま、身じろぎもしない。

そのうちに万之助は、がっくりと、首をたれてしまった。  
沛然と、雨が叩いてきた。

「そのことでござる　あまりにも寛大なる処置をうけ、実は、おとろいております」

「ふむ……」

万之助の手紙一件について、駒井は武兵衛に何も語らなかったが、

「あれで、原殿は、根っからの悪人ではないのだ」

「私も左様思いまする」

「ただ、原八郎五郎はな、あまりにも殿の御寵愛がふかく、そのために、ついつい、殿を自分の友達のように……それも幼いころからの親しい友達のように思い込んでしまっているのだ。それが、そもその間違いなのだが、おそらく原は、自分で、そのことに気づいてはおるまい」

「このままにて、すみましようや」

「いや、すむものではない。ま、見ておれ」

駒井理右衛門の言ったように、二年後の宝暦元年十二月一日　原八郎五郎は藩主・真田信安の怒りにふれ、解職と同時に知行召上げとなって、実兄の原郷左衛門へ「御預け」ときまった。

これは、原とお登喜の方の姦通の事実が判明したからであった。

お登喜の方は、すでに流産をしていたが、罪状判明すると共に江戸へ送られ、その身柄は町方へ「追い放ち」となった。

お為派は、この証拠をつかむまでに、三人も犠牲者を出したという。

門の扉は釘づけにされ、見張りの足輕が三名ずつ交替で森家に詰めている。もしも万之助が立戻ることあれば、捕縛の上、しかるべく処刑されるわけだ。

ところで、駒井理右衛門は、万之助が旅の空の下で書いてよこしたあの手紙を、そのまま、江戸から松代へ……すなわち原八郎五郎へあてて送りつけたものである。

駒井も豪胆なことをしたものだ、が、原は、この万之助の手紙を読むと、すぐに、森武兵衛と嫁のおみのの釈放を命じた。

真田家と言う「追い放ち」である。

これで万之助の罪は消えたわけだが、同時に、森家は浪々の家となったことになる。

武兵衛が、おみのを連れて松代城下を立退こうという前夜に、原八郎五郎からの使いのものが、ひそかに森家をおとずれ、

「原様よりの饒別でござる」

金包みをおいて行つた。あけて見ると金三十両が入っている。

「もううておけい」

森武兵衛は淡々として、この金をふところへ入れ、嫁と共に、先ず江戸へ出た。

駒井理右衛門は、江戸へ出て来た二人を迎え、ねんころに世話をやいてくれた。

「武兵衛。おぬしは大変な息子をもつたものだな」

「おそれ入ります」

「それにしても、原殿が、ようも……」

そりと暮しつづけ、宝暦四年の師走<sup>しわす</sup>七日に病歿をした。

こののち、おみのは伊勢屋方へ住込み、女中働きをはじめた

宝暦五年三月――。

森万之助が、ひょつくりと真田の江戸藩邸へ、駒井理右衛門をたずねて来た六年ぶりのことである。

「あらわれたな。いくつになった?」

駒井が訊くと、

「三十七歳になりました」

見ると、こざっぱりとした紬<sup>つじ</sup>の着物・袴をつけ、みじんも浪人暮しの垢<sup>あか</sup>がついていない。

「何をしておった? 今まで……」

「お聞き下されますな。恥を申しあげねばなりません」

「ふむ……原八郎五郎のこと、聞いたか?」

「御家も、めでたく……」

「いや、そのことではない。お登喜の方との密通の一件のことだ」

「いえ……ま、まことにござりましたか?」

「おう。まことであつた」

はあ……と嘆息をもらし、森万之助は青ざめて口もきけなかった

「落胆いたしたようだな」

（このことを万之助が知ったら、何と思うであろう……）

駒井理右衛門は慥然としたものだ。

藩政も乱れに乱れ、領内では百姓一揆が起るし、俸給の未払いに耐えかねた藩の足軽たちが結束してストライキをはじめるなど、みにくい藩内情をさらけ出した事件が頻発した。

こんなことを幕府に知られたら（知られずにはすまなかつたが……）一大事である。

藩政不行届きという名目で、真田十萬石が取りつぶしにあうかも知れないのだ。

駒井理右衛門は、家老の恩田民親と力を合せ、幕府閣僚にも運動をし、合せて藩政の改革を押しすすめた。

真田信安も、すっかり目がさめたかたちだが、そのときすでに遅く重患の床につき、間もなく歿した。宝暦二年四月二十九日である。

宝暦四年の秋になると、嫡子の豊松がめでたく家督をつぎ、伊豆守に任ぜられ、幸弘と名乗って、名実ともに真田の当主となった。ときに十六歳である。

執政の座には恩田民親がつき、かの「日暮硯」で有名な事績を残すことになる。児嶋右平次は、堂々と帰参をした。

「永い間、苦勞であつた」

と、新藩主・幸弘からもねぎらわれて、役目にもつき、のちには昇進して郡奉行をもつとめたという。

森武兵衛は、おみのと共に、浅草諏訪町・伊勢屋儀兵衛という紙問屋の裏の長屋に、ひっ

今となつては、万之助が帰参をするのに何のはばかりこともなかつたし、恩田家老も、駒井理右衛門も、しきりにすすめてくれたのだが、

「おのれがおのれにあたえた恥は、今さら消えるわけのものではございませぬ」

森万之助は、頑<sup>かん</sup>として応じなかつた。

（「別冊小説新潮」昭和三十八年一月）

「はあ……」

「まあ、よいわさ」

「私というやつは、まことに、まことにもって、おろかなものにござりました」

「いや、そうでない」

駒井理右衛門は膝ひざをすすめ、

「おぬしに、あれほどの心をかけられながら、それを裏切った原八郎五郎の方が、おろかも  
のなのだ。なれど万之助……おぬしのそみ通り、血を見ずして事は成ったぞ」

くわしく、駒井は万之助に、あれからの出来事を語ってきかせ、

「さて……おぬし、親父おやじどのと女房にようぼうどののことは何も訊かぬではないか？」

「恥ずかしながら、そのことをうかがいたく、あらわれました」

「さもあるう」

「父は？」

「少々遅かった」

「やはり……」

「なれど、女房どのは待ってござるぞ」

「は……」

「万之助。おぬしの眼に狂いはなかったようだな」

へそ五郎騒動





そ太郎」とよび、平左衛門なら「へそ左衛門」とよばれる。だから、勘定方に属して三十石二人扶持・平野弥兵衛の次男に生まれた小五郎は「へそ五郎」ということになる。

しかし、平野小五郎は二十七歳の春に、めでたくこの呼び名を返上することかてきた。納戸方の下役で二十五石余という下級藩士・山崎源右衛門の養子に迎えられたかである。

「平野のへそ五郎め、うまいことをしたものだ」

若い藩士たちの間で、このことは非常な評判になった。

それも山崎家の一人娘の恵津が城下屈指の美女であつたからで、彼女が洗いさらしの貧しげな衣服を細い体にまとい、道を行くのを見かけた某重役の次男が一度にのほせあがり、父親にせがみ持参金つきの贅入りをのぞんだこともある。

また、城下の豪商で藩の用達をつとめる八田嘉助が百両の大金をつみ、恵津を息子の嫁にとのぞんだこともある。

それほどの美女の贅にと、これは山崎家の方から小五郎をのぞんできたのだ。

平野家では前年に老父が病没し、当主は小五郎の兄・弥一郎であつたが、もちろん、もくもくなく承諾をした。

「これで肩の荷が下りたわい おれの弟ながら小五郎が、二十七にもなった大きな體をこのせまい家の中に置きどころもない様子で、むつつりと押し黙っているのを見ると、おれはもう氣の毒やら腹立たしいやら……いや、よかった、めでたい、安心だ、何よりのことだ」

## 一

そのころもまだ、家中の次・三男をよぶのに「へそ者」の名称をもつてすることが当然となっていたものだ。

つまり、あってもなくてもよいもの、という意味で、母胎にあるときにはしかるべき機能をもち使命も果たした、この人体の一部も、やがて漠然と腹部に出産の痕跡をとどめているにすぎなくなる。

家をつぐのは長男にきまっているし、弟たちはひたすらに養子の口のかかるのを待つか、長兄が急死でもしてくれぬかぎり、さむらいとして世に出るわけには行かない。

藩士の次・三男が「へそ」呼ばわりされるようになったのは、先代藩主の信弘のころからで、当時は藩財政の窮乏がもつともひどく、御殿で殿さまがつかう灯明油さえ俵約していたほどだし、殿さま自身、昼飯をぬいたこともあるそうだ。

「わしがところには大めしくらいのへそが五人もおる。つくづく、きゃつらの顔をながめて見では、ようも生んでくれたものだ」と女房どのがうらめしゅうなるわい――

などと、そのころは上級藩士でさえこぼしぬいたほどであるから、下上の家の次・三男がどのようにわびしい生い立ちをしたか、およそ知れようというものである。

「へそ」という名称について、たとえば平太郎という次・三男なら、これをどこそこの「へ

では禄高も七百石にのほり家老職につき權勢をほしいままにしていた。

原が、四年前に領国が大洪水に見舞われた折に、それでなくとも首がまわりかねていた藩財政をたて直し、大規模な治水工事をやってのけた手腕は、彼の位置を不動のものにした。どこから金を引出したもののか、それはさておき、現在では「原内閣」の治政の下、殿さまも家来も一種ふしぎな享樂の風潮につつまれているようだ。

そのかわりに、城下の富商たちが藩士の書いた借用証文を何枚も手にするようになっていゝるし、ひどいことには、上級藩士が城下の路上で商人にへらへらと頭を下げ愛想笑いをうかべるといった風景がめずらしくようになった。

さらにひどいことは、下級の士への皺寄せである。藩の足輕千余人は年に三両から五両というわずかな給金もろくに支払つて貰えぬという有様になってきている。

それでいて、家中の侍どもは太鼓や笛を習いはじめたり、めくり加留多の賭事などに熱中しはじめてゐるのだ。

殿さまは、去年に参勤で江戸へ上つて今年六月に帰国したとき、江戸・新吉原の玉屋という店の遊女で桜木というのを身受けし、これを側室として連れてきた。原正盛もまた、これと同じ玉屋の遊女・浜川という女を身受けし、これは何と正式の妻にしている。

上がこれなら下も……というわけで、平野小五郎あらため山崎小五郎が養父の跡目を相続し、二の丸外の御藏屋敷内にある用部屋へ出勤した第一日に、

「小五郎め、弁当はどうだ？」

得体の知れぬ涙をほろほろこぼしながら大よろこびをした兄は、

「それにしても山崎の老人は、小五郎のどこを見込んだものかな」  
妻をかえり見て、ふむと膝をうち、

「なるほど、おとなしいが取柄の小五郎なれば、わが家の養子もきつとつとまろうと思うたに違いない」

うなずいたのへ、妻のよし、が、

「美しい恵津どのを妻にするかわりに、小五郎どのは、昼餉が食べられぬことになりましたなあ」

眉をひそめた。

山崎源右衛門の昼食ぬきは誰知らぬものはない。お城へ出ても弁当を持って来ない、小さな骨張った肩をいからせ、白髪頭を微動もさせずに、黙念として他の藩士が弁当をつかうのをながめているのである。

これは、先代殿さまが身をもつてしめした儉約ぶりを、そのままわが家風としているのだという。

「結構なことだが、なれど現在の我藩は昔日のそれではない。食が足らぬで家族に病人でも出ねばよいが……かというて、これをとがめるわけにも行かぬしの」

藩政を一手に切りまわしている家老の原八郎五郎正盛が評判をきいて苦笑をもらした。

原正盛は、二百石の御側役から昇進を重ね、現藩主・信安のただならぬ愛寵を受け、いま

どのような侮辱をあたえつづけたか、それをのべるにもおよぶまい。

一月二十三日の昼食時にも、例によつて例のごとく、弁当ぬきで端座している山崎小五郎に向けて一同の軽侮のささやきと視線が集中された。よくも飽きぬものであった。

太鼓が鳴り、執務が再開された。

納戸役というのは、殿さま身辺の物品管理と会計をあつかう小納戸と藩家全体のそれをあつかう大納戸に別れてい、小五郎が属するのは後者である。

別に非常時でも戦時でもない正月のことだし、蔵屋敷内の用部屋には執務中も下らぬ雑談がおこなわれていた。

小五郎は書類を見ている。

彼は、まったく孤立していた。

それでいて平気なのである。くり返し書類を見つめていて飽きることを知らない。

「小五郎め、何を考えとるのかな、いま……」

「たきたてのにぎりめしの匂いでも思い出しておるのだろうよ」

などと、ひそひそ話をやるものもいる。

そこへ、関口喜兵衛が、ぶらりと入つて来た。

喜兵衛は、執政・原正盛の親類にあたる男で、御側御納戸役に任じ、殿さまの身辺に奉仕してなかなか羽振りもよい。禄高も去年の夏に二百五十石と昇進をし、小五郎なぞにとつてはろくに口もきいてもらえぬほどの上役といつてよい。

「これは見ものだぞ」

同僚たちが、ひそひそと語り合い、武士たるものにあるまじき好奇の目で、默念と書類を作成している小五郎を見まもるうちに、どーんと昼の太鼓が鳴った。

一同、弁当をひろげる。

小五郎は筆をおき机の前に正座し、そのまま空間の一点を凝視した。

「うへ……やはり持参しておらぬ」

「気の毒にのう」

「空<sup>す</sup>き腹で美女を抱いても……う、ふふふ……」

小五郎の耳へはとどかぬが、聞くに耐えぬささやきが飛び交い、意地の悪い視線が小五郎へ集中した。

小五郎の妻の恵津が、あれほどの美女でなかったら、この度合もいくらかは軽かつたろう。だが、山崎小五郎はいささかも動ずることなく、昼の休みがすぎると、また落ちついて墨をすり筆をうごかしはじめた。

## 二

年が明けて、延享<sup>えんきやう</sup>四年となつた。

すでに、小五郎が山崎家の養嗣子<sup>ようしし</sup>となつてから半歳を経過している。

この間、依然として弁当ぬきの小五郎に対し、先輩・同僚たちの視線が、唇<sup>ちびる</sup>のうごきが、

「御役目中に、つまらぬことなぞ考えぬほうがよい」

「は……？」

「あまりに女房どののことを思いつめては空き腹に毒じゃぞ」

用部屋中にひびくように笑い、独言のように、しかも誰の耳へも通った声で、もう一度、

「空き腹で……」

といい、さらにもっとも鄙猥な一語を加えた後に、

「……子も生めまい」

いい捨てて、喜兵衛は用部屋を出て行った。

後は、こらえかねた一同の笑いが用部屋の中にどよめいた。

山崎小五郎の双眸が、きらりと光ったようであった。しかし、それも一瞬のこととて、小五

郎はふたたび静かに書類へ目を落した。

小五郎が思わず放心して微笑したのは、そのとき、今朝、玄関へ送って出た新妻の恵津か

ら、はじめて彼女が懐妊したことを知らされたことを思いうかべたからである。

「そうか……よかったな、恵津。父上には帰ってからおれが申しあげよう」

こういつて出仕した小五郎なのだが、まさかこの日が、自分にとっておそるべき一日になることなど、思ってもみなかった。

関口喜兵衛は喜兵衛で、

（少し、いいすぎたかな……わしも昔のわしではない。下のものへ対して、あのように野卑



関口喜兵衛は恰幅かつかくのよい五十男で、原の手ひきと殿さまの愛寵あいそうによって年毎としごとに立身たちみして来たよろこびと得意さが顔貌かんぼうにも身のこなしにも露骨ろこつであった

その日、喜兵衛は用部屋すきさかりきそうの杉坂力蔵すぎさかりきそうに所用があつてあらわれ、一同が頭を下げるのへ「ふむ、ふむ」と、うなずき返しつつ、杉坂の前へ行き何か話しはじめた

ごく短い間のことで、話し終えると関口喜兵衛が、

「では、たのむ」

杉坂へこういって、腰を上げたそのときである

喜兵衛の視線が何気なく向うの山崎小五郎をとらえた。

そのとき、小五郎は書類から目を放し、ぼんやりと空間を見つめていた。

小五郎の目と唇のあたりに、かすかな微笑がうかんでいた。

「おい……」

と、関口喜兵衛が杉坂力蔵の袖そでをひき、小五郎をあごで指した。

杉坂も、にやりとして何かささやいた。どうせ、ろくなことではなかったろう。

喜兵衛は、ゆつくりと出口へ歩をうつしながら、

「これ、小五郎」

と、よんだ。

「は……?」

はっとした小五郎へ、喜兵衛が、

身の信念によつて実行しつづけてきたことなのであつた

現代でも日本の農業政策は米を主体にしたものだが、封建時代には米が日本経済すべての主体となつていたのであるから、たとえ一家の経済であれ、一国の財政であれ、これが貧しいときは俚約の実行が第一となる。

いまの藩内の風潮は、ただもう借金の上台の上に成り立っている享楽、<sup>ぜいふ</sup>浪費なのであり、藩自体が幕府から年賦返済で借りている金も莫大なものだ

借金をして財政をささえているのも原正盛の外交手腕だといへばそれまでだが、借りは必ず返さねばならない。

これは藩庁のみのことではなく、藩士たちも借金だらけになりながら贅沢の味におほれこみ、賭事の流行も、彼等が博戯の利によつて借金を返さうとするさもしい心がうごいてゐるからであつた。

だが、山崎家には寸毫の借錢もない。

昼飯をぬいたので健康に差しかえるなどというのは、源右衛門や小五郎にとつて、一戦もない世にあつて、武上がこれほどのことを忍ぶに何の苦勞があるのた—と、いうことになる。

藩財政の行きづまりは目に見えているのだ。いやその前に、もつと苛烈な惨事が起るような直感さえしている。

近ごろは、領内の百姓・町民たちへも無理無体な年貢や租税を強要し、藩士たちの俸給す

なことをいふべきではなかった)

と思ひもしたが、

(それにしても、山崎小五郎というやつ、飼ひならした猫ねこのようなやつしゃ、わしをにらむこともようせなんだわい。どうも家中のへそ者にはああいふ放曠散漫はうかうさんまんなるやつらが多い。こりゃ、何とかせねばならぬな) すぐに忘れた。

その夜、帰宅し夕飯をすませてから、小五郎が養父・源右衛門の居間へ来た。「申しあげておきたいことができまして……」

小五郎は、今日の出来事をあますことなく養父につたえ、

「下々のものが申したのではなく、これは殿さま御側におつかえし、藩中でも名の通つたものが私わたし、人のみにではなく、藩士多勢のものの前にてはつきりと申したことでござる」

「ふむ……それで？」

「ゆえに放つてはおけませぬ」

「ふむ……」

小五郎のいい分は次のようなものであつた。

昼飯をぬくことについては、養父の強制をうけてしていることではない。養父は「わし、人の信条をもつてしてきたことを聲のおぬしに押しつけるつもりはない」といい、小五郎出仕のときは必ず弁当を持たせるように恵津へ命じた筈である。だから弁当ぬきは、小五郎自

「その理由をきかれても困るがな、ただあやつなれば、おぬしにも合おうし、むすめにも合う男と見たまでじゃ」

いえば和尚の人格を信じ、だからその見るところを信じて小五郎を智に迎えた源右衛門なのだが、この夜ほど、智の意外な一面を見ておどろいたことはない。

いつもおだやかで無口だし、源右衛門が隠居をした半歳の間に、この智は苦もなく山崎家の体臭をわがものとしてしまった。

けれども、ここまで小五郎が明確な判断力と実行力をそなえた男だとは思ってもみなかったのである。

「なれど、おぬし、ようもそこまで心を決めたものだな」

源右衛門がいうと、

「自分ではようわかりませぬ 瞬間に決意いたしました」  
智は、素直にこたえた。

養父は、手文庫から金の包みを取り出し、

「さむらいの死金、二十両ほどある 持つて行けい」

「要りませぬ 私に関口喜兵衛殿を討ってから、逃れるつもりはありません」

「何」

「関口殿には一子・市太郎がおります 私に敵持ちになりたくありません、市太郎に敵討ちの苦痛を味わわせるつもりはありません」

ら半知御借りということ、つまり殿さまが家来の俸給を前借りし、それで吉原の遊女なそを身受けしたりしているではないか。

まさにこれは一国の非常事態なのであって、山崎家のみではなく、藩士のすべてが昼飯ぬきで当然なのである。

山崎小五郎が関口喜兵衛を討つ、と決意したのも単なる恨みからではない。喜兵衛から受けた侮辱などは、毎日のように味わいつくしてきた小五郎であつた。

一国の藩主の側近くつかえる武士の口から出たことだから捨てておけないのだ。すべてをきき終えてから養父がいった。

「思うままに、やれい」

その声には感嘆のひびきがあつた。

去年の正月に、山崎源右衛門は城下・大信寺の住職で、懇意に願っている成聞和尚に、むすめの縁組について相談をしたとき、和尚は言下に、

「そりゃあな、わしならば、も二もなく平野のへそ者を推輓したい」

と、こたえたものだ。平野家の墓所はこの寺にあり、和尚は小五郎の幼時からよく知っている間柄であつた。

「ははあ、平野殿の……？」

「うむ。小五郎なれば、おぬしのところの家風に合おうよ」

「左様で……」

その朝、というのは延享四年二月七日のことであるが、明け方から降り出した粉雪が城下に淡くつもった。

勤務の藩士が登城するのは辰ノ刻（午前八時から九時）の間ときまつていて、関口喜兵衛が殿町の屋敷を出たのは御城の太鼓が鳴り終えて間もなくのことである。

喜兵衛の屋敷の前通りを北へ少し行くと前面に藩の馬屋があり、ここを左へ曲ると御蔵屋敷で、この裏手を濠に沿って進めば、すぐに大御門前へ出る。

仲間と足輕を一名ずつ供にしたがえた喜兵衛が袴姿に高下駄をはき、信濃傘とよばれる白張りの傘をさして馬屋の裏土堀を曲ったとき、

「関口様」

声をかけ、これも登城の杉坂力蔵が近寄って来た。

杉坂は一人である。

道の向うにも登城の士の姿が二、三見えた

「おう」

関口喜兵衛が、杉坂の挨拶へゆつくりとうなずき返したときであった。

馬屋と評定所の間にある幅半間ほどの小道からあらわれた仲間風の男が、つと二人の前へ寄って来た。

喜兵衛たちが男の走り出た小道のすぐ傍に立ち止ったところへ、呼吸を合せたように雪の幕を割って出た男が、いきなり笠をはねのけ、

「ほう……」

「人を殺せば死罪が当然。私は、その場で腹を切ります」

これをきいて養父の両眼が感動にかかやいた

「さてさて……まことの武士の心得を事もあろうにわが智とのがそなえていたとは思ひもよらんのだわい。わしは、おぬしをわが家に迎えたことを誇りに思う」

「父上。その前に私を離縁していただきとうござる」

「いうな。おぬしは山崎……いや、わしの代りに関口喜兵衛を討つも同然じゃ」

「父上。まだ一つ、申しあげたきことがござる」

「え……？」

「恵津が、身ごまりました」

### 三

小五郎は山崎家から離縁され、浪人となり、城下から姿を消した

離縁の理由は「小五郎事家風になじみがたく……一というものだが、藩庁はこれを受理した。

「あれだけのことをいわれ、関口喜兵衛をにらみつけることもよう出来なんだ聟に、源右衛門も、つくづくと愛想をつかしたものであろう」

新年早々、城下は小五郎一件で持ちきりであった。

足輕の国七が、それでも感心に、夢中で刀を突っかけてきた。

飛びのいたはずみに小五郎が振った刀が国七の膝頭を浅く割りつけた。

「ああ、うう……」

こうなると悲鳴をあげるばかりになった国七は主人・喜兵衛の足もとにへたり込んだままとなつた。

登城の侍たちが道の両側から駆け寄つて来たのは、このときである。

飛びのいて、おのれの腹へ刀を突き立てようとした平野小五郎の脳裏に思いもかけぬこゝろが電光のように過ぎつた。

（どうせ死ぬなら、原正盛を斬つてからにしよう）

このことである。

殿さまを籠絡し、藩政を乱している張本人は執政・原正盛にはかならぬ、と小五郎は思いこんでいたし、事実、その通りだといつてよい。

それにしてもこのときまで、小五郎は原を斬るつもりなぞ毛頭なかった。

後年になり、同藩士の小山六之進にもうした小五郎の言葉に、このようなものがある。

「私はへそ者生まれにて幼少のころから何の望みもこれなく、大信寺の和尚様にお目にかけられたるをよいことに、ひまさえござれば大信寺へ入りびたり、和尚様のお貸し下さるる書物を読み、手習いをいたし……それも紙を用うことはめつたになく、手本を見、指をもちて宙に手習いをいたすこと、まことにおもしろく……」



「関口喜兵衛殿、まいる」

叫ぶや、雨合羽あまがつばをかなぐり捨てた。

「ああっ……」

喜兵衛は絶叫をあげると同時に、そのまま空間へ貼りついたような顔色となった。その喜兵衛の頸部けいぶへ、

「えい」

あまり剣術に精を出したこともない山崎……いや平野小五郎が抜き打ちに斬った。何とも、すさまじい早業である。

尻餅しりもちをつくように、喜兵衛が倒れた。

供の仲間は腰をぬかし、足輕の井村国七が、それでも脇差わきざしを抜き、

「お、おのれ……」

と声をかけたのへ、

「寄るな」

叱りつけておいて、小五郎は倒れた関口喜兵衛へのしかかるように、とどめを刺した。

この間、すぐ傍にいた杉坂力蔵は傘を落し、評定所の土堀へ寄りかかったまま眼球をむき出し、喘ぐあえのみで刀の柄つかにさえ手をかけてはいない。

とどめを刺した小五郎が身を起しかけるのを見て、

「うわあ……」

原正盛へ命じたが、

「小五郎めは離縁になりたるものゆえ、山崎源右衛門を咎めることにもなりますまい かしこ申して何事もあずかり知らぬ実家の平野弥一郎を咎むるも大人気なことです」

原は微笑さえふくんでおり、

「このたびの事につきましては、関口喜兵衛にも落度がございます」

「なれど、喜兵衛はそちの縁類ではないか」

「いかにも——」

「原。そちは冷たい男じゃの」

「いえ……喜兵衛が小五郎めにあたえたる一言、なるほど武士として我慢がなりかねたろうと存じまする」

「ふうむ……」

「これは、城下の町人どもさえ評判しきりなることにて……」

「喜兵衛が悪いとか？」

「はい」

気に入りの原がいうことには、殿さまもさからわぬ。

原正盛の裁断により、小五郎の実家は御咎め無し。養家の山崎源右衛門は、

「離縁ありたりといえども、小五郎儀刃傷におよびし段不届につき、謹慎おおせつくる」ということになった。

また、いわく、

「あのとき御用部屋にて関口喜兵衛殿に面罵めんばを受けるまでは、よもやこのようなる天運に遇あおうとは夢にも存じ申さず……その後、私めが行いたる所業についても、われながらようもやつてのけたるものと思うばかりで……」

もとへ戻る。

関口喜兵衛を斬殺ざんざうした小五郎は評定所の小道を、散に逃げ、千曲川まがたへ通ずる豪水へ飛び込んだ。

城下は大騒ぎとなったが、ついに平野小五郎を捕えることは出来なかった。信州・松代まつしろ十万石、真田伊豆守信安の城下あに於けるこの事件が、いわゆる「延享四年の騒動」とよばれるものだ。

松代藩では、その朝のうちに藩士、小者をふくめた一隊をもつて平野小五郎の探索をおこなった。

二日、三日とたつうちには隊士も増加され、領内はもとより街道筋の各所にまで追跡の手がのびたが、依然として小五郎は行方不明である。

その一方、この事件に関連あるものたちへの調べがすすめられた。

「憎いやつじや、小五郎めは——」

と、殿さまの信安は激怒ただならぬものがあり、

「山崎、平野両家へも屹きと処断を申しつけよ——」

「浮かぬ顔じゃな」

「いえ……」

「仕方もあるまい。これが武家の掟かぎじゃ。しかも先年、天野源助が森口庄五郎もりぐちごろうを討ち、見事父の恨みをはらしたこともある」

それは四年前のことであって、真田家における敵討ち事件は知れているだけでも五件ほどあるが、そのうちの二つが、天野源助と関口市太郎のもので、いずれも父の敵討ちということになる。

「市よ。助太刀すけだちは要らぬか？」

「私一人にて——」

「うむ。おぬしの腕はたしかだ。小五郎に負くこともあるまい——」

原は、多額の送別金を市太郎にやり、

「わしから江戸屋敷へもようたのみおく。困ることあれば江戸屋敷へ行き助力をたのめ——」

「はい……」

「浮かぬ顔じゃな、どうも……」

という原を、市太郎はじろりと見て、

「私、父が討たれたのは当然と存じます」

はつきりといい放った。

「何——」

養子の監督が不充分であつた、というわけだ。とちらにしても軽い処分である。たとえ殺された関口喜兵衛が今を時めく執政の親類でなかったとしても、これはもつときびしい処分がなされた筈である。

家中のものは、みな、

「さすがに原様だ。度量がひろいわい——」

却つて、原の人望があがる始末であつた。

原正盛には、どうもこういうところがある。

藩財政のたて直しに挺身をした昔を忘れ、現在は殿さまと一緒に享楽趣味に耽溺してはいても、血なまぐさい事は大きらいだし、憎悪の念のごくうすい性格なのである。

原はこのとき三十八歳で、ゆったりとした色白の豊頬には微笑の絶えたことがない（それにしても……喜兵衛の作めには敵討ちに出てもらわねばなるまい）

原正盛は半月後になつて、それまで小五郎搜索隊に加わつていた喜兵衛の長男・市太郎を呼び出した。

「市よ。小五郎めは、もはやこの近辺には潜みおらぬと思う」

関口市太郎は二十四歳の若々しい面をうつ向けたまま、

「私めも左様に思いまする」

「うむ……で、敵討ちの……」

「はい。ただちに発足いたしまする」

自分の声望をたかめ、幕府要人たちとも交際をふかめ、存分に賄賂もふりまき、寛保二年の水害の折に幕府から借りた金の返済引きのはしについてもうまく話をつけ、今や得意の絶頂にあった。

だが、翌寛延元年の春に、原正盛が殿さまの帰国にさきがけて松代へ戻ったときには、原の身边が嚴重な警備によつてかためられた。

江戸で雇いあげた井上半蔵という大神流の剣客をはじめ三人の浪人者を連れて来て、絶えず自分のまわりを守らせている。

どこからともなく、うわさが飛んだ。

江戸で、原正盛が平野小五郎からつけ狙われること再三ではなかったというものである。六月には殿さまも帰国し、この年も何事もなく暮れたが、翌寛延二年になると藩の中にもそろそろ騷乱のきざしが見えはじめた。

寛延二年九月晦日の午後のことだが、藩の足輕千人余の代表として七十五人が、普請奉行の役宅へ押しかけた。

数年にわたつて減給されつづけてきた俸給も、この一年ほどは全く支給されぬも同然、という不平不満を訴え出たのである。

奉行の彦坂は原一味のものであるから叱り飛ばして追い返したが、足輕たちはすくなく、家老の一人、恩田民親の屋敷へ押しかけて行つた。

この騷ぎは、恩田家老が何とか取り静めたが、それでおさまるものとは思えぬ様子が、

「私が小五郎であつたら、やはり討ちます」

原は苦笑をした。

「もう申すな」

「なれど……」

「だからというて、父の敵を討たぬわけにも行くまい。小五郎の首をはねてこぬかきり、家をつぐわけには行かぬぞ」

「承知しております。なればこそ発足いたします」

立つて出て行きかけ、関口市太郎は、また何かいいたそうにしたが、思いとどまり、一礼をして、しばらく考えた後に、

「小父様<sup>おじ</sup>。殿への御忠勤をいのりあげます」

一氣にいうや、廊下へ出て行つた。

#### 四

この年の十月四日に、山崎源右衛門<sup>やまざきげん えもん</sup>のむすめ、恵津<sup>ヱヅ</sup>が男子を生みおとした。いうまでもなく、これは小五郎の子であつて、助太郎と名づけられた。

まだ源右衛門の謹慎は解けず、関口市太郎が平野小五郎を討ち果した知らせもない。殿さまの伊豆守信安は六月に出府し、九月に原正盛<sup>はらまさ</sup>が江戸へ向かつた。

例によつて殿さまと共に、原は江戸での歡樂を思うさま味わい、同時に江戸屋敷における

「くどくはいうまい、おぬしも刀を抜け」

「はあ……」

「氣おくれしたか」

「いや、私は貴公に討たるること本望に存ずる」

「何……」

「なれど、いましばらく待っていただけぬか」

「ふむ……」

「原正盛殿を討つまでのことだ」

「やはり、そうか……」

「私が原殿をつけ狙うていること、江戸屋敷にても国もとにても知れてある筈」といふのはなあ、江戸で原殿を狙う私の姿を再三ならず、原殿にも気づかれ、藩邸の人びとにもさへ知られておるので——」

「むウ……」

「市太郎殿は、わが真田十萬石が、このままでいてよいと思われましますまい。いや、思われぬ筈だ。私は、それを知っております」

このとき、関口市太郎は小五郎と力を合せ、親類ながら原の小父を討ちたいと思つたほこである。

立ちつくしたまま、市太郎は抜いた刀を振りかぶる氣力が消えてしまつていた。



が下から盛り上ってきつつある。

関口市太郎が、平野小五郎にめぐり合つたのは、この騒ぎが松代城下で起つて間もなくのことであつた。

場所は、中仙道なかせんどうが信州・小田井へ入る少し手前の前田原の芒すすきの群れの中であつた。

市太郎は、江戸藩邸のものの口から、小五郎が原正盛を狙つてゐることを知り、原が帰国してゐるのだから、小五郎も信州へ戻つてゐると考えたのであろう。

秋の夕陽ゆづひが落ちかかる芒の原を、市太郎は小田井の宿場に向かつて急いでいたが、

「あ……」  
前方約十間のところに、茫然ぼうぜんと山脈へ落ちかかる夕陽をながめてゐる平野小五郎を発見した。

市太郎は抜刀し、音もなく近寄つた。

小五郎が振り向いた。

「おう……」

微笑し、小五郎が頭を下げ、

「市太郎殿か、久しぶり」

といった。

「うむ……」

うなずいて市太郎が、

郎はあらわれなかった。

（何というやつだ あれだけの事を仕とげた男ゆえ信頼をかけたのだが……見事に裏切られた……）

市太郎は、それまで小五郎に抱いていた好意を一度に厭悪と激怒に乗り換えてしまった。自分との約束を破棄したばかりではない。

小五郎は、ついに原正盛を襲うことも出来なかったのだ。

（もう、ぐずぐずしてはおられぬぞ、おれも——）

市太郎は、あせっていた。

（御家の大事に居合わせず何の奉公も出来ぬとは……）

なのである。

そのためには一日も早く小五郎を討ち、松代藩士として復帰せねばならぬ。

また、この三年の間に事態は急激な変化を見せてきていた。

今年の正月にも第二次の足輕騒動が国元と江戸屋敷で起ったし、何よりも藩財政の逼迫が急を告げ、同時に、原正盛が例の遊女あがりの殿さまの側室と姦通をした事実が、あかるみに浮いてきたものである。

今度は殿さまの信安が、原を憎みはじめた。

殿さまは、この年の正月から江戸屋敷にいたので、原が領国にいるのをさかい、みずから采配をふるい、田村半右衛門という理財家を三百石で召抱えてしまったものだ。

「ここに誓約いたす。明年七月一日、江戸日本橋南の橋詰、高札場の下にて貴公を待ち、そのときこそ、この小五郎が首を討たれたい」

小五郎が誠意を顔いっばいにあらわしている、大小の刀の鐔を打ち合せた金打は武士の誓約のしるしであつた。市太郎は刀を鞘におさめ、

「間違いはあるまいな」  
念をおした。

つまり、親類であり庇護者である原正盛を小五郎が討つことを黙認したのだ。小五郎は、しっかりとうなずき、

「では……」

一札を残し、着流しの裾を端折り、素足に草鞋かけという身なりの背を向け、芒の中へ姿を没した。

「忘るるなよ、小五郎——」

関口市太郎が、もう一度叫んだ。

## 五

寛延三年七月一日となつた。

誓約の日である。

この日、関口市太郎は日本橋南の橋詰に朝から夜ふけまで立ち通したが、ついに平野小五

年齢は市太郎より少し上だが、幼少のころから学問も武道も共にはけんてきた親友であるし、この主米から、市太郎は大いに啓蒙され、父や小父の所業を冷静に見つめることができるものだ。

「主米殿か、国元も大変だそうですね」

「うむ。この機会に何としても原一派を押しつけて新しい治政を行わぬと命取りになる。御公儀でもうすうす知っているらしいし……ぐずぐずしていると取潰しにも会いかねぬと思う」

「私も早く帰って、主米殿と共に……」

「うむ。それにしても小五郎はどうだ？」

「それが、実は……」

市太郎がすべてを語ると、

「そうか……」

主米は、しばらく沈思していたが、

「これからは、ときどき顔を見せろ おれは江戸詰になったからな」

といい、顔をひそめて、

「近いうちに、原は失脚するぞ。田村半右衛門が殿さま直き直きの御下命によつて勝手掛をおおせつけられるらしい」

勝手掛というのは大蔵大臣のようなもので、今までは原が家老職兼任でこれをつとめてい

田村半右衛門という老人は、説に赤穂浪人・大野九郎兵衛だと噂された人物だが、判然としない。

だが、松代藩と赤穂藩の交際が、かなり深く、かの四十七士が吉良邸へ討ち入った後、諸大名へ御預けとなった際にも、松代藩では義士に種々の贈物をとけたりしていることから見て、大野九郎兵衛ではないという切れぬものがある。

ともかく、原正盛がいい気になってやりすぎ、殿さまの自覚によつて旗色が悪くなりつつあることはたしかであつた。

自分の藩が、このような非常時なのに、意義もない父の仇を討つことなぞしてはいられぬ、というのが関口市太郎の本心である。

それよりも藩へ帰り、力のかぎり御家の（ということは一國のである）建直しにはたらしめなかつた。

けれども父の敵討ちということは、武士の法であり掟であるから、これを果さねば戻るわけには行かぬ。市太郎が約束の日をじりじりと待ちこがれていたのも当然であつた。

市太郎は口惜しがって、翌日の朝になると南部坂の藩邸へ出かけて行つた。それとなく小五郎の行方について聞きこみでもありはしないかと思つたからだ。

「おう、市太郎ではないか」

ちやうど、国元から望月主米が出て来た。

主米は、恩田民親などと共に忠義派の家老の一人である治部左衛門の嗣子である。

筆者にこう語ったのは、松代の郷土史家で先年亡くなられた大平喜間太氏である。どちらでもよいと思う。

そのときの平野小五郎が一人の女性と家庭をもち、その女と暮すために看板書きをしていたことは、たしかなのである。

ということとは、小五郎が常人の生活に入ったことを意味する。

原正盛を討つことも、関口市太郎に討たれることも忘れ果て、そして尚、

「人を殺せば死罪が当然——」

と、養父にいい切った小五郎の信念は、ここに至って、どうも危ういものとなってきたようだ。

## 六

宝暦五年、というと平野小五郎が関口喜兵衛を斬殺してから八年目のことになるが、この年の六月十日に、松代藩士・小山六之進ろくのしんというものが、小五郎に出会った。

その日、小山六之進は深川の下屋敷へ公用があり、朝のうちから南部坂藩邸を出て用事をすませ、帰途についたのは七ツ（午後四時）ごろであった。

梅雨もあけたようなよい天気で、まだ町中に陽の輝きがみなぎっている。

六之進が永代橋を渡り切ろうとしたときであつた。

「もし……」

たのである。

「その田村というのは？」

「狸爺だ。どうせうまく行かぬとおれは見ているが……それでよいのだ。今は原を失脚させることが第一。おぬしの縁類で気の毒だが……」

「何、かまわぬ。私が斬ってやりたいほどですよ」

二人は話に熱中した。

そのころ、平野小五郎は江戸にいた。

だから小五郎は、それと知りつつ武士の誓約を破ったということになる。のちにわかったことだが、小五郎は江戸で看板書きを職としていた。

この職業が普遍したのは、もともと後年のことになるが、小五郎は筆紙、墨、糊などを木箱に入れ、江戸市中から郊外まで廻って、商家や飲食店の障子や掛行燈などに屋号・記号を書いていたらしい。

彼は、下谷坂本裏町の長屋に住み、女と暮していた。

この女の素姓について、松代の儒者・鎌原桐山は、

「女は盲瞽女とやらにて身性卑賤のもの……」

と、きめつけているけれども、

「いや、それがどうもね……私が維新生き残りの古老にきいたところによると、小諸の三度やとやという旅籠の女房の姉だったといいますがね」

「ほう……」

「またこのたびは、助太郎めが御取立をたまわり……」

といいかけ、小五郎が声をのんだ。

このほど、恵津との間に生まれた助太郎へ家督相続がゆるされ、合せて養父・源右衛門の謹慎が解けたことを、恵津が手紙で知らせて来たのは数日前のことである。

ちなみにいうと、松代藩もようやく行手に光を見出すところまでこぎつけている。

小五郎が関口市太郎との誓約を破ったときから五年の歳月が流れているが、その間に、殿さまの信安は病死し、原正盛は罪状明白となつて押しこめられ、藩政は何度もつまずきながら、ようやくこのほど、家老の一人、恩田民親が執政の座についた。

同時に、信安の遺子・幸弘も何とか無事に真田家十萬石を相続することを幕府からゆるされる見込みがついたらしい。

それにはむろん、藩を脱走した平野小五郎にはうかがい知れぬ真田家中の苦悩があり闘いがくり返されたにちがいがなかった。

小山六之進は、永代橋を引返して佐賀町へ入り、中ノ橋際の船宿の前まで来て、

「ここでよいな」

入りかけると、小五郎が店先の掛行燈に「きくや」と書いてあるのを指し、

「私を書きましたもので……」

と、いった。



背後から声がかかった。

「や……おぬし、小五郎ではないか」

洗いざらしの単衣ひとえの裾を端折り、手ぬぐいで頭を包んだ小五郎が、抱えほどの木箱を背に負い、そこに立っていた。

小五郎は、刀も帯びていなかった。

「どうした、おぬし……」

こういうなり、六之進は深い同情をこめて、窺うかがれ果てた小五郎を見やった。

六之進は五十をこえていたろう。小五郎の実家とはむかしから親しくしていたし、小五郎が赤子のころは、よく遊びに来た六之進に抱かれてあやしてもらったりしたそうなので、こういう間柄あいだがらだけに、

「お見かけしたのをよいことに、思いきって声をかけたのです」と、小五郎がいったのもうなずけよう。

「ま……ここでは話もなるまい」

先へ立つ小山六之進へ、

「御家も、このたびはめでたく……」

小五郎が低くいった。

「知っておったか？」

「国もとより知らせがまいりました」

「は……」

「ゆえにこそ、おぬしの養家……であつた山崎家やまざきも安泰。仇を討てぬ間口市太郎も無事に家をついだのじゃ」

「そのことにござります」

小五郎が火のような眼めで六之進を見て、

「見苦しき恥をさらし生きてまいりましたが、小五郎の命もこれまでにござる」

「原を討つまでと、市太郎に申したというが……」

「誓約を破りました」

「なぜか？」

「思いがけなきことにて……」

小五郎は、顔を伏せ、

「行きずりの女と共に家を持ちました」

「何……」

「なれど当初のうちは、市太郎殿に討たることいささかも苦しゅうはござりませなんだが……おそろしいものでござる。女をのつくる一椀わんの汁じゆ、飯いのあたたかさになれるにしたかい、

小五郎はくされ果てました」

「ふうむ……」

「国もとより、先日、ひそかに恵津がよこしました書状を見、さらにいま、あなたごまをお

「そうか……」

さすがに六之進は、暗然となって、

「苦勞をしたようだな」

「いえ……」

二階の小部屋へ入り、六之進が酒を注文した

「さて……」

盃さかずきをふくんだ六之進が、

「小五郎。おぬしが申すこと、きこう」

「おきき下されますか」

「おぬし、関口市太郎が藩へ呼び戻され、亡父の跡目をつぎ目付役に任じたること存じおろ  
うな」

「はい……」

「仇討ちも果さぬ市太郎が呼び戻されたは、ひとえに、かれの力量が御家にとって必要な  
ものとなったからだ。原正盛の悪政は絶え、若き新藩主をもちたてて、これからは家中一同  
が必死にはたらかねばならぬ。どこを向いても借金ばかりの十萬石を建直すためには若き人  
材を惜しむことなく投入し、旧態を一掃せしむることになった」

「まことに、ありがたきことにて……」

「と共に、御家老・恩田様は、真田家中から憎しみと恨みを一切追放せよといわれた」

とつぷりと暮れてから、二人は船宿を出た。

中ノ橋を北へ渡り、上ノ橋をぬけると松平陸奥守の蔵屋敷がある。道をへだてて大川であつた。

そこの石切場の陰まで来て、小山六之進があたりを見まわし、

「ここだよかう」

月はなかつた。

人影もない。

平野小五郎はそこへ正座し、六之進から借りた脇差をぬき、

「では……」

いきなり、腹に突きたて、きりきりと引きまわし、

「御家万々歳……」

と、うめくようにいつた。

「見事じゃ」

六之進が抜刀し、

「後に残った女のこととは、わしが引きうけた」

小五郎が、さもうれしげに笑つた。

小山六之進が、平野小五郎の首を抱えて藩邸へ戻つたのは、それから間もなくのことであつた。

見かけしたるとき、われながらこの五年の間の恥を思い知りましてござる」

「で、どうするな？」

「憎しみも恨みも残さぬ新しき治政……という恩田さまのありがたきお言葉　この小五郎も我子、我家の存続をゆるされましたからには、もはや思い残すことはござりませぬ」

「死ぬるか……」

「憎しみも恨みも山崎、関口の両家に残さぬためには――」

「うむ」

うなずいて六之進が、

「わしに介錯かいしやくせよと申すのだな？」

「はっ」

「いまか？」

「はい」

「家へ戻り、その……その女とやらに別れを告げずともよいのか」

小五郎は顔面蒼白そうはくとなり、両膝ひざで畳叩たたききつつ、

「この場で……」

と、いった。

「よし。まあ落ちつけ、小五郎。別れの盃をあけてからでもよいわ。案ずるな、わしがついておる。わしがついていてやる」

舞台うらの男

この「真田騒動」といわれる松代藩の御家騒動は、執政・恩田木工民親の治績を記した「日暮硯」<sup>ひぐらしすずり</sup>によって世に知られている。

恩田民親は、かの原正盛をもゆるして捨扶持<sup>すてふち</sup>をあたえ、その子・岩尾も、やがて藩士の列に加えるほどの寛容さをしめした。このことは封建時代にあつて希有<sup>きゆう</sup>のことである。

若き藩主・真田伊豆守幸弘も父の信安とはちがい、名君の名をほしいままにした。それはさておき――。

平野小五郎の遺子・山崎助太郎が五十八歳となった文化元年に、助太郎の子の源一郎に、関口市太郎の三女・みのが嫁入った。

このとき、松代の城下のだれやらがよんだ句に、次のようなものがある。

へそ、ご、ろの顔も忘れし夫婦雛<sup>めあしびな</sup>

（「小説新潮」昭和四十年二月号）

出世の階段へ足をかけるきつかけもつかめぬというものだ

「わし、そないなことは、どうでもええのや」

と、小平次は、ただもう、ひたすらに京の町と人から、はなれたく、なかったのである

もともと、小平次は家を継げる身ではなかった

平太夫へいたふという兄が、いたからである。

この兄は、少年のころから学問も剣術もよくでき、藩の重役から見こまれ、早くから親の手もとをはなれて国もとの赤穂の城へ出仕し、殿さまの小姓をつとめたほどのしつから者であった。

こういう長男がいると、父母も、

（わが家には立派な後つぎができた）

何か安心してしまい、末っ子の小平次に対しては、どうしても甘い育てかたをするようになる。

「じゃが、小平次もさむらいの家の子ゆえ、あまりに町家の子どもたちとまじわるのは、いかなものかな」

「はい　よう申しきかせてあるのでございますけれど……」

と、これは父母の声である。

浅野家の京屋敷は「ぶつこうじ 仏光寺通り ひがしのとういん 東洞院東入ル」ところにある

付近には町家が多い。



## 一

服部小平次はつとくこへいじの父は、宇内信重うないのぶしげといい、播州・赤穂ばんしゅうあこう五万三千石、浅野家につかえ、ながらく京都屋敷につとめていた。

だから、小平次は京都で生まれ、育ったわけである。のちに、江戸屋敷へうつることになったときには、

「ああ、いやらし」

と、小平次は町人ことばをまる出しにし、夫の転勤をいやがる現代の新妻のように身をもんで、

「京をはなれて、さわがしい江戸へ行くほどなら、わし、腹を切って死んだほうがましや」などと、太いになげいたものだった。

むりもない。

殿さまの御城がある赤穂の国もとや、藩邸とはちがい、京都屋敷は、まことにのんびりとしたものである。

国もとが浅野家の本社なら、江戸、大坂、京都などの藩邸は支社ということになるだろうが、社長である殿さまは、めったに京都へは来ることもない。

そのかわり、天下泰平の世の中に、家来として腕をふるうチャンスもないし、したがって、

「え……？ まさか……」

「ほんとうです」

「冗談をいうものではない 細工といい塗りといい、こりやもう立派な職人の手になるものではありませぬか」

「つくるのに一月もかかってしまいました」

それぞれの家業をもつ遊び友だちの家で道具を借り、材料をもらって製作したのだから、平次はいいはる。

不審におもった母が、翌日になって、藩邸近くの「よろずや勘助」という塗師ぬしをたずねると、

「いつもいつもうちのせがれめが坊ンさまのお遊び相手をさせてもろて……へい、もったいないことでござりまする」

あるじの勘助は、恐縮しながらも、

「なんとも、坊ンさまのお手さきの器用さには、びっくりいたしております。へえ、それもう、坊ンさまがおひとりで、あの行燈のうるしをお塗りになりましたんとす—

と、こたえた。

おどろきながらも母親はいくらかの札をわたし、次に、烏丸くわまる五条の彫物師を訪問すると、「せがれのところへお見えになりましたとき、坊ンさまは、わたくしともの仕事を、しいると見ておいでになりましたとすな。そのうちに、鑿くさのつかいかたを教えろ、かように申さ

屋敷内には、家來の子弟もいるわけだが、小平次の遊び友たちといえは町家の子供ばかりといつてよい。

おさだまりの学問、剣術のけいこから帰りみち、小平次は町家の友たちの家へ立ちよつては遊んできた。

小平次は、生まれつき器用だったらしく、十歳のころに、

「これ、母さまがおつかい下さい」

ま新しい有明行燈ありあけあんどんを外から持つて帰つた。

「何かえ？」

見ると、その行燈は、朱ぬり丸型のもので、台には引出しまでついており、把手たしの隅いさうには精巧極まる木彫りの蜻蛉こんまが一つ、とまっているではないか

「ま、みごとな細工ですこと」

「さようですか、うれしいな」

「このようなものを、どこで、お前は……？」

母の喜佐が問うや、

「へへん……」

小平次が、ひくい鼻をうごめかし、何やら得意げだった。

「どうしました、小平次」

「その行燈は、わたくしがこしらえました」

別に藩邸へめいわくをかけない。

とにかく、冷めし喰いの次男坊にしては、小づかいも充分というわけ、女あそびもどかななものだった。

鼻はひくいが色白で、すらりとした体つきの服部小平次は愛嬌たつぷりな双眸をかかやかせつつ、よく昼あそびに伏見へ出かけたものだ。

伏見・撞木町の廓は、慶長のころにもうけられたもので、京の島原のような上級のものはなく、格も、遊女の質も一段二段と下った遊廓だった。

それだけに、

（気もおけぬし、京の市中から三里もはなれているところが何より、何より）

と、小平次はここへ来て、ゆるりと昼あそびをやり、夕暮れまでにはきちんと藩邸へもどる。

したがって、

（御物奉行のせがれどのは、変り物だ）

という評判はあつても、彼が遊蕩することを知らぬものはいない。

それは、貞享一年夏のある日のことだったか……

（少し暑い、ひと汗かくかな）

久しぶりで、小平次は撞木町へ出かけて行った。

行きつけの「しまや」という妓楼は廓内のはずれにあり、二階から田圃が見わたせる。

れまして……—

あるじは、身分ちがいにて恐れ入るが、もしも小平次が町家の子だったなら内弟子にもらいうけたいほどだとほめそやした。

以来、十数年の間に、こうした例はいくらもあり、書いていたらキリかない。

さらに小平次は、古道具屋や刀鍛冶、表具師などの家へ入りひたつて少しも倦むことを知らぬ青春を送つたらしい。

「もはや、匙を投げました」

と、母がいえば、

「どうせ、家督も出来ぬ身のかわい、そう、なやつしや、好きなようにさせておけ」  
父が、こたえた。

## 二

小平次、二十歳をすぎると、いろいろの工芸品や刀剣の鑑定もやるようになった。人形や、種々の細工物をみずからこしらえ、

「へえ、こりやまた美事なモンどすな。わたくしの店で引きとらせてはいただけませぬか」  
「よいとも」

というので、これがよく売れるようになった。

だが、そうした製作は幼友だちがいる、「よろずや」方の一室を借りておこなうのだから、

小平次は腕に自信がないから、にっこりと頭を下げ、いくらかの錢をやつて切りぬけようとしたが、

「ふん、これでもさむらいかえ」

「ひとつぶちのめしてやれ」

「そりゃ、ええな」

なぐりつけておいて財布ごと強奪しようというつもりになつたらしい。

「やい!!」

いきなり、一人が小平次の胸ぐらをつかんでふりまわしかけたが、

「げえッ……」

急に、そやつはがくりとひざを折り、へなへなと倒れ伏してしまった。

なぐられるつもりで、閉じた眼をひらいた小平次の前に、これも編笠をかぶった武士が背を見せて、

「去ね」

ものしずかに船頭どもへ声をかけた。

「畜生め!!」

と、だまつているような彼らではない。

三人が、どつと殺到して来るのへ、その武士は我から進み、

「や!!」

「もう十日もお顔を見なんだええええ、もうつれない小平次さま……今日は夜まで帰しやせぬわえ」

なじみの小徳ことくという遊女が金ばなれのよい小平次のくひへもろ腕を巻きつけ、他の客にはゆるさぬくちびるをおしつけてくる。

「小徳。汗ぬぐいの手ぬぐいを三つ四つ、冷たくしぼってこいよ」

小平次は、女としたかになたわむれ「しまや」を出たのがハソ半午後三時すぎだったろうか。

（まだ、匂におうな）

出るとき、ふる場で水をあびてきたのだが、着ている帷子かたびらのふところから、小徳のつけたいた白粉おしろいの香がただよい出て、小平次の鼻腔びやうくうをくすぐる。

（今日は小徳め、あられもなく、みだれおったな）

にやにやしながら編笠あみりさをかぶり、通りを曲ったとき、小平次は向こうからきた男の足の甲を踏みつけてしまった。

「何さらす」

三人の仲間をしたがえ、どなった男を見ると、これは淀川下りの船頭せんとうたちの中でも「暗物くらもの船頭」とよばれる、荒くれ男ばかりの性質たてちのよくないやつともである。

「やい、さむらい、足ふんで、だまって通る氣イか」

「や、これはかんにん」

いきなり、武士が小平次の腕をつかみ歩き出した。  
裏道へ来てから、

「わしじゃ」

その武士が笠をとり、微笑をうかべている顔を見せた

「あつ……ご、御家老さま」

さすがの小平次も青くなった。

厄介者の次男坊が昼あそびをしていることさえしからぬのに、さむらいの身で船頭ふぜいの手ごめにあおうとしたのである。

「こりゃ、ただごとではすまぬ。おれはともかく、父の身にもしものことがあつては……」

青くなるのも、むりはなかった。

相手は大石内蔵助おおいし くらすけといって、浅野家の国家老をつとめ、赤穂の国もとにいるが、年に一度は京へ出て来る。

これは公用のためばかりでなく、内蔵助の生母の熊子くまこが京都に住んでいて、このきげんをうかがいに来るのだ。

このとき、大石内蔵助は二十七歳で、服部小平次より四つの年長だった。

大石家老が昨日、京都屋敷へついたことを知らぬ小平次ではないが、まさかに、このような場所へあらわれようとは思ひもかけぬことだったし、あのような手練のもちぬしだとは考えてみたこともない。



みじかい気合を發したとき、

「きゃあ……」

「う、うう……」

どこをどうされたものか、船頭ふたりが、たちまちに転倒し、残るひとりが何か刃物をふところから出して、わめきながら突つこんで来たかと思うと、

「わあ……」

そやつは、大きく宙に舞って投げ飛ばされ、いやというほど地面へ叩たたきつけられてしまった。

「去ね」

と、武士がいう。

何ともすさまじい早わざを見せておいて、呼吸のみだれが少しもない。

〔暗物船頭〕たちは、当身をくらって気絶をした二人を、別の二人が引きずるようにして、こそこそと逃げ去った。

「これは、これは、危うきところをお助け下さいまして……」

人だかりもしているが逃げ出すわけにもゆかず、小平次は笠をとって礼をいい出した。すると、編笠の武士が、

「何だ、服部小平次ではないか」

「え？ あなたさまは……」

「は……」

「行つて見たか？」

「いえ、もう、あそこは、ここより低俗にて……」

「それもおもしろい。よし、これから墨染へ行つてみよう。おぬしも来いよ」

「な、なれど、それは……もはや御屋敷へもどりませぬと……」

「わしがうけ合う。案ずるな」

内蔵助は四日ほど、京の藩邸に滞在し、小平次を供にしては遊びまわった。

翌年の春にも来て、

「小平次。どこぞ、めずらしいところを見つけておいたか？」

といえ、もう小平次は欣然きんせんとして、

「おまかせ下さい」

胸を張った。

国もとでの、大石内蔵助の評判は、

〔昼あんどん〕

と、うわさをされるほどで、城へ出て来てもひまさえあれば居眠りばかりしており、政務は他の重臣たちのするにまかせているらしい。

それでいて、別に失敗を見せぬので、

「人物が大きいのじゃ」

「ここへは、なじみか？」

と、内蔵助がいう。

「はっ……いえ、その……」

内蔵助の年齢にふさわしくない、ほつてりとした小柄な肥体が近よつて来て、

「なじみか、ときいておるのだ」

「ひらに、おゆるしのほどを……」

「ふん……」

と、内蔵助が鼻で笑つた。

ふつくりとした顔つきは若々しく、鳩のように、まるみをおびた可愛らしい眼つきをしている。

おそるおそる、小平次が、

「御家老さまは、ここへ……」

「ここへ来る用事は、きまつておるさ」

「な、なれど、このように低俗なる場所へ……」

「女を抱くには、気のおけぬ所ほどよろしい」

ほかんと口をあけたままになっている服部小平次の肩を扇でたたき、内蔵助が、さらにおどろくべきことをいった。

「この近くの墨染寺門前にも、近ごろ遊所ができたそうだな」

この年の秋――。

小平次の兄・平太夫が赤穂で死んだ。

疫病にかかり、あつけないほどの急死だった。

さらに、年があらたまつた貞享四年正月に、今度は父の宇内が死んだ。いまでいう心臓麻痺である。

こうなると、いやでも小平次は服部の家をつがねばならぬことになった。

### 三

小平次は服部家の当主となり、名を亡父の宇内をついだのだが、このものがたりでは前名のままで、はなしをすすめたい。

家をついだとたんに、

「江戸屋敷詰めを申しつける」

と、殿さまからの命が下った。

江戸へ転勤となったわけだ。

「ああ、いやらし」

と、小平次がなげいたのは、このときである。

すると、赤穂から大石内蔵助が急便をよこした。

その手紙には、

などと、小平次の父・服部宇内や、宇内の上役の小野寺十内などは、しきりに内蔵助をはめてゐる。

小平次は、それほどえらい人物と考えてもみなかったが、内蔵助の供をして廓あそびをするうちに、別の意味で、

「大したお人だ」

舌をまいた。

下等な遊所の中の、低俗なる遊所の中から、内蔵助は「これは」と、目をみはるような女を見つけ出して遊ぶのがうまい。

また、そうした女たちは二人を見くらべると、手もなく小平次を振って、内蔵助へ寄りそつてしまふ。

「御家老にはかないませぬな」

くやしがるどころか、小平次はうれしくてならない

口数は少ないが、女たちに取巻かれた内蔵助が、にこにこ酒をのんでいると、座敷いっぱい春の陽光がみなぎりわたるような雰<sub>フミ</sub>囲<sub>キ</sub>気<sub>キ</sub>になつてしまふのだ。

遊び好きの小平次には、それが、たまらなくたのしかったのである。

「人に知れるとうるさいゆえ、ふたりの遊びはふたりだけの遊びにしておこうな。もっとも念を入れるにもおよぶまいが……」

と、内蔵助は小平次にいった。

優雅な京の都にくらべ、はじめは雑駁ざつぱくきわまると見ていた江戸市中の活気にみちみちた繁栄ぶりも、

(さすがは、將軍おひざもとだな)

次第に、小平次の眼が生き生きと光りはじめた

小平次は藩邸内の長屋(四間)の一室に、京でつかつていた細工物の道具をおき、非番の日はここにこもりきりで、まず自分がかう机や見台みだいを製作しはじめた

そのうちに、市中の細工師や、工匠や古道具屋などに知り合いが出来ると、京都でのように、やがて小平次のふところに内職の金も入るようになる。百五十石どりのねつきとした藩士で、若党、小者、下女などを合せ六人の主人である服部小平次なのだが、好きにつかえる小づかいが入れば、それだけ、たのしみもふえる。

決してこれをためこもうとするのではなく、入れば入るだけ、きれいにつかい果すのだった。

京におとらず、江戸の遊所もさかんなものである

自分の遊びが勤務のさしかえにならぬように、小平次は藩邸の足輕あしがるや中間ちゆうけんにまでも要領よくたちまわり、同僚との交際にも気前よく、つかうものをつかう

たちまちに、一年がすぎた。

元禄げんろく元年の夏――。

突然に、大石内蔵助が江戸へあらわれた

「……自分に考えがあつて、おぬしを江戸へやるようにはからつたのだ。少しの間、辛抱をして奉公にはげむように」

と、したためてある。

内蔵助が小平次について何を考えていたものか、はつきりはせぬが……

どちらにしても家をついだからには、京の藩邸にいて希望もないかわり不足もないという一生をすごすよりも、まず、江戸藩邸へ送つて小平次のはたらきをためてみよう、というようなつもりであつたのだろう。

こうなれば、転勤が厭だといつても通る武家の世界ではない、主家の命令は絶対のものだ。

服部小平次は、いやいやながら、母をともない、江戸屋敷へ向かつた。

江戸藩邸で、小平次は「江戸番頭」の支配下へ入つた。

江戸と京都とのちがいはあるにせよ、これは亡き父の役目より低い母は、なげいたようだが、

（こりゃ、このほうが氣らくだな）

むしろ、小平次はよろこんだ。

あまり責任がない役目だったからである。

そして……。

江戸の水になれば、これもまた、おもしろかつた。

内蔵助はむきたての玉子のような若い女を見つけ出し、大いに堪能したふりをして、夕暮れになつて藩邸へ戻る道にも、

「あれはよい。フム、あそこはよろしい」  
の連発なのである。

「明後日も共にまいろうな、小平次」

「こころえました」

ところが当日となり、非番の小平次は、朝から内蔵助の呼び出しを待っていたが、何うか  
汰もない。

（急な御用でも出来いたしたのかなう……  
いらいらしていると、夕刻になつて、

「大石様がお呼びでございます」

と長屋へ声がかかった。

場所は、藩邸内の用部屋である

いそいそと出かけた。

内蔵助は、用部屋の中に一人きりて、しかも紋服・袴かみしもの礼装をつけ、厳然として、

「これへ」

白扇をもつて小平次をさし兼ねく。

「はっ」



「どうだな、御奉公は？」

「はあ、はげみおります」

「ところで、小平次」

「はあ？」

「どこか、おもしろいところを見つけたかな」

「おまかせ下さい」

「わしも六年ぶりの江戸だ。それにな、小平次、国家老でありながら、何かと用事にかこつけ、京や江戸へ出て来るので、実は、殿さまのこきげんを損してしもうた。これが江戸の見おさめのつもりなのだ」

「それは、それは……」

「なれど、おぬしには、いずれ赤穂へ来てもらうつもりでおる。もつとも国もとには、おもしろいところはないが……」

出府して二日後に、大石内蔵助は服部小平次の案内で、谷中の「いろは茶屋」へ昼あそびに出かけた。

ここは、現在の上野公園の裏の、天王寺門前にあつて茶屋は二十七軒、ひらかれて年も浅い遊所であるし、茶汲女ちやくみおんなが色を売るところは、ちよつと京でのそれに似てもある。

「ところがら、坊主ぼうずの客が多いそうで……なれど、女はよろしゅうござる」  
小平次のいう通りだった。

「いくらだ？」

きくと、道具屋の主人は、まさかに祐乗作とは思わぬので、

「三両でございます」

「よし、買おう」

しかし、小平次には確信があつた。

彼は二カ月もかかり、この小柄に細工をほどこし、日本橋室町の刀屋「岩付屋重兵衛」方へ持ちこんだのである。

ゆらい、祐乗の作には銘がない。

「何と見るな？」

すでに懇意となつていた岩付屋重兵衛へ出して見せると、ややあつて、

「たしかに祐乗作でございますな」

一も二もなく、五十両で買いつてくれたのだ。

つまり小平次は、道具屋の眼から見て祐乗作と思えるような細工をほどこしたわけであるが、

（まさに祐乗作なのだから、わるいことをしたわけではない）  
と、考えていた。

だが、このことを、だれが知つたものか……。

それをたしかめる間もなく、

いままでに見たこともない大石内蔵助の威容だった。鳩のような両眼が三倍ほど大きく見え、ひきむすんだ口もとのきびしさに、小平次は圧倒された。  
(いったい、何ごとなのか……?)

おどろきつつ、頭を下げるのへ、内蔵助が、おごそかにいった。

「小平次、ようきけ」

「はっ」

「人のうわさ、世のうわさというものが、うわさされている本人の耳へとごくまでは、かなりの間がある。わがうわさをきいたときには、もはや取り返しのつかぬことがあるものだが……いまから、わしが申すことを、おぬしはまだ知るまい」  
「は……?」

「おぬし、この春ごろに、無地赤銅しこくどうに竜りゅうを彫うつたる小柄こがらを手に入れ、これを、みずからの手にて細工をほどこし、後藤祐乗ごとうゆうじょうの作と称し、金五十両にて売ったそうだな」  
小平次は声も出なかった。

その通りなのだ。

後藤祐乗は、むかし足利將軍あしかがにつかえたほどの彫金家である。

小平次が、その赤銅の小柄を市ヶ谷の道具屋で見つけたとき、  
(たしかに、これは祐乗の作だ)

と、見きわめをつけ、

思わず、

「よろしゅうござる、それがし退身つかまつる」

と、叫び返してしまった。

すると、打てばひびくように、

「よろしい、たしかにきいたぞ、これより殿さまに申しあくる」

あつという間もなかった。

大石内蔵助は、さつと座を立ち、たちまちに奥へ消えた。

服部小平次は、有無をいわさず辞職させられてしまったわけだ。

（か、勝手にしろ）

小平次も怒り、ふてくされ気味で長屋へ帰り、母に報告をした。

むろん母親はなげき悲しんだが、どうにもなるものではない。武士に……ではないのである。

こうして小平次は浅野家を退身し、やがて、池の端仲町に道具屋の店をひらき、名も一擧

屋家伴やいんどもとあらためた。

いよいよ、天下晴れて、細工や鑑定が出来る。何しろ腕も目も抜群の彼であるから、二年

もたつと商売の間口をひろげ、十人もの奉公人をつかうほどになった。

「母上、私が両刀を捨てて、かえつてようございましたろう」

「ほんにな。町家ぐらしが、このように気らくなものとは思つてゐなかつたことか」

と、母の喜佐も、よき嫁と孫たちにめぐまれ、まんましくしている。

「ふとどき者め!!」

いきなり、大石内蔵助に叱りつけられた

「は……なれど、たしかに祐乗作でございます」

「たしかなれば、なぜに細工を加えた？」

「ちよつと衣裳を着せましたまでのこと……」

「よし。そこまで申すなら、おぬしの目利をよろこばう。なれど、武士には士法あり。主君につかえて禄を食む身じゃ。きさま、百五十石を食んで諸人の上に立つ身でありながら、そのような利益を得て、さだめし、おもしろかろう」

「……………」

小平次は不服である。

大石だつて千五百石の家老職でありながら、そつと安い娼婦を買ひあさり、色事にうつつ、をぬかしているではないか。

内蔵助は、ゆるさなかつた。

「今後、細工などの手なぐさみは一切無用である。もしも、がまんがならぬときは退身をして道具屋となれ!!」

びしりと、きめつけられた。

昨日までの、あの親しさを全く忘れたかのような、内蔵助の苛烈な態度に、小平次も逆上してしまつた。

さらに――

内蔵助が、故内匠頭の弟・浅野大学をもつて主家の再興を幕府へ願い出て、いることもきいた。

幕府にしても〔喧嘩両成敗〕けんかりょうせいばいの掟を無視して吉良上野介の肩をもつたのだから、

（それ位のことはしてやってもよいのだが……）

と、小平次は思っていたし、

（なるほど、内蔵助のねらいも、そこにあるのだな）

と、なつとくがいった。

秋になった。

小平次は商用のため、急に京都へ出向くことになった。

けれども、ついでに山科へ大石内蔵助をたずねてみようなどとは考えてもみなかつた。

あのとき、用部屋へ呼びつけられ、高びしやに叱りつけられ、強引に退身させられたとき、のくやしさが、まだ胸の底によどんでいる。

京都へ着いた日の翌日だった。

三条・加茂川かもがわべりの宿屋で、おそい朝飯をすまずと、まず商用よりも、

（むかし、暮つちしていたところは、どうなっているかな？　幼友たちも、みな大人になって、どのような面つきつらになつてゐるかな）

小平次は宿を出るや、ふらふらと旧浅野藩邸へ足が向いた。

母は、元禄十四年正月六日に、五十八歳の生涯を終えた。  
この年の二月四日――。

小平次の旧主人・浅野内匠頭たくみのかみが、江戸城中・松の廊下において吉良上野介きちらぎのすけへ刃傷やぶにおよび、江戸市中は、このうわさでわき返ったが、

（内蔵助め、とんだことになって、とぞ頭が痛いことだろう。よかった、あのとき武士をやめていて……）

小平次は別だんの感慨もなかった。

#### 四

浅野家がほろびて後の、いわゆる「赤穂浪士」については、くたくだしくのべるまでもあるまい。

小平次は、この事件に関心をもっていたわけではないが、商売がら諸方の大名や旗本の屋敷へ出入りすることが多く、いやでも、赤穂浪人のことが耳に入ってくる。

さいわいに、江戸へ来て間もなく武士をやめた小平次だけに、彼が、もと浅野の家臣であったことは、ごく少数の人々にしか知られていない。

うわさをきいても、だまっていればすむことだった。

その年の夏になると、大石内蔵助が旧藩の残務を終え、一個の浪人となり、妻子と共に京やましなの山科へ隠宅をかまえたことを小平次は知った。

にしている。

小平次へ向けられた内蔵助の眼のいろは、むかし、撞木町の廓で見せたときの親しみをこめたものだった。

「どうじゃな、小平次」

「何がで？」

「やはり、あのとき、武士の世界から足をぬいておいてよかったであらう」

この、やさしげな内蔵助の声をきいた一瞬に、小平次の脳裡を電光のようにきつたものがある。

（そ、そうだったのか……）

## 五

後に、赤穂浪士の一人、横川勘平から小平次がきいてわかったのだが、あのときの藩邸内の評判は、小平次が祐乗作の小柄を売った一件を頂点として、あやうく殿さまの耳へも入るかねないところだったらしい。

知らぬは小平次ばかりで、内職の小づかい稼ぎを内密にしていたつもりでも、京都とちがつて江戸では人の口もかるく、現代でいえば、

「あいつは、月給のほかに、うまい内職をしている」

とうらやまれ、ねたまれるのと同様のことだ。



十五年ぶりなのである。

いまは人気も絶えた旧藩邸門前に立ったとき、

（町の様子も、屋敷の門も塀も少しも変わっていないな。おれが父母と共に苦勞した長屋もそのままだろうか……中へ入ってみたいものだが……）

さすがに、懐旧の情にかられ、かなりの間を、門前から塀をめくり、また門前へ戻ったりして、立ち去りかねた。

と……。

小平次の肩に人の手がふれた。

振りむいて小平次が、

「や、御家老……」

「久しぶりだの」

大石内蔵助だった。

「京へ来ているのか？」

「はあ……」

「ふと、ここを通りかかって、おぬしに逢えた。どうやら元気そうな……」

「……………」

「ふ、ふふ……おぬし、まだ怒っているのか、あのときのことを」

おもしろくもなさそうな顔をしている小平次を見やった内蔵助は着流しの姿で、編笠を手

あみかさ  
編笠を手

「去年に亡なくなりました。それはともかく、このたびの事件では、さぞ御心痛のことことでございます。お察し申しあげます」

わだかまりが解けてしまえば、小平次も元は浅野の家来だし、何だか急に他人事ひとことではないような気もちがしてきたのもふしぎだった。

「世の中には、いや人の一生には、いろいろのことがあるものでな」

「御家再興の儀は、いかがなりましたようか」

「さあて……」

「もしも再興ならぬときは？」

（仇討あだうちちを決行するつもりなのだろうか？）

と、小平次はさぐるような視線を内蔵助へ向けたが、

「そのときはそのとき。先さきのことは何も考えぬことにしているのじゃ」

「なるほど」

「それよりも小平次。久しぶりに撞木町へ出かけようではないか。わしも、このごろはとんとひまが出来たゆえ、撞木町ではたいぶ、よい顔になったぞ。は、はは……」

この夜、二人は十六年ぶりに伏見・撞木町に遊んだ。

いまの大石内蔵助は、伏見の廓で「うきさま」とよばれるほどの遊蕩うたがひぶりで、世評もうるさいのだが、小平次に見れば、むかしと少しも変らぬ内蔵助を見たまでのことだ。

二人は、もう今度の事件について一言も語り合わず、およそ十日ほども京都に滞在した。

このことを耳にしたら、物がたかった殿さまのことだから、

「武士にあるまじきけしからぬやつ。切腹を申しつけよ」  
などということになったやも知れぬ。

江戸へついた早々に、この小平次のうわさをきいた内蔵助が、  
（やはり、小平次は好きな道へ進ませたほうがよいな）

と、心をきめ、むしろ強引に、小平次の口から身を退くといわせるように仕向けたのであろう。

「足をぬいておいてよかったであろう」

と、いわれたとき、そうした事の経過が形ではなく、瞬時のひらめきとなって、小平次をなっとくさせたのだった。

「さ、左様でございましたのか……」

うめくようにいい、小平次は内蔵助の前へ頭をたれた。  
それだけで二人の間には通じ合うものがあつた。

「町人姿が、ぴたりと身についておるぞ」

「おそれいました」

「ま、少し歩こうか」

「はい」

「母ごは、お元気か？」

つまり、外に威を張り、内に愛をこめるといふ吉良の性格が、はっきりと小平次にものみこめてきたのである。

服部小平次が、赤穂浪士をふくめて、大石内蔵助のために隠密のはたらきをした事實は、他の協力者たちの名と共に、知るものは知っている。

あの十二月十四日の茶会に、吉良が本所屋敷に在邸のよしを内蔵助に知らせたのは、大高源五だ。

大高は、これも吉良家出入りの茶人で、四方庵宗遍に弟子入りをし、四方庵の口から茶会のことをきいた。

しかし内蔵助は、

「念には念を入れよ」

尚も、慎重な態度をけつして、くずそうとはしない。

このごろの吉良上野介は、実子の上杉綱憲（米沢十五万石の領主）の屋敷へ出かけて自らこむことが多い。

死をかけた吉良邸討入りは二度と出来ぬ 内蔵助にしては慎重が上にも慎重になつてゐるを得なかつたのだ。

ところが、十四日の朝になつて、服部小平次の報告が、浪士・横川勘平のもとへ入つた。「本日の茶会に吉良どのが出られることは、まちがいなし」

というのである。

小平次は、毎夜のように内蔵助の供をして伏見へ出かけたものである。

## 六

幕府は大石内蔵助が願い出た浅野家再興の嘆願をにぎりつぶした

内蔵助が、

「やむをえぬ」

と、天下政道への抗議のため、吉良上野介を討つべく江戸へ入ったのは、翌年の十一月である。

その前から小平次は鰐屋家伴として、本所の吉良屋敷へ出入りをするようになっていた。如才はないし、道具屋としても名の通った小平次だけに、

「家伴よ。たびたび遊びにまいれ」

上野介も大変に気に入って、茶事の相手もさせられるようになった。

こうして小平次が近づいて見ると、吉良上野介という人物は、家来たちにもまことに親愛の情がこまやかだし、三州・吉良の領地に対する治政も、至ってこまこまとゆきとどいてい

るらしい。

（うわさにきくような人物ではないようにも見えるな）

吉良が、権欲や利欲に執念がふかく、傲慢なふるまいが多かったことは、小平次のみか、大名、旗本たちの間にも知れわたっていることだった。

赤穂浪士に対する世間の評判は熱狂的なもので、いわゆる「忠臣義士」のほまれは、以来、数百年を経ても消えることのないほどのものとなってしまった。

翌元禄十六年二月――。

諸家へ御預けとなつていた赤穂浪士たちに、切腹の命が下った。

彼らへの讃美の声は、日本国中を風靡し、それに反して、生きのこつた上野介の子・吉良左兵衛は、領地没収の上、諏訪へ流される始末だった。

赤穂浪士の榮譽がたかまるにつれ、小平次の胸も高鳴りはじめた。

（あの人びとのはたらきのかげで、このわしも、役買ったのだからな）

と、例の寝ざめの悪さなど忘れたように、ひそかに低い鼻をうごめかしているのも、わるくない気もちなのである。

妻も、

「よいことをなされましたね　お見あげ申しましたよ――

などと、ほめてくれる。

いつの間にか、小平次の胸底から吉良上野介の温顔が消えてしまつていた。下痢もやみ、日毎に、彼は健康を取りもどし、今度は見る見る肉がついて、腹が張り出てきた。

二年たち三年たつても、浪士たちの評判は絶えぬ

五年たつても、

これで二つの報告が一致した。

「よし」

内蔵助がうなずいた。

これで茶会の果てた十五日の午前二時前後に吉良へ討入ることが決定した。

これより先、小平次は吉良邸絵図面を二枚、これも横川を通じて内蔵助のもとへとけて  
いる。

なぜ、小平次は赤穂浪士たちのためにはたらいたのか……

「ただ一人の、好きな遊び友だちのために、義理をしたまでさ」

すべてが終ったとき、彼は、妻女のよねのみにこうもらした。

けれども、いざ吉良上野介が討ちとられたとなると、小平次は妙にさびしかった。  
吉良邸へ行きたびに、

「家伴、これも妻と子たちへ……」

と、上野介は必ず、みやげの菓子や品物をもたせてよこしたものである。

そのときの上野介の温顔が、小平次の胸にやきついている。

それに、上野介には並たいていではない金もうけをさせてもらっていた

(ああ、どうも寝ざめがわるいな)

眠れぬ日がつづいた。

小平次は、それまで丈夫だった胃腸を病み、しつこい下痢になやまされたりした。

か  
た  
き  
う  
ち



「赤穂の方々が討入りをなさった前の夜は、ひといい雪でしたなあ」

十二月になると江戸の人びとは、赤穂浪士のうわさでもちきりとなるのだ

そのころになると、服部小平次も、ごく親しい人たちには、

「いや私もな。これで、むかしは浅野様には少々御縁がございましてな。左様で、あの大石内蔵助さまのお若いころには、格別のおひきたてにあずかりましたもので……」

などとしたり顔で、いいはじめるようになった。

小平次は、もう全く吉良上野介の顔をおぼえていない

鐐屋家伴としての

「家業」はいよいよ繁盛をした

（「推理ストーリー」昭和四十一年十二月号）

しかし、敵討ちの旅へのほらぬわけにはいかない。敵を討って帰らなければ、武士の体面上、どうしても失業しなくてはならないことは、いうまでもない。

武士の世界の、これが「規則」であり「法」なのである。

「とても、おれは重兵衛には勝てぬ」

出るものは、ため息ばかりだった。

平太郎も、ひと通りの剣術はやってきたが、重兵衛には、とても及ばない。鬼塚という苗字そのまま、重兵衛の剣は松平藩随一の評判をとっていたし、事実、その通りなのだ。そのしょうこに、平太郎の親類たちも「しっかりやって来い」というだけで、誰ひとり助太刀を買って出るものがいなかった。

殿さまも家老たちも、喧嘩の理由が下らぬことだけに死んだ平太郎の父へも同情せず、これも「一日も早く敵の首を討って戻るよう」と、かたちだけのはげましをあたえただけだった。

さて……

むし暑い夏のその夜のことである

東海道・吉原の宿の旅籠「扇屋」へ泊っていた鬼塚重兵衛は、その夜も、

（平太郎め、どこをうろついておるのか、早く出て来い。何時でも叩き斬ってやるぞ）

こう思いながら、酒を飲み、いい気持で眠った。

夜更け、……といっても明け方近くに、重兵衛の部屋へ忍び込んだものがある。

鬼塚重兵衛は、森山平太郎の命をねらっていた。

「敵討ち」というものが、二人の間にはあったのだ。

といっても、重兵衛は敵を討つ方ではなく、討たれる方なのだった。「敵討ち」というものは、必ずしも、敵を討つ方が、敵を追いかけているとばかりはいえない。

重兵衛のように「何時でも来い。可哀相だが返り討ちにしてくれるぞ。いや、こっちの方から平太郎を探し出し、あの、か細い素ッ首を叩き落してくれるわい」と、まさにファイト旺盛な敵さえもいるのだ。

松平丹後守の家来・鬼塚重兵衛が、同輩の森山平太郎の父・平之進と喧嘩して、これを殺害し、信州・松本の城下を立ち退いたのは、約一年前のことだった。

喧嘩の理由は、下らないことだ。

城下にある娼家の女を争ったのがもとで、三十歳の重兵衛と五十五歳の平之進は、犬猿の間がらとなつてしまった……というわけなのである。

「そのようなバカバカしいことがもとで、つまらぬ口争いをして、刀を抜き合わせるなどは……ああ、父上も、まったくバカなことをしてくれたものだ」

森山平太郎は、大いになげいた。

上州と越後をむすぶ三国街道が、国境の峠へ近づいているあたりの村外れに、鬼塚重兵衛がいた。

一方は切りたつた崖で、一方は赤間川の急流が、夏の陽にきらめいていた。

「平太郎も、今日かぎりの命だわい」

重兵衛はつぶやき、そつと大刀の柄をなでて、自分を敵とつけねらっているだろう森山平太郎の来るのを待ちかまえていた。

さつき、重兵衛は、街道の小さな村を通りすぎたとき、その農家の庭で、昼の弁当をつかっている平太郎と若党の弥市の姿を、街道からチラリと見たのだ。

（あいつだ！）

さいわい、平太郎主従には気づかれていない。

重兵衛は、にやりと笑い、村外れの街道まで来て、後から来る平太郎を返り討ちにするとにきめた。

（あいつを片つけてしまえば、おれも気が楽に眠れるからな）

いくら腕に自信のある重兵衛でも、つけねらわれるのは気持のいいものではない。どんな不意うちをかけられるか知れたものではないからだ。

（これで、おれもサッパリするわい）

夏の日ざかりなのだが、旅ひとの姿もなかった。

（もう間もなく、やって来るだろう。来たなら、下の河原へ連れて行き、首をはねてくれよ）

平太郎ではない。いわゆる「ゴマのハエ」という奴だ。重兵衛の財布が重いこじを見ぬいた「ぬれ闇の六助」という奴だった。

重兵衛の家は倅約家の父親がのこした金が大分あり、その金を逃げるときに持ち出してきたものだから、まだ重兵衛のふところには三十両あまりの金があったのだ。

ずるずる……と、ぬれ闇の六助が、重兵衛の枕の下から財布を引きぬいたとたん、  
「ええい！」

大いびきで寝込んでいたと思われた重兵衛が飛び起き、脇差をつかんで抜きうちに斬りつけた。さすが敵もつ身だけに油断はなかった。

「わあ……」

悲鳴をあげて、くら闇の六助は廊下へ逃げ、血をふり落しながら二階の物干し場から路上へ飛び降り、姿をかくした。

「扇屋」の中は、大騒ぎになった。

「命みようがな奴め」と、鬼塚重兵衛はうそふいた。

財布をつかんだままの六助の右腕が、重兵衛の部屋に、ぱったりと斬り落されてあった。

## 二

また一年たった。

やはり、夏のことである。

も気がつかれねえようにな——」

左腕に棍棒をつかんだ六助は、仲間と共に、重兵衛の死体を、そこへ運ば去った。街道の上には、一滴の血もこぼれてはいなかった。

やがて、森山平太郎が若党の弥市と共に、そこへ通りがかった。

「今日も暑いのう」と、平太郎が、うんざりしていった。

「おれたちは、いつになったら国へ帰れるのかなあ——」

「若旦那様。敵を討たねば……」

「討てるかな」

「そんな心細いことを……」

「おれは重兵衛にはとても勝てんなあ」

「それじゃア、どうなるんです。一生、このまま、旅をつづけておいてになるおつもりですか？」

「わからない……困ったなあ……」

弥市も、うんざりして主人の顔をながめた。

### 三

七年たった。

森山平太郎は、まだ鬼塚重兵衛をさがしつづけていた。さがすというよりも、そのころの

う

重兵衛は、ゆっくりと立ち上り、刀の下緒をとってタスキをかけた。その瞬間だった。

崖の上から、何の予告もなしに落ちて来た風船玉ほどの石が、もろに重兵衛の頭にふち当たった。

「うーん……」

ぱったりと重兵衛は倒れた。

すると……。

崖の上の木蔭からイナゴみたいに飛び出して来た男が三人うめいている重兵衛に躍りかかり、手にした棍棒や石をふるって、

「こん畜生メ」

「ざまアみやがれ！」

めちやめちやに重兵衛をなぐりつけた。

さすがの重兵衛も、もう駄目だった。

重兵衛は白い眼をむき出して死んだ。

「見やがれ。とうとう敵をとったぞ」

叫んだのは、ぬれ闇の六助だった。

「おう、手前たち。ご苦労だったな。この野郎の死ガイは、上の山の中へ埋めちまえ。誰に

看

板



平太郎は、重兵衛に出会うことを恐れながら、ひくひくと、心細い旅をつづけていたのである。

若党の弥市は、たよりない主人を捨てて、どこかへ逃げてしまっていた

（『貞説・仇討ち物語』昭和三十九年三月刊所収）

嚙下させたという。

第二条の「つとめ」するとき、というのは「盗み」するときといいかえればよいのだが、犯罪を「つとめ」だと自負しているところなど、いかにも、当時の盗賊の「典型」でもあるし、われから夜兎なぞと洒落のめして名乗る芝居気も同様で、いやしくも「つとめ」する気で盗むほどの輩は、必ず大形な名乗りをあげ、盗みに入るときの衣裳にまで独創を競い合つた。

角右衛門が生きていた、いわゆる江戸時代中期から後期へかかろうとするころは、日本に戦乱が絶え、天下が徳川將軍のものとなつてから約百年を経ており、都市を中心に、すさまじいばかりの發展をとげた商業資本と指導階級である武家社会とが押れ合い、貧富の差と身分の上下が錯綜し、矛盾をはらんだまま、異常な繁栄へ突き進んでいたのである。

あるところにはあり、無いところには無いというこの繁栄は享楽と消費に裏うちをされておき、いうまでもなく、農村その他の労働力の上にきずかれたものであるから、絶えず危険をはらんでいた。

幕府も、大名も、これに苦しみつつ、何度も施政の改革をこころみては失敗をかさね、しかも大町人たちの財力は、ふくらむばかりとなる。

役職にあるものの汚行や収賄が常識となつた。

だから、夜兎の角右衛門などが、三分の理をとなえてはばかりなことになる。

角右衛門のように規模がひろい組織をもつ盗賊は、二年か三年に一度、大仕事をやればよいし、それだけに都会を中心に狙いをつけるわけだが、当局も、むやみに氾濫する盗賊たち

## —

〔盗人にも三分の理〕という諺があるけれども、盜賊・夜兎の角右衛門の場合には、  
「つまるところ、いま、この世の中で金と力のあるやつとは、みんな泥棒と乞食の寄り集まりだ」

と、いうことになる。

その金と力のあるやつどもから盗みとるのだから悪いことではない。彼らが盗んだものを盗み返すだけのことで、

「これほどにしなければあ、世の中のつり合いがとれねえものな」  
と、これが角右衛門の「理」であった。

さらに角右衛門が、自分と、その味のものへきびしく課した戒律は次のごとくである。

- 一 盗まれて難儀するものへは、手を出すまじきこと。
- 一 つとめするとき、人を殺傷せぬこと。
- 一 女を手ごめにせぬこと。

そして、新たに角右衛門の手下になったものには、角右衛門が三カ条をしたためた紙片を

手代らしい若者を二人つれていた。

なべや方では、小柄で色白の、人品のよい亀屋儀八を、もてもなく信用し、

「この年になって一人も子宝にめぐまれないのでね、泊り合せたのが運というものだろうか、私が、よい子に育てましょう。ですが、このことは何分内密にしておいていただきたいというのは今日只今から、この子は亀屋の後つぎになるのだからねえ――

おだやかにいって、儀八は「なべや」へ金五両の祝儀をはずみ、捨子の角右衛門をみずから抱き、浜松を去った。

この儀八が、夜兔の先代で、名を角五郎といった。すなわち、角右衛門が「おやじ」とよぶその人である。

先代は、京にも大坂にも家をもっていたが、本拠は江戸で、根津権現社の門前町にある水茶屋（すすきや）を経営し、女房のお栄がすべてを切りまわしていた

角右衛門は不自由なく育てられ、その過程において、先代夫婦のたくみな教育により、  
「おれのうぐいすも、どうやら啼きそうだよ」

と、先代にいわしめた。

例の「三分の理」と戒律を叩きこまれ、角右衛門が先代に従い、初めて仕事をやったのは  
明和四年十二月のことで、四谷御門前の蠟燭問屋（伊勢屋）九兵衛方へ押し入り、九百八十  
二両余を強奪した。

このときは、角五郎、角右衛門以下九名の同勢で押しこみ、盗賊どもは、いずれも揃いの

には必死で立ち向かった。

江戸では、奉行所のほかに、一種の特別警察ともいふべき「火付盗賊改方」という役職があつて、頭には旗本の中でも特に手腕あるものが任じ、盗賊の探索、捕縛には非常なはたらきをしめした。

だが、夜兎の角右衛門は四十になるそれまで、一度も「お縄」をかけられたことがない。「おやじも六十年の生涯を、召し捕られずに隠れぬいたが、とうやら、おれも、おやじにやかれそうだな」

五年ぶりに、上方から江戸へ戻つて来た角右衛門が、先代からの手下で、他のものからは「隠居」とよばれる前砂の捨蔵に、こういった

「のう、捨蔵。これで後は、二度か三度……いや、二度でいい。大仕事をやつてのけたら、それでおしめえだ。そうになったら、うんと楽をしてもらうぜ」

角右衛門は捨子であつた。

生まれて一年目に、浜松の旅籠（なべや）三郎兵衛方の軒下へ捨てられていたのである。捨てられたのは夜ふけで、しばらくは眠つていた赤子が火のつくように泣き出したのに気づき、なべやの女中が拾いあげた。

翌朝、このことをきいた泊り客の一人が、

「その捨子の顔を見せておくれ」といい、目見て、「私がもらいましようよ」と、いった。この泊り客は、江戸・日本橋通り一丁目の足袋股引問屋の主人で、亀屋儀八と宿帳にしるし、

先代は死の床にあつて、

「おれが、こうして畳の上で死ねるのも……」

つまり、三カ条の戒律をきびしく守りぬいて来たからで、それか守れぬというのは天道にそむくわけだから、必ず召し捕られてしまうと、いいわだし、

「お前についちゃ安心だし、また、乾分のすることに間違えはねえが、若いものには、くれぐれも氣をつけることだ。もしも、乾分どもが掟を破ったとき、そいつは、お前一人の肩に背負わにやならねえ」

「ふむ。わかった。だが後学のためにきいておきてえ。一体、どんな背負い方をしたらいいのだえ？」

「ふん。そうだったら、お前一人、いさぎよく、名乗り出て、お縄につくことだ。それほどの決心がなくて、おつとめが出来るものか」

事もなげに、先代はいった。

先代が死んだ八年後に、養母のお栄も死んだが、このときまで、二代目・夜兔の角右衛門は、自分が捨子だったことを全く知らなかったという

「おれたち夫婦が死んだ後で、角右衛門へきかせてやってくれ」

という先代の遺言通りに、前砂の捨蔵が、

「実はねえ、二代目……」

すべてを語ると、角右衛門は意外にさはさはと、

紺地に白兔しろうさぎを染めぬいた筒袖つつそでの仕事着に紺股引、紺足袋といういでたちで、黒頭巾くろずきをすっぽりかぶっていたのだが、主人夫婦から家族、店の者まで縛りあげてしまったあと、二、四歳の女の子供が目をさまして泣き出したのを、

「おお、よしよし。おじさんがおいしいものをあげようねえ」

と、先代が抱きあげ、ふところから、宮永町の菓子舗「松浦や」の八百代饅頭やまぐちまんじゅうを出してあたえ、その子がけけらけらと笑い出した。

夜兎の先代は、子供好きで、こうした場面を、角右衛門も数度見ている。

こういうとき、子供をあやす先代の声は別人のもので、

「おれたちは十色ほどの声を持っていくちやアいけねえ」

角右衛門もうるさくいわれ、

「道を歩いていても、ほんやりするなよ。歩いている人間の姿形をよくおぼえておくことだ。いざとなったとき、坊主ぼんずにでも乞食にでも、または二本差しの立派な武家にも化けなくちやアならねえのだから……」

と、先代はいった。

安永三年の夏に、先代・夜兎の角五郎が「すすきや」で、女房や角右衛門にみとられながら安らかに死んだ。

角右衛門は、二十五歳に成長していた。

「もう大丈夫だ。心おきなく、お前に二代目をゆずって死んで行けるぜ」

た花店の権利を買いとり、一人きりで暮している

ひよろりと瘦せた体をひどく曲げて、この六十をこえた老盜賊は、毎日、野合の花を売りつづけてきたのだが、

「とつつあん そろそろ手をつけようじゃアねえか」

訪ねて来た角右衛門へ、

「で、いつにおやりなさるのだえう？」

皺だらけの面に血をのぼせた。

「来年。元日の夜——」

「ふうむ……」

二人が狙っているのは、京橋・大根河岸の海苔問屋「長坂屋」勘六であった。

長坂屋は、江戸城内をはじめ、紀州・尾州・水戸などの大名屋敷へも海苔、海藻類を入れている大問屋で、格も上等なら財産もたつぷりしすぎている。

奉公人も三十人に近いし、ここへ押し込むのは夜兎角右衛門にとつても、かなりの大仕事だ。

しかも、人を殺傷すべからずという例の戒律を損ねずに「つとめ」を成功させるためには、一年の準備期間も短すぎるほどであった。

出来れば、先ず、一味のうち一人か二人を奉公人として長坂屋へ住みこませることが必要であるが、これは、適当な者が、いまの一味にはいない。相手が大店だけに身もともきちん



「そいつは知らなかったが……どっちにしても、おれの両親は、あのお二人をおいてほかにはねえ。そうだろうが……その理屈じゃアねえか、とつつあん」

こういつて、顔色も変えなかった。

先代が死んだときから、角右衛門は、白兎を染めぬいた揃いのコスチュームを廃止することにした。

このころになると、爛熟した世相とは反対に警察組織がととのえられ、芝居気取りで盗みをするわけにも行かなくなつたからである。

それだけに、四十歳の正月を寛政元年に迎えた夜兎の角右衛門のよろこびは大きかつた「おしん。どうやらおれも、畳の上で往生が出来そうだな」

先代からゆずられた根津権現門前の「すすきや」の間で、角右衛門は、女房のおしん、ひとりむすめで十歳になるおえんと共に、上機嫌で屠蘇を祝つた

## 二

この年の二月七日の昼すぎ、角右衛門は、どこかの本店の番頭といった物堅い扮装で「すすきや」を出た。

浅草・鳥越にある松寿院という寺の門前に小さな花やがあり、この店の亭主が、夜兎一味の隠居、前砂の捨藏なのである。

去年の春、上方で一仕事して、角右衛門と共に江戸へ戻つた捨藏は、丁度、売りに出てい

「なんだ」

「あんまり事を急ぐのは、こいつあ危ねえ。何、長坂屋が消えてしまふわけじゃアねえのだから、何も来年元日と、日を決めねえでも……」

「いや、そいつはいけねえ。日が決まらねえじゃア仕度が出来ねえ。押しこむ月日に向かつて、一日一日と、こっちの意気込みも強くして、体にも気がまえにも、びったり一分の隙もねえようにして行くのが、先代ゆずりの心組みだ。とつつあん、臆病風に吹かれたのか、年だなあ」

「二代目。冗談はよしなせえ。まあ、ようがしよう。やってみましようよ」

下相談をすまし、角右衛門が帰途についたのは八ツ半（午後三時）ごろだったろうか……

鳥越から新堀河岸を菊屋橋へ出て、土づ店とも新寺町ともよばれる大通りを、角右衛門は車坂へ向かつて歩いた。

両側は寺院ばかりで、強い風にあおられ、大通りが埃にけむっていた。

前方に上野山内の木立が見える広徳寺門前まで来たとき、

「おや……?」

角右衛門は、すぐ前に行く若い男のそぶりに気づいた。

その商家の手代らしい男は、きよろきよろとあたりに目をくはり、目を血走らせ、埃の道を見つめ、ふらふらと歩いている。

「落しものですかえ?」

とさせなくてはならぬし、そのための工作をととのえるには、もっと長い歳月をかけねはなるまい。

すでに、按摩あんまくずれの徳の市というものを長坂屋の近くへ住まわせ、徳の市は巧みに取り入り、去年の暮から長坂屋出入りとなつて主人夫婦の肩をもみ、ひどく氣に入られているそうだ。

いまの江戸には、味の者が合せて五人ほどいるが、諸方へ散っている仲間をあつめ、少しづつ江戸市中に潜伏させるための仕度だけでも、面倒な手間がかかるものなのだ

「今度は、うっかり氣をゆるめてはならねえ。去年、火付盗賊改方の頭領になつた長谷川平蔵そうざうという旗本は、若えころ、本所界隈りやまで鳴らしたごろつきだつたそうなが……それが、とつあんな。家をついで、先手組に入つてからは、大した切れ者になつたというぜ」

「へへえ……」

「そのやつが、今度は盗賊改メだ。何しろ、むかし札つきだつたところには、こそ泥や博打ばちうちや、くら闇くやの中で息をしている連中とは友達づき合いをしていたというんで、手づるは四方八方に通じていやがる」

「そうだってねえ」

「たつた四月の間に、お縄にかけた盗人が大小合せて二十七人というから、おどろくじゃアねえか」

「ねえ、二代目」

(や、右腕がねえ)

若いのか老女なのか、その区別もつかぬ女乞食なのである。

赤茶けた手ぬぐいで頬かぶりをしているその下から、それでもたつぷりと束ねた髪の毛が辛うじて、女であることを証明しているのであった。

女乞食は角右衛門に目もくれなかった。

「もし、そこのお人」

「へ……」

きよとんと振り向いた手代へ、

「お前さん、昼ごろに広徳寺の前で、これを落しなさったろう」

一本しかない手で紫の服紗ふくさ包みを突き出した

「あつ……」

むしゃぶりつくように、若い手代は包みを引ったくり、女乞食をにらみつけ、

「と、とと、盗ったな」

と、わめいた。

「何をいいなさる 中をあけて、しらべてこらん 中のものを盗るほどなら、この埃の中を

二刻ふたとき(四時間)も、落し主か戻つて来るのを待っているかい」

びしりと、鞭むちのような声である。

「へ……」

角右衛門かくえもんが思わずきくと、

「は、はい……」

手代の顔は、まるで死人であつた。

「何を？」

「お店たなの、金を、落しました」

「いくら？」

「四十五両ほど……」

「それは大変だ」

手代は、蔵前片町の札差さかい「堺屋」伊兵衛方のものであつた

「それはどうも、困りましたねえ」

角右衛門も、この手代の相談相手になるつもりはない

（若いものは仕方がねえもんだ）

苦笑して行きすぎようとしたとき、

「おーい。おーい、もし……」

叫んで、広徳寺の塀へい際ぎわにうずくまっていた乞食こじきが通りを横切り、駆けて来た

垢あかと埃と汗にまみれた襦袢ゆうたんをまとい、日に灼けた黒い顔、手足が目の前に来たとき、

（これでも女か……）

角右衛門は目をみはって、

駆け出しながら、

「礼は私がいっておこうよ」

と、角右衛門が手代にいった。

### 三

間もなく、夜兔の角右衛門は女乞食を連れて坂本二丁目にある「鮎八」という料理屋へ入った。

大通りから根岸の方へ入ったところにある藁ぶき屋根の小さな店だが、鰻がうまいあれから、女乞食を追いかけてつかまえ、この店へ連れこむまでが大変であつた。どうしても厭だというのを、

「お前さんの気持がたまらなくいいもんで、私と一緒にめしを食いたくなっただけのことなんだ。ねえ、たのむから、つき合っておくれよ」

ようやく口説きおとし、鮎八ののれんをくぐると、女中が女乞食を見て顔をしかめたけれども、角右衛門は馴じみの上客であるから文句はいえない。

二階の小間へ入って、

「さっきは、うなぎが好きだときいたから、この店へ来てもらつたのだが、ここは鯉もうましく食べさせるのだよ。生簀に飼つてあつて、そりゃ肉のしまつたうまい鯉だ」

「いいえ。うなぎが好きなんじゃアないんです」

ぶるぶると体をふるわせ、手代は包みの中をひらき、さらに絹の布をもって包んだ小間をあらためて見て、

「あ、ありました、ありました」

今度は、へたりこんで金包みを前においたまま、両手を合せて女乞食を拝み出した  
「ありがとう存じます。かたしけのうございます……」

いうなり、手代はそこにひれ伏し、引きつるような泣声をあげはしめる  
人だかりがしてきた。

「お前さん。早く仕舞わないと、またそのお金か何処かへ飛んで行ってしまうよ」  
角右衛門が声をかけると、手代は、あわてて、包みをふところへねしこみつつ、

「もし、お乞食さん。お名前をおきかせ下さいまし。もし、もし……」  
叫んだとき、女乞食は黄色い埃の幕の中へ消えようとしていた

「あつ。もし、お乞食さん……」

「これさ」

手代の肩をつかんだ角右衛門が、

「早く、お店へ帰りなさい」

「でも、あなた……」

「とても名乗るようなお人じゃないよ、あのお乞食さんは……何とまあ、大したお人が、この世の中じゃアいるもんだ」

「へえ？」

「さっきのことさ、あれだけの大金を拾って、平気だったかえう。私なら返さないな」と、角右衛門は笑ってみせた。

「でも……」

女乞食は、まだ鯉のあらいには手をつけずに、

「旦那<sup>だんな</sup>。乞食というものは、人のおあまりをいただいて暮しているんですよ」

「うむ……」

「世の中には義理があるのさ」

「だからといって……」

「でもねえ、旦那。御承知じゃアないか知れないけれど、私ばかりじゃなく、乞食というものは、わりと拾いものを返しますよ」

「へえ、そうかね」

「そりゃアねえ……」

「何だね？」

「笑っちゃアいけませんよ、旦那」

「笑うものか、いったい……？」

「人間、落ちるところへ落ちてしまっても、何かこう、この胸の中に、たよるものがほしいのだねえ」



女乞食は左手を膝の上へきちんとおき、身を固くしている

よく見ると、着ているものも襤褸は襤褸だが、よく手入れもしてあるし、異臭もただよつてはいない。

骨張った体つきの顔色もよくない女乞食を、角右衛門は五十前後と見た

「好きじゃないのに、どうして食べる？」

「好きだかきらいだか、まだ生まれてこの方、うなきを食べたことがないから……」

「ほほう」

「おいしいのだってねえ、うなぎは——」

「そりゃ、うまいさ」

「見たことは何度も見たし、匂いを嗅いだこともあるし……死ぬまでに一度、どうしても食べてみたい、いえ食べないで死ぬものと思っていたけれど……」

乞食の声は恥ずかしげではあったが、言葉づかいも下卑てはいなかった。酒がきた。

「のむかえ？」

「いっぱいだけ」

鯉のあらいがきた。女中たちが白い眼で、じろじろと片腕の女乞食を見ては出入りをするのだけれども、女乞食は、この点、気にもとめないようであった。

「お前さんにきくがね」

角右衛門は、おどろいた。

「ど、どうしたのだ、大丈夫かえ？」

女乞食は首をふった。

「いけなかったか？」

「いいえ……うなぎって、こんなに、おいしいものだったんですかねえ」

「おいしいか、そいつはよかった」

「とうとう、私は、うなぎを食べた、食べましたよ」

泪をぬぐおうともせず、あつという間に食べ終えた女乞食に、

「私のお食べ」

「いいのかね」

「いいともさ」

今度は、ゆっくりと食べはじめた女乞食に、

「お前さん、いくつになるね？」

「二十六」

「え……？」

「そうは見えない、と、旦那は思っている。五十にも六十にも見えるだろうね」

「いや、そんな……」

「たった七年の間に、私は、こんな顔になってしまった……」

「たよるもの、ねえ……」

「いえば看板みたいなものさ」

「かんばん、かね……?」

「人間、だれしも看板をかけていまさアね。旦那のお店にもかけてござんしょう」

「あ、ああ……」

「乞食のかけている看板は、拾いものを返すってことなんですよ」

「ふうん……」

「せめて、その看板の一つもかけていないことには、こんな商売はして行けないものね」  
うなぎが来た。

窓の向うは百姓地で、左側に上野山内の森が夕闇に溶けかかっていた。  
風は、もう落ちていた。

「さア、おあがり」

すすめると、女乞食は、ふつくらと焼きあがつて皿さじにももられているうなぎを、目ばたきもせず呼吸をつめ、凝視している。

「どうしたのだい?」

「へえ……」

ぺこりと頭を下げ、女乞食が左手に箸はしをとって、うなぎを食べた。  
口へ入れて、もぐもぐ嚙かんで、嚙えんか下したとき、女の両眼から泪なみだがふきあがってきた。

うめくように、角右衛門がいった：

「お前さん、身寄りはないのかえ？」

「そんなものがいたら……いいえ、ほしくはありませんよ、そんなもの……」  
いいさして、うなぎを食べ終った女乞食は、ふといためいきを吐き、

「うなぎって、ほんとに、おいしいものなんだねえ」  
うつとりと、いった。

夜兔の角右衛門は顔面蒼白となり、うつ向いたまま煙草入れから煙管を引き出したが、その煙管は煙草盆の縁へ、わなわなとあたって、ひどい音をたてた。

#### 四

女乞食のおこうに、角右衛門は持ち合せの一両余をわたし、

「これで、お仲間に酒でもあげておくれ」

というと、おこうもよろこんで受け取った。

おこうと別れてから、角右衛門の体は多忙をきわめたのだが……

それはさておき、車善七が支配する浅草見附の乞食溜りへ帰ったおこうは、自分の小屋に親しい仲間をよび、角右衛門からもらった金で酒肴をととのえ馳走をした。

そのとき、おこうが仲間の乞食たちに、

「ふとした縁で、見ず知らずの、どこかの旦那によばれ、きれいな座敷の客になり、生まれ

「その右腕は、どうしなすった？」

ぼろの着物の右肩から筒袖がたれ下っているのである。自分のそれへ、ちらりと視線を走らせながら、

「切り落されたんですよ」

と、女乞食はいった。

「切られた、とね……」

「七年前にね」

「どこでだい？」

「駿府のお城下に、大和屋という大きな紙問屋があつて、私は、そこで飯たきをやっていた。七年前の暮の、あれはたしか二十八日だったけれど、泥棒が七人も押しこんできてねえ——

「ふむ……」

「私はそのとき、便所へ行つていて、うまく見つからなかったもんで……それで、何とか外へ逃げ出し、このことを知らせなければと思つてね。庭づたいに、そつとぬけ出して、それでもまあ塀の外へ出たとたんに、見張りの泥棒に見つかつてしまい、いきなり……」

「う、腕を切りやアがつたか」

「ええ。背中も少し切られました。そのまま引っくり返つて……あとは、もう、おぼえていません。いいあんばいか悪いあんばいか、それでも死ななかつた。でも……でもねえ、旦那、片腕しかない飯たき女なんぞ、もうつかつちゃアくれませんでしたよ——」

裏口から入った。

老盜賊・前砂の捨藏は、すでに旅仕度を止めたので、角右衛門を待っていた。

「とつつあん。昨日の女乞食は亡くなつたぜ」

「え……どうしてまた……」

「うなぎを食べさせたのが仇になつた」

ざつと語つてから、

「とつつあん、では、たのむ。七年前のあの夜、駿府の大和屋の堀外で、見張りをしてゐたのは名草の綱六だ。おぼえてゐるな」

「へえ。たしかに綱六……」

「くちなわの平十郎どんからたのまれて、あのときはじめて綱六を手下につかしたのが……やつはりとつつあん。あいつはむごいところのあるやつたんだ」

「綱六は、いま備前の下津井しもつに隠れてゐる筈はずたかね、二代目」

「おれは、もう二代目じゃアねえ」

「へえ……」

「昨夜、家へ帰り、女房手には因果をふくめてきた。かきあつめた金は全部で百八十九両二分。このうち五十両は、おしんにやつた。残りの……」

いいさして、角右衛門が重い胴巻を捨藏の前へ置き、

「これを、みんなで分けてくんねえ」

ではじめてのうなぎを食べた。おいしかったの何のつて……まるで私ア、極楽浄土とやらで夢を見ているような、いい心もちでねえ……こんな、うれしい、たのしいおもいをしたことは、ほんに生まれてはじめてだ。この心もちのまんまで、このまま、もう私ア、あの世へ行つてしまいたい。どうせ、これから生き残つていても、二度と、あんなおもいは出来まいから……」

しみじみと、しかし満面に笑みをたたえ、うれしげに語ったという仲間は、むろん冗談だと思ひ氣にもとめなかったのだが、この夜ふけ、女乞食おこうは、首をくくつて自殺してしまつたのである。

夜兎の角右衛門が浅草の乞食溜りへやつて来たのは、その翌朝であつた。「首をくくつた……」

角右衛門は、乞食たちからすべてをきき、痴呆のような表情になつた。

おこうの死顔は安らかなもので、うなぎの味覚に飽満した満足をそのままに、うすい笑みさえ口もとに浮いていた。

しばらくして、角右衛門は金三十両をこの溜りの頭にわたし、「おこうさんとやらの回向をたのみます。あとは、みなさんで何か食べて下さいまし」と、いった。

角右衛門は、溜りを出ると、まっすぐに鳥越へ向かつた。松寿院前の花やは固く戸を閉ざしている。

捨藏に別れた後、夜兎の角右衛門は傍目もふらずに本所、ツ目にある火付盗賊改方頭  
領・長谷川平藏の役宅へ自首して出た

長谷川平藏宣以は、このとき、四十四歳、江戸中の盗賊ともか一鬼の平藏——  
の男だが、

「よく名乗って出た。ほめてやろう」

すべてをきいて、角右衛門に、

「名うての盗賊だけに、思いきりも早かったな」

「一日のぼしにしておいては、私も人間でございますゆえ、氣後れをしかねませぬ」

「ふうむ。なるほどな、人を殺傷せぬことが、まことの盗賊の掟だな……」

「はい。その看板を、とうとう倒してしめえました」

「そうさ」

長谷川平藏は、むずかしい顔つきになり、

「その女乞食の看板と、お前の看板とは、だいぶん違うのだ」

「へ……」

「お前の看板の中身は、みんな盗人の見栄だ、虚栄というやつよ」

「へえ……」

「どうもわからぬらしいな。わかるまで牢へ入っている。わかつてから首をはねてやろう」

夜兎の角右衛門は、どうしてか刑を受けなかった



「じゃア、これが、お別れで……」

「いうまでもねえ。先代ゆずりの掟を手下が破ったのだ。何のかかわり合いもねえ女の腕を切り落すなんて畜生め……こうなつては、もう、晴れて盗みも出来やアしねえ。とつつあん、夜兎の角右衛門は盗人の面よごしになつてしまつたよ」

「仕方ありませんねえ」

捨蔵は、さびしく笑つたが、

「で、どうなさいますね？」

「綱六のことか？」

「へえ」

「おめえにたのもう」

「引き受けました。綱六の右腕を叩つ斬つてやりましょう」

「いや、腕よりも……いっそ殺つてしまひねえ。あの野郎、生かしておいては何をこそするか知れたものではねえ。世の中のためにならねえやつだ」

「まかせておいて下せえ」

捨蔵老人は、血気さかな名草の綱六を殺しに行くため、江戸を発つのである。立ち上ると、前砂の捨蔵の腰は、ぴいんと伸びた。

「では、これで——」

「とつつあん。長生きをしてくんねえ」

の囚人を入れて、これを保護、教育し、手職をつけさせ、出獄後の益ならしめんとした幕府は、この平蔵の進言を採用し、かなりの経費も出したようである。人足寄場が出来ると、角右衛門は小間物店をたたみ、寄場へ入って囚人たちのめんどうを見ていたようだ。

それでも、ときどき、ふいと消えてしまうので、囚人たちが、

「ああ、こりゃアまた大きな手入れがあるぞ」

語り合つたという。

この間、角右衛門の女房や娘は、その消息を少しも知らなかった。死刑になれば市中に知れわたるから、それとわかるが、そのうわさもない。自首するといつて家を出たまま、消えてしまった夫を、

（もしかすると気が変わり、どこかへ身を隠しているのでは……）

などと、おしんは気もそぞろだったが、自首した年の秋の夜に、ふらりと前砂の捨蔵か「すすきや」へ顔を見せた。

「捨蔵さん、夫と一緒にじゃなかったのかえ」

おしんがきくと、

「いいや」

捨蔵は首をふつた。その頬からあごへかけて、刀痕が生なましい。

「左様で。名乗り出てから行方が知れずとねえ」

長谷川平蔵は、江戸時代の警吏の中でも異色の存在である

後に、葵小僧あおいこそうという役者上りの盗賊を捕えたときのことだが、このやつは盗みに入ると必ず女を犯していたため、この被害者だけでも十数人に及んだ

これを知って、平蔵は取調べもろくにせず、いきなり葵小僧を死刑にしまったので、奉行所や幕閣からも、かなりうるさい文句も出たが、

「もともと火付盗賊改方という御役目は、無宿無頼のやからを相手に、めんとうな手づきもなく規則もなく刑事にはたらく、いわば軍政の名残りをととめる荒々しき役目でごさる、それがしは、その本旨をつらぬいたまで」

と、はねつけ、びくともしなかった。

このため、葵小僧に犯された女たちは、取調べも受けることなく、その不幸な秘密を白日の下にさらけ出さずにすんだのである。

翌寛政二年の秋ごろから、夜兎の角右衛門は、長谷川平蔵のためにはたらきはじめている。角右衛門は回向院えこういん裏に小さな小間物屋をひらき、ひとり暮しをつづけながら、江戸の暗黒街を探りまわり、火付盗賊改方の盗賊検挙をたすけた。

前にのべた葵小僧事件でも、角右衛門の活躍は非常なものであったらしい。

寛政三年になると、長谷川平蔵は、石川島に「人足寄場」というものをつくり、死罪以外

雨の中を出て行つてしまった。

この後……。

それは寛政六年夏のことだが、奥州・川俣かうまに潜伏していた例の大盗くちなわ平十郎を、長谷川平蔵の部下五名が逮捕に向かったとき、これを先導したのが角右衛門であつた。

平十郎は、むかしの仲間も同様で、兄弟分の盃さきをかわしたほどの男なのだが、これを捕えるためにはたらくというのは、角右衛門も、よほど長谷川平蔵の人柄ぶどうにひきこまれたからであらう。

平蔵は、このとき病床にあつたが、

「お前が出向いてくれれば、もう安心だ。たのむぞ」

と、角右衛門を送り出した。

このころ、平蔵は人足寄場の取扱を免ぜられており、角右衛門も寄場を出て、今度は横綱町の河岸かで小料理屋の主人におさまり、板前も女中も使っていたそうだが、

だが、依然として家族が待つ「すすきや」へは帰らず、女房も消息をまったく知らない

くちなわ平十郎を捕えて帰った翌寛政七年正月十二日の朝、角右衛門の店の女中が、二階六畳に寝ている角右衛門を起しに行き、障子を開けて見て、

「きやあ……」

悲鳴と共に、腰をぬかした。

角右衛門は床の上へ仰向きに寝たまま、その胸に深ぶかと脇差わきざしを突刺されたまま、血の海

沈思の後に、捨蔵が、

「もしも、二代目がお戻りなすつたら、名草の綱六かことは、おっしゃる通りにいたしましたと、こうつたえておくんなせえ」

「あいよ……でも、戻って来るのかしら？」

「ような気がしますねえ」

「じゃ、名乗って出たのではないのだね」

「とんでもねえ」

「え……？」

「名乗って出たから、戻って来るかも知れねえということ」

「だって、お前さん……」

「おかみさん。もう、あっしは二代目にも、おかみさんにもこの世では会えめえ。お達者で……」

「どこへ行きなさるんだえ？」

「どこかの山の中で……は、はは……」二代目の目が光つていねえところへ逃げて行かなくちやア、こいつはどうも、とんでもねえことになるからなあ――

わけもわからず、それでも引きとめにかかるおしんであったが、捨蔵は、草鞋わらじがけのまま上間から一足も上らず、

「ごめんなせえ」

谷<sup>や</sup>中<sup>なか</sup>・首ふり坂

の中で死んでいた。

犯人は、ついにわからなかったが、むかしの仲間からうけた恨みは察するにあまりあるというべきであろう。

長谷川平蔵は、角右衛門の骨の一部を自邸の庭へ埋め、ここに小さな稲荷の祠をつくり「角右衛門稲荷」と称し、朝夕の礼拝をおこなったが、この年の五月二十日、平蔵も心臓の発作をおこして、急死をした。

死の二日前まで、平蔵は盗賊改方の役職に在った

二別冊小説新編「昭和四十年七月」

源太郎は、辰之助に肩を押されるようにして、奥の小座敷から庭づたいに外へ出た。

下谷・二長町の屋敷がとなり合せて、幼年のころからの仲のよい友だちの二人なのだが、氣質もちがえば体質もちがう。

神田・相生町に一刀流の道場をかまえる井狩又蔵の門下で、剣術のほうでは相当な腕前の辰之助はいかにもそれらしい風貌の所有者だが、源太郎のほうは長身ながら、腰に横たえた大小の刀に足がふらつきかねぬたよりなさで、

「親しゅうねがつている間柄ゆえ、はきと申しあぐるが、このお子は、よほどに気をつけないと、源太郎の実父・永島左内の友人で、表御番医師をつとめる吉田九淵が、源太郎が生れて間もなく、両親にもらしたこともあるような

そのことばのとおり、幼年から少年時代にかけて、年中、病氣ばかりしていた源太郎だが、十七歳の夏の大病の後、すっかり病みぬいてしまったのか、めきめきと丈夫になり、その素直な人柄を見こまれ、

「ぜひ、むすめの聲に……」

と、江戸城・本丸留守居番をつとめる五百五十石の旗本・三浦忠右衛門の養子に入つたのが、今年の正月であった。

その三浦家の長女・満寿子、年齢は二十歳、武家のむすめとしての教養百般に通じているという。



「こわいのか？……え、そんなにこわいのか、女房にようぼうどのがよ」

ずばり、金子辰之助たつのすけに指摘さしをされると、さすがに「その通り」だともいえず、三浦源太郎も騎虎きこのいきおいというやつで、

「なあに……」

と、胸を張り、

「行く。行くとも」

きっぱり、こたえたものである。

「よろしい。それでこそ男だよ、おい」

辰之助はふとい鼻をうごめかし、毛むくじらのたくましい腕を突き出し、がっしりとした体軀たいくをゆさぶるようにして、

「さ、出かけよう」

立ちあがった。

よく晴れわたった晩春の昼さがりであったが、この湯島横丁にある「千草屋」という茶漬ちやづけやは大繁昌だいはんじやうで、入れこみの大座敷には客がいっぱいである。

温飯ぬぐめしに季節の魚菜をそえた「五色茶づけ」というのが此店このみせの名物だ。

さあ、いけない。

俗にいう「処女きじすめの生ぐささ」というやつで、一月もすると源太郎、げんなりしてきた。

これまで源太郎は、まったく女の肌身を知らなかったわけではない。

そこはそれ、金子辰之助のような幼な友だちがついていたことだから、彼の案内で数度、岡場所おかばへ足をふみ入れたこともある。

むろん、新妻の満寿子は処女であつたけれども、新婚の日々が経過するにつれ、次第にどのような味わいをおぼえこんだものか、すこぶる大胆な所作をするようになった。大きな鼻の穴を層倍にふくらませて鼻息も荒々しく、不様に身もだえする態が露骨をきわめはじめ、（ああ……岡場所の女たちのほうが、ずっと、つましやかだし、色気もある　こ、これが……これが五百石の旗本のむすめなのか……）

と、源太郎は興ざめがしてきはじめた。

それでいて、日中の満寿子は、夜の狂態など、どこのだれがするのか、といった頗つきでつんと見識高くすましこんでい、なにかにつけて、源太郎を養子あつかいにするのだ。父母はもとより、奉公人や来客にいたるまで、満寿子はおのが教養の高さをこれみよがしにただよわせ、気取りきつている。

さらに、である。

一心流なまなだの薙刀の名手だとかで、この新妻の臂力りよりよくの強いことは大したものだ。

夜のひめごとの最中、真剣に相手をつとめている夫の源太郎の背中へ、満寿子がむっちり

これが何かの折に、路上で源太郎を見かけ、その美男ぶりに、

「永島様の御次男なれば、よろこんでわたくしの夫に……」

父の忠右衛門にいったとかいわぬとか……ともあれ源太郎は、養子縁組には申しぶんのない三浦家へ入ったということになる。

なにぶん、武家の次三男は養子口がなければ父や兄の世話になつたまま、肩身のせまいおもいをしながら一生を送るより仕方がないのだから、実家の父も兄の主馬も大よろこびだつたし、むろん、源太郎自身もほつとするおもいであつたのだ。

「いや、めでたい。めでたいにはちがいないが、あの三浦のむすめの面はまずいよ、おい。そのことだけは覚悟しておけ」

いつか金子辰之助が源太郎にいったことがある。なるほど美女ではない。どこかこう、ずんぐりした小柄な体つきだし、小さな両眼が妙に白く光る、いくらか三白眼の、やぶにらみじみた人相で、鼻の穴が正面からはつきり見える。それにしても二十歳の肌のかがやきは、彼女の顔貌をさほどみにくいものと源太郎に感じさせなかった。

自分と同じ次男坊に生れた辰之助が、

（私をうらやんでいるのだろう）

彼のにくまれ口にも、源太郎は寛大な微笑をもつてこたえたのみである。

ところが……。

いざ満寿子と夫婦のちぎりをかわし、三浦家の人になつてみると……。

手をねじられたり、尻をつねられたり、さんざんにいためつけられ、二十六歳の源太郎が翌朝、体の痛みに耐えかねて床から起き上げないことがあったほどだ。

養父の三浦忠右衛門は、まだ退役前であるから、御城へ出て行くけれども、源太郎は一日中、屋敷にいて、この新妻の相手をしなくてはならない。

薙刀の相手をつとめさせられたこともある。

源太郎の剣術なぞというものは、まるで無きにひとしい、というわけだから、これまたさんざんに叩きのめされる。

かといって、これを実家の父母や兄にうったえるわけにもゆかぬ。みつともなくて、だれにはなしもできぬ。そうなれば、源太郎のこぼしばなしをきいてくれるのは、金子辰之助のみといつてよい。

すべてをきいて辰之助は大笑いをした。

「おれならなあ。おれなら、満寿子どのを見事、屈服せしめてくれようが……ふむ、そうかそんなに源太。夜になるとすさまじいのか？」

剣術も好きだが色事も大好きという辰之助は、異常な興味をそそられたらしく、夜の闇のありさまを執拗に問いかけてやまない。

「ふむ、ふむ、なるほど。しかし、おれならなあ、おれなら……—  
であつた。

それほどに自信があるのなら、いつそ辰之助に代ってもらいたい。自分は部屋住みの身で、

とした両腕をまわし、いきなり、

「うむ!!」

妙な声を発してしめつけると、恐ろしい痛みが走って、

「あっ……」

源太郎、おもわず悲鳴をあげてしまう

夫の、その悲鳴がおもしろいのか、

「うふ、ふふ……」

新妻は、気味のわるいふくみ笑いをもらし、

「いかが、いかが?」

尚も、強くしめつけるのだ。

「これ……よさぬか。やめて下さい」

「うふ、ふふ……いかが?」

「痛い。あ……あっ、痛い……」

「うふ、ふふふ」

腕のちからをゆるめたかとおもうと、今度はもう火焰カインのような鼻息を夫の顔へ押しつけ、強烈な愛撫あいふを要求するのであった。

（ば、ばかにするな、おのれ……）

あきれ果てて男のちからも萎なえ、満寿子の体からはなれてしまうと、さあ承知をしない。

「夜は出られぬぞ」

「むろん、昼間さ」

そこで、五日後の今日となったわけである。

## 二

その日。

金子辰之助は三浦源太郎をつれ、上野・不忍池の東をまわり、谷中へ出た。

谷中・天王寺門前から駒込の千駄木へ通ずる道の、両側にびっしりと立ちならんだ寺院の中に竜谷寺という寺がある。この寺の前は坂道になってい、ここを「谷中の首ふり坂」とよぶ。

この近くには源太郎の実家の菩提寺もある。

竜谷寺と天竜寺には生まれ、小さな茶店があった。

「よしのや」とのれんが掛った変哲もない茶店で、寺参りの人びとを相手に甘酒などを出している。

老爺ろうやの久兵衛きゆうべえというのが主で、これが人きりで店をきりまわし、ささやかに暮しているらしい。

茶店の奥が、割合に深い庭であつた。庭といつても木立と雑草に埋もれたままで、そのまた奥に物置小屋のようなものが建っている。うしろは畦田某まきだという旗本の下屋敷の高い塀で

ひっそりと実家の厄介者で一生を送ってもいいのだが……と、つくづくそうおもふのだが、いったん、養子に入つた自分が自分の一存で勝手なまねはゆるさねぬ。そこは現代より百何十年も前の封建の世であるから、実家・養家の恥さらしになることは何としてもつつしまねはならない。

「それほどのは我慢しろ。五百石の家の主になれる身ではないか」  
と、辰之助はうらやましげにいう。

「それはそうだがなあ……」

「いっそ、満寿子どのの縁談が、おれのところへ来ればよかったのに、な」

「ああした女を妻にしたいのか、辰之助さんは……」

「おもしろいではないか。夜のその、すさまじいところなど、大いに気に入った」

「そうかなあ……」

五色茶づけの「千草屋」で酒をのむうち、

「たまには息ぬきもしろ」

と、辰之助がすすめ、

「近ごろな、ちよいと、おもしろい遊所を見つけた。どうだい」

「うむ」

わるくないと思つた。毎夜の満寿子ではたまつたものではない。そつと浮氣をしてやるのも、いえば猛妻への復讐というわけであつた。

辰之助に、この久兵衛を紹介したのは、深川・仙台堀で「ふきぬきや」という居酒屋を経営している、これも同じ「あほうがらす」の与吉老人であった。

与吉のいうには、

「むじ久さんのあつかう女はねえ、みんな、どこか、普通の女とちがっているの……ま、片手片足がないとかね、めくら、啞なんぞ、なかなか乙なもんさ。さうでございませよ」

「ふむ、ふむ。そりゃあおもしろい」

猟奇趣味も濃厚な辰之助であるから、もともと乗りかかり、またも父や兄の眼をなすめ、次男の彼に甘い母親に小づかいをせびり、いままでに数度、首ふり坂へやって来ている。小屋の源太郎へ茶をはこんで出て来た久兵衛に、

「どうしている？」

「じいっとしていらっしやいます。えらく人品のいい、おとなしいお方でございませう」  
「それだから、おのが女房になめられてしまうのさ」

「へえ？」

「ま、こういうわけだ」

と、辰之助が源太郎夫婦のいきさつをへらべらとしめへるのを、久兵衛は、かすかに嫌世の表情をうかべて聞いたようである。

「では、たのむよ」

いいおいて辰之助は、首ふり坂を上って行く。自分は天王寺門前の「いろは茶屋」という



あつた。

辰之助は、この茶店へ源太郎をつれこんだものだ。

折しも客はいず、主の久兵衛が釜前の腰かけでのんびり煙草を吸っていた。まるで子供のような矮軀の久兵衛のしわだらけの顔が、どこやら貉に似ているというので、このあたりでは「首ふり坂のむじ久」で通っている。

「おや、これはこれは」

と、むじ久爺さんが辰之助を迎え入れた。

「じいさん。この男だよ、一昨日はなしておいたのは……」

「へい、へい」

「たのむよ」

にたりと微妙な笑いをもらした辰之助が、とんと源太郎の肩を突きやるのへ、

「さ、こうおいで下さいまし」

久兵衛が源太郎を、庭の奥の小屋へ案内した。

この久兵衛は、そのころ「あほうがらす」とよばれた一種の私娼紹介業もしている男である。私娼といつても、こうした手合いのあつかう女たちはそれぞれの事情によつて、その場のしのぎの金を得るための素人女が多く、その新鮮な肌の香を好む客が後を絶たぬいうまでもなく、お上の取りしまりもきびしいから、あくまでも秘密をまもれる客でないと相手にしない。

しょんぼりと帰ってしまったかな……」

そんなことをおもいながら、にやりにやりと、妓おんなを相手に酒をのみはしめていた。

### 三

この日から間もなく、三浦源太郎は養父母や満寿子ますこに、

「おもいたって、いささか剣術の修業にはげむことにしました」と、いい出した。

もちろん、この申し出に反対する理由はない。

「やはり源太郎は見どころがある」

養父はよろこんだし、満寿子は、ほこらしげに胸をそらせ、にんまりとうなずいた。かくて源太郎が入門した先は、金子辰之助の師匠・井狩又蔵の道場であつた。

井狩先生は、もう六十に近く、病体であるし、道場も往年のような繁昌を見せてはいない。高弟三人が門人たちへ稽古けいこをつけている始末で、このところ辰之助も、

「ばかばかしくて行けたものではないよ」

道場へろくに顔を見せないようであつた。

それにしても、

「井狩道場へ入門させてくれ」

と、源太郎がたのんできたときには、さすがの辰之助もあきれ顔で、

岡場所で昼あそびをするつもりなのである。

それから間もなく、久兵衛の茶店へ入って来た女がある。これが源太郎の相手によばれた女だ。

大女である。

背丈は六尺に近い。肩幅も胸幅も腰まわりも大きくひろく、ふとやかに、それでいてぬけるような肌の白さであった。

笑うと右の頬に可愛らしい笑くぼが生れ、やさしく目しりの下った、どう見てもにくめない顔をしていて、

「おじいさん。今日はどうも……」

あいさつをする声も、素直に、しつとりとしている。

この女、名をおやすといい、年齢は源太郎の新妻と同じ二十歳。

「さ、行つといで」

何気なく、表の通りに眼をくばりつつ、久兵衛がおやすにいった。

「あい……」

おやすは心得て、奥庭から小屋へ入って行く。

そのころ、辰之助は「いろは茶屋」の升屋という店へ上り、

（ふん。いまごろ、源太郎はどんな女を相手にしているかな。目っかちか啞か、どちらにしろ、びっくりしたろうよ。気の弱いあいつのことだから……う、ふふ……手も足も出ずに、

「そうって、源太。お前、どうかしたのではないのか、え？」

「うふ、ふふ……」

「や……妙な笑いかたをするなよ、おい。では何か、その餅白女が気に入って、これから通いつめようというのか」

「そう」

「まさか……？」

「そうだ。その通りなのだ」

「ふうむ……」

辰之助は、しばらく源太郎を凝視していたけれども、そのことの秘密を他へもらさぬことを約束してくれ、井狩道場へ紹介することも承知してくれた

そうになると、急に辰之助ははしやぎ出し、

「よし、そうか、そうか、よし。おれにまかせておけ」

たのもしく、受け合ってくれた。

さすがに幼な友だちであると、源太郎はおもった。

それから五日に一度ほど、源太郎の首ふり坂通いが始まった。

おやすは、砂村の百姓・権六のむすめで、十になる妹のおこうが一人いる。中に三人もきょうだいがいいたそうだが、いずれも病死してしまい、母親も二年前に世を去ったというのである。

「本気なのか？」

「むろんだ」

「こりゃ、おどろいた。源太が剣術を、なあ……」

「そこでだ」

「何が？」

「道場へも通うが、通うといって屋敷を出て、それから別のところへ行くこともある。このことを、おぬしだけはのみこんでいてもらいたいのだ」

「ふむ……別の、ところへな？」

「ああ、そう」

「女か？」

源太郎が、うれしげに、うなずいた。

「どこの女だ？」

「先日の、ほれ……」

「え……ではあの、首ふり坂の？」

「そう」

「だが源太。あのときの女は、なんでも餅<sup>もち</sup>白<sup>しろ</sup>を三つほどつみ重ねたような大女だったというではないか」

「そう」

大きいといつても、長身の源太郎が抱いてみると、骨格がすぐれているだけに肉つきも、あまりたるんではいず、たつぷりとふくらんだ乳房の見事さが、この時代の女にはないものであった。

あの、はじめての日。

おやすが先へ出て帰ったあとから、源太郎が茶店へ出て来るや、

「お氣に入つたようでございますねえ」

「うん」

素直にうなずいた源太郎の態度が、むじ久の氣に入つたらしい。

茶をいれてくれながら、この老人は独言のようにいった

「こうした遊びはねえ、旦那。はじめて会つた客と女とが、たがいにその、よりどころを失くしている胸の中がびつたり合つて、何といえますかねえ……つまりその、おたがいが無邪氣なところになりきつた、その瞬間というものが、だいたい味というもので……めつたにはねえことだが、今日はいいい日だ。旦那のお相手におやすをえらんでおいて、ようございましたよ」

#### 四

夏がやつて来た。

三浦源太郎の剣術修業は、たゆむことなくつづいた

父親が病気がちになったのも、そのころからであった。

二年後のいま、父親・権六の病状はかなり悪い。

権六は、いわゆる砂村の西瓜百姓というので、四十年も百姓をしていながら、少しも貧乏がよくなならない。その上、寝込んでしまったのだから、必然、暮し向きのいつさいと病父の医薬代とを、おやすが稼ぎ出さねばならなくなった。

妹のおこうも、病気がちなのである。

「うちじゃ、みんな体が弱いんです。なのに、あたしたけが、こんなに丈夫で、みつともない大きな図体に生れついてしまつて……」

顔にも体にも真赤に血をのほらせつつ、

「でも、お祖母ちゃんが、とても大きな体をしてました。あたしが六つ七つのころまで生きてましたけど……」

と、久兵衛の茶店の小屋で、はじめて源太郎を客にした日に、おやすは自分の身の上を語っている。

ということとは、おやすがそれだけのことを語る気持になったほどに、男のやさしさ、いたわりが「客」としての愛撫の中にこもっていたものと見える。

源太郎も、おやすのすべてが気に入ってしまった。

おのが巨大な肉体を恥じる仕ぐさが初々しく、まっ白なおやすの肌を、そのはじらいの血がそめてゆくのは美しかった。

情緒も何もあつたものではない。

それでも懸命に奉仕している源太郎をつねったり、腕をねじまげたり、色気もない笑い声をけたけたとたてたり、いやもうさんざんであつた。

秋が来た。

その日も朝から、源太郎は屋敷を出た。

霧のように、雨がけむっている。

出がけに、満寿子が、

「毎日、よう御出精ごしゅつせいになりますこと」

冷やかに声をかけたのが、屋敷を出てからも気にかかった

気にかかるといえば、この三日ほど、満寿子は夜になつても離れへやつて来ない。旦那のどこの部屋で眠るらしい。それはもつけのさいわいというものだが、やはり気になるのは当然であつたろう。

（まさか……おやすとのことに気づいたわけでもあるまいが……）

妻が気づく筈はずはないのだ。

今日は「大黒」へ行く日であるが、いちおうは井狩道場へ寄つた。

金子辰之助は、この日も顔を見せていなかった。

少し、稽古をやる。

ぼんぼんと、相手に撃ちたたかれるだけのことだ。



この間に、首ふり坂の久兵衛が茶店をたたみ、故郷「駿河・石田」へ帰ってしまった。だが、源太郎とおやすは別に困らない。

源太郎が深川・扇橋の船宿「大黒」へ出かけて行き、ここへおやすを呼び出すのである。このほうが、おやすが住む砂村からも近いのだ。

おやすの父親の病気は重くなるばかりのようであつた。

久兵衛の茶店で会つていたときのように源太郎は一分の金を「大黒」で会つたおやすへわたしてやつた。そのころの一分という金、現代に直して一万円ほどでもあるのか。源太郎は聲入りをする際に、実家の母から、

「何かのときにおつかいなさい」

と、金二十両をもらつてきている。まだ当分は大丈夫であつた。

五日か六日に一度の逢瀬が、源太郎にとってはたまらなく待ち遠しかった。

暑くなつてきてから、いよいよ満寿子に嫌気がさしてきた。

相変らず、閨房における満寿子はいやらしかった。むしろ暑い夏の夜の闇がおもくたれこめている中で、満寿子はびつしりと汗にぬれる。すると、彼女のこりこりと肉づいた肌身が妙にあぶらしくさい匂いを発散しはじめなのだ。

女の、というより男の体臭に近い。

奥の土蔵をへだてた離れが若夫婦の居間と寝間に当てられてい、それだけに満寿子は若い女のつつしみも忘れて荒れ狂うのである。

こつちが手招きをすると、向うも手招きをする。仕方がないので源太郎は下りて行つた。袴はぬいだままで、船宿の高下駄と傘を借り、河岸道へ出て行くと、おやすが走り寄つて来た。

「どうしたのだ？」

「あの……お父つあんが、昨夜……」

「え……亡くなつたのか？」

「あい」

「そうか……」

おやすは哀しげにうなだれている。

このとき、河岸道の西、扇橋をわたつて来た荷車が米俵をつんで通りかかった。

若い者が曳き、中年のほうが後押しをして来たのだが、曳き手が何かにつまずいてよろけたとたん、米俵へかけわたしてあつた縄が切れて、

「わあつ、いけねえ」

叫ぶ間もなく、上へつんだ三俵ほどが、ころころと道へころげ落ちた。

これが、源太郎とおやすの立っているすぐ眼の前であつた。

と……

はなしをやめたおやすが、何気なく近寄つたかと思ふうちに、あの重い米俵を、何と片手づかみにつかんで、ひよいひよいと、まるで竿を投げるように軽々と、荷車の上へはうり投

「では、お先に」

半刻ほど、熱のない稽古をやつて、源太郎は道場を出て、深川へ向う

五日前に「大黒」へ来たときには、砂村のおやすの使いだとかで同村の老婆が来て、今日は父親の看病で手がはなせぬゆえ、五日後に……ということであつた

だから十日も逢つていないだけに、大黒へついたときの源太郎は、おやすなつかしさに何も彼も忘れてしまつていた。

わくわくと気もはずんで、

「酒をもらおうか」

落ち鱸を塩焼きにしてもらい、二階の小座敷で、盃をなめながら、

（おやすが来たら、おそい昼飯を一緒に食べよう）

窓をあけ、ふりけむる雨をながめている源太郎である。

おやすは、いつも大黒の前の河岸道を東の方からやつて来る。源太郎は眼を凝らした。

（あ、来た、来た）

裾を端折り、素足にわらじばき、蓑に笠といういでたちながら、まさに、おやすである。

源太郎が窓から乗り出して手をふると、おやすが本多侯・下屋敷の角で立ちどまり、くびを振つて手招きをして見せた。

こつちへ来て下さい、と、いうのらしい。

（いったい、どうしたというのだ……?）

わめきさま、飛び出して来た女がある。

「あっ……」

と、今度は源太郎も、おやすの肩から手をはなし、悲鳴に近い声をあげた。女は、満寿子であった。

これにつきそうは、よねと三津の二女中。いずれも三浦家へ長く奉公する男まさりの女中で、さらに若党・花田文治が若主人の源太郎をにらみつけている。

「ま、ます子……」

「おのれ、姦婦め」

満寿子は、三津の手から稽古用の櫓の薙刀を受け取り、

「曳!!」

猛然と、おやすへ打ちかかった。

（いかぬ……）

源太郎は両眼をとじ、へたへたと道へすわりこんでしまった。

「ああっ……」

女の悲鳴があがった。

おやすの悲鳴ではない。満寿子の声であった。

満寿子の櫓の薙刀を避けもせず、この打ちこみを平然とわが体に受けとめたおやすは、その打撃の痛みにはかまわず、くいと薙刀をつかんで引いた。

げたものである。

「あ……」

うめいて、車曳きも後押しも、ぽかんと口をあけたきり、茫然<sup>ぼうぜん</sup>として、おやすをながめている。源太郎だとして同様であった。

おやすは事もなげに、源太郎の前へもどつて来て、

「そいであの、今日は、すぐに帰って、お父つあんの葬式<sup>おしやうし</sup>出す仕度をしなければなりません」すまなさそうに、いうのだ。

「あ……あ、あ……」

眼を白黒させて、しばらくは声も出なかった源太郎だが、

「む……よし。おれも一緒に行つてやろう。ま、いい。とにかく入れ。仕度するから、下へ入つて待つていてくれ」

「それじゃあ、すみません」

「いい。いいといったらいい」

荷車が、あきれながら遠去かつて行く。

遠慮するおやすの肩を抱くようにして、源太郎が「大黒」の前へもどつて来たときであった。

扇橋のたもとを南へまがる河岸道の角に下りた町駕籠<sup>まちかこ</sup>から、

「おのれ。見つけた」

(これでよいのかも知れない……)

源太郎は、むしろさばさばとした気もちになっていたようだ

ただ心配なのは、二長町の実家へ、どのようなめいわくがかかるか、である

しかし、こうなってしまった以上は、もう仕方がない。

しきりに、わけをきくおやすに、

「心配するな。あれでよかったのだ」

源太郎は、しずかにいった。

我ながらおどろくほどに気が落ちついてしまっている

彼は、懷紙を出し、おやすの家のちびた筆をとって、実家の兄・主馬しゅまにあてて、これまでの事実をあますことなくしたためた。

妻としての満寿子、女としての満寿子についても、ことばを飾らずにしろした。

この手紙を村の者にたのんで二日後に実家にとどけさせる手筈てはざをつけると、おやすの父親の遺体を亀高村かめたかの真光寺へほうむり、

「あとのことはお願いする。なにぶん追手がかかる身ゆえ」

と、近辺の人びとにすべてをたのみ、源太郎は、おやすと妹のおこうを急いそぎたて、小舟をやとつて砂村をはなれた。

ふところには、折よく七両余の金があった。この実母がくれた小づかいは肌身はだみをはなさない。かつたのがよかった。

すると、あの満寿子がたたらをふんでよろめき、鎌刀をつかんだ手をはなしてしまったのである。

おやすは一言も発せず、よろめいた満寿子を両腕につかんで頭上へさしあげ、  
「な、何をする!!」

「おのれ、くせもの!!」

若党や女中が狼狽の叫びをあげたときには、すでにおそかった。

おやすに投げつけられた満寿子の体は宙を飛び、水しぶきをあげて小名木川へ落ちこんでいたのである。

おやすは、これらの人たちが、源太郎の妻や屋敷の者であることなど、毛頭知らぬ。ただもう愛しい男と自分の危急を感じ、とっさにはたらいたまでのことで、

「さ、早う、早う」

へたりこんでいる源太郎を抱えおこし、背中へつかまらせると一気に背負いあげ、泥しぶきをはね散らしながら、砂村の方角へ走り出した。

## 五

この日以後……。

三浦源太郎は、ついに屋敷へもどらなかつた。養家へも実家へもである。

砂村のおやすの家へ、背負われて到着したとき、

すると母の正代が、

「でございますから、わたくしは、あの縁談に、はじめから氣のいいたしませなんだ」と、いまになつていい出し、

「源太郎はどこに……そつと居どころだけでも知らせてくれればよいに……」  
なげき悲しんだという。

○

それから七年の歳月がながれた。

すなわち、天明五年の正月。

かつて、むじなの久兵衛老人きゆうべえが茶店をいとなんでいた地所を借り、ここへまた新しい茶店を出した夫婦がいる。

これがなんと、三浦源太郎とおやすなのだ

源太郎は、すっかり町人姿が板についていたし、おやすは相変らずの大女ながら、三十四、五に老けて見える。

茶店の名は「久兵衛」とある。

木の香も新しい、しゃれたつくりで、茶菓のほかは甘酒も出すし、小豆餅あずきもちも出す

正月早々、店びらきをする、寺まいの客がたくさん来て、幸先さいぜんがよかった

正月二十日の昼すぎ、菩提所ぼだいじよの宗林寺へ参った永島主馬が供を二人つれ、首ふり坂へ差し



おやすも、源太郎からもらった金を二両ほど残していた

こうして、彼らが江戸の地をはなれた後、この事件はあまり大ことにならなかった。

三浦源太郎失踪の事は、れっきとした幕臣の養子だけに、逃れぬ罪である。

けれども、三浦家の息女にして源太郎の妻である満寿子が女だてらに路上で薙刀を振りまわし、そのあげくが、百姓女の手にかかって川の中へ投げこまれたのでは、はなしにも何もなつたものではない。

このことが公になれば、三浦家とても只ではすまない。

で、三浦忠右衛門は懸命に奔走し、養子・源太郎を離別のかたちをとつた。

すべてを内済のため、役向きへつかった賄賂だけでも相当なものであつたろう。

これは、源太郎の実家・永島家とも談合の上でのことであつた。

源太郎の父も兄も、おどろきはしたが、間もなく、源太郎自筆の手紙がとくにおよんで、兄の主馬は、

「源め。可哀相なことをいたしましたな」

と、いった。

父の左内も手紙を読み、

「あの満寿子どのがのう……まことであらうか？」

「女という生きものは、はかり知れぬものにございますな」

「ふうむ……」

「おそれいます。とてもとても顔を見せられたものではございませぬ。なれど、七年前のあの事件がさほど大事になりませなんだと聞き、ほっといたしました。」

「だれに聞いた？」

「お屋敷からそつと、若党の今村豊之助とよのすけを呼び出しまして……」

「少しも知らなんだわ。今村は毛ぶりにも見せぬ」

「かたく口どめをいたしておきましたゆえ……その折、今村に聞きましたが……あの折、三浦の満寿子どのへ、私たちのことをそつと告げましたのは、金子辰之助すけだったそうで……」  
「うむ。そりゃな、双方の小者同士の口から、おのずともれたことよ。後になつてのことだが……」

「ははあ、なるほど」

「辰之助は、おぬしの後釜あとかまへ首尾よう入つて、満寿子どのとの間に三人も子が生れたわ」

「それは、めでたいことで……」

「なれど、いまは辰之助が家督し、引きつづいて御役にも出ているが、どうも評判がよろしくないのだ」

「ははあ……」

「何かこの暗く、陰険な人柄ひとがらに変わつてしまひ、それ、あの大きな肉づきのよい体が、このころではげっそりとやつれ、顔つきもとげとげしゅうなつて、ろくに口もきかぬさうなと、兄が、につこりと笑ひ、

かかり、折しも店先へ出ていた亭主を見て、

「あ……源太郎ではないか」

おどろきの声を發した。

「おお、兄上……」

客のいる店先を避け、竜谷寺の堀沿いに庭から奥の間へ入って、兄弟のはなしはつきぬ。  
「あれより、駿河の知合いのもとへ逃げました。兄上、その知合いの久兵衛どのと申す老人が、以前にここで、やはり茶店をしておられたのでございますよ」

と、源太郎は三十男の落ちつきぶりで、

「駿河から上方へまいりました。久兵衛どのも一緒にでございます。そこで、久兵衛どのが、私の女房……あれなるおやすに力業をいたさせましてな、立花金太夫座の見世物へ入りまして……」

おやすは、肌着一枚のわが体へ大八車に米五俵を乗せ、その上で曲芸師に演技させたり、腹の上へ臼を乗せて餅をつかせたり、という力技を見せ、大評判をとった

「ま、それで私も、すっかり見世物一座の人となり、諸国をまわりましたが、去年の夏、恩人の久兵衛どのが亡くなりましたので……この機に、一度、江戸へ帰ってみたい、こう考えまして、去年十一月にもどってまいりました。さいわいに、むかしなじみのこの地所を借りうけることができましたので……」

「ばかもの。なぜ我が家へ顔を見せぬ」

「いや大きい いや立派なものだ。おれがところも二人ふえたよ」

「さようで……あ、これおやす。ちよいと、ここへ来て、こあいさつを……」

（『小説新潮』昭和四十四年一月号）

「よかつたのう、源太。満寿子どのと手が切れて」

「あ……はい、はい」

「あれがおぬしの女房じやうぼうどのか、おう、客を相手によう立ちはたらいでおるではないか……それにして、なるほど大きい」

「いま、ごあいさつをいたさせます。また兄上と知らぬようでございます」

「ま、ゆるりとでよい。それよりも、屋敷へつれてまいれ」

「女房をで？」

「よいとも。父上も母上も、大よろこびじゃ」

「はつ。ふたたび両親に生きてお目にかかれますこと、かたじけのう存じます」

「うむ。よい茶じゃ」

「おそれ入ります」

「それにしても今日は、ようも晴れた。あたたかい日ひ和なごしやな」

「兄上」

「む？」

「ほれ、あの、寺の塀のそばで近所の子とあそんでおりますのが、私どもの子で五つになります」

「ほ、あれか……なるほど大きい」

「さいわいに男の子でございますな」

夢

中

男



色白の、ふくくりした肌、きの小十郎も、あまりにも対照が異なるものだから、

「お顔」小十郎のこい、と牛頭は、直あたりかしないかね。

などと、お松の明華の娼婦たちかいい合つては、二人の姿を見るときは、ふけりやうな  
じつさい、抱いてみかけて、

骨でも折れはしないか……う。

と、小十郎がおもつたのは、お松のからだは、昔の言いた、孔房のふくみも、首筋、  
太股の肉おきも殺けていた

はじめでのと入はいかもの、白いの小十郎も、

(こいつは、どうも……?)

顔をしかめたものだから、いさなう見ると、

(なるほど、これは……)

小十郎、瞠目したものである。

瘦けてはいても、あきくろい肌かねけりつくように、きめこまやかだったと、多岐日在小  
十郎をあやなすきわしいうものは、このころ、かなり崩ひなれき、いる小十郎も目が  
眩お華のものであって、その次からは彼、崩ひ金さうつかめはこの根津権現・門前の両場  
へ通いつめるようになった

「お松、お前と入たら……いや、ようも、切りかない女だね」

あきれて小十郎がいうと、



## 一

その女、異名を「便牽牛」のお松という

「便牽牛」というのは、なんでも野菜の牛蒡のことだそうで、そのいわれは、林小十郎にもわからぬ。いつであつたか、書道にも学問にも造詣がふかい、などと自負している父の十右衛門に、

「便牽牛とは、何のことです？」

小十郎が問うや、

「ばかもの！」

たちまちに、父は一喝して、

「つまらぬことをきくひまがあれば、算盤のけい占でもせぬか」

いつものように、やられてしまった。

父も、便牽牛のいわれを知らぬらしい。

お松になじみの客のうちの、どこかのさむらいか僧侶が、たわむれにつけた異名らしいが、（なるほど、まさに、ごほうだ）

うわさをきいて、おもしろ半分にお松を買ってみて林小十郎は感心したものだ。お松は細くて、くろい。

父も自分も長い間の浪人の身なのだし、ことに父・十右衛門は、本郷・春木町で、近くの旗本屋敷や商家の子弟に書を教える一方、金貸しもしていて、その理財へのたくましさは、小十郎が、

（父親ながら、見ていてもいやになる）

ほどであった。そのくせ、小十郎が脇差一つを帯びたのみで外出しようとするれば、

「さむらいの子が、大小を帯びずして何とする!!」

と、叱りつけてくる。

こういう父親から、遊び金をくすねるのが容易でないことはいうをまたぬ

借金の取立に出て行き、あつめた金のうちから内密で少しづつ、小十郎はわがふところへ入れてしまい、うまく帳尻を合せて父に見せるのだが、そこは只一人の我子へは甘い十右衛門なのか、これまではなんとかあさむきつづけてきている。

だが、

（もうこれ以上、どうにもならぬ）

小十郎は、それをおもうと居ても立ってもいられなくなるのだ。

この春から、お松のもとへ通いつづけ、むりな算段をかさねてきたため、集金のうちからくすねた金高も三十両をこえてしまっている。

年に何度かは、父がみずから証文をしらべ、借主をおとずれるのだが、このところいそかしくて、

「自分でも、こわくなるときがあるんですよ」

お松は、ひくい鼻をうごめかせ、これだけは少女のようなあどけないかたちをしているくちびるを、ちよつと舌でなぶり、

「いやになってしまふ……」

上眼づかいに小十郎を見て、

「けれど小十さん。それも男によりけりでござんす」

などとやられると、

（よし、明日もまた……）

口やかましい父の眼をかすめ、

（なんとかして遊び金を……）

猛然たる気もちになつてくるのであつた。

その日……宝暦六年七月はじめの或る日、暑いさかりの昼すぎからお松を抱きづめで、二十三歳の若さをもてあましている小十郎が、さすがげんりとなつて夕暮れの道を歩みつ、（それにしても、だ……）

今度は、別の意味で層倍にげんりとなつて、

（ああ、もう……これで、おやじの面を見ないですむなら、どんなによいか……）

腰に帯びた大小の刀が、急に重くなつてきた。

この刀にしても、そうだ。

(やつて、殺れぬことはない)

榊原屋敷の木立が、沈みかける夕陽ゆうひをさえぎり、坂道の夕闇ゆうやみはことさらに濃かった

(やつて、殺れぬ、ことは、ない)

かつて、おもってもみなかったことだが、林小十郎は、このおもいにとらわれてしまい、やがてまた歩み出したときの彼は、いつもは人なつかしげな細い両眼がすわり、顔色も紙のようになつてきている。

夕風になぶられ、汗もひいていたが、くつろげた夏着の胸のあたりから、お松の体臭とも化粧の香ともつかぬにおいが鼻先へただよつてき、先刻まではにやにやと、その女のうつり香を嗅いでいた小十郎であつたけれど、いまこのとき、その香りに気づいたとき、

(おもいきつて、やるか……)

勃然ぼつぜんとして、彼は、おのれの殺意に胴ぶるいをした。

## 二

林小十郎が、加賀屋敷の裏手をぬけ、麟祥院りんしょういんの横道から切通し坂の上へ出ると、

「あれまあ、若旦那わかつだんなさま……」

坂道の向う側から、夕闇をすかし見るようにしながら声をかけてきたのは、我家の下女・おさきであつた。

「ど、どこへ行っていないさいましたよう」

「そのうちに、わしも出向かねばなるまい」

いい暮している十右衛門が、いつ「借主まわり」をはじめると、小十郎は気が気でないこれまで使いこんだ金は、博打で得たものや、遊び仲間とささやかな悪事をたくらんだりして入ったものでうめ合せてきたのだが、このところ、そのほうもさっぱり芽が出ないのだ。使いこみが知れたなら、

「出て行け！」

あの父親のことだから、一も二もあるまい。

そうなったら小十郎、二十三歳のこれまで、親がかりの身だけに、一人きりで暮しをたててゆく自信など、まったくないのである。

（ええ、いっそ、もう……）

上野・不忍池の西岸を歩みながら、林小十郎は、

（いっそ、おやじを殺してしまつたら、どうだろう……う）

そのことを不図おもつた。おもつてみて、

（寝ているところを、いきなりくびをしめて……おどろくだろうな、おやじは……）

冗談まじりのおもいであつたから、くすくすと笑い出したほどだが、そのうちに、小十郎の顔つきから笑いが消えた。

茅町二丁目のはずれから、榊原式部少輔の中屋敷の塀にそつて坂をのぼっていた小十郎の足が、急にとまった。

られねばならぬ 氣に入られるには、まず……」  
まず待遇をよくして、長く住みこんでもらおうという……こうした場合には十右衛門、金を惜しまぬ。

それから十年。

おさきは、小十郎のめんどうを見ながら、こまねずみのことく立ちまわるとき、ほしんといふ人であつたのを切りまわして、口うるさい十右衛門から只の一度も文句をいわれたことか、赤ら顔の、でつぷりと肥つたおさきは寒中といえども鼻のあたりに汗を浮かせているほどだ。いま、おさきは四十八歳、六十に近い十右衛門との間に、この十年、一度もあやしおへきところがなかった……と、すくなくとも小十郎は信じている

（おやじは、女より金さ）  
であつた。

そのおさきが、夕闇の町角に立つて、自分の帰りを待ちうけていたらしい。かつてないことではある。

（そうだが、おやじを殺すには、先ず、このおさきという忠義ものをとうにかせぬと……）  
すつかり父親殺しのおもいに魅入られたかのような林小十郎であつたが、

「どうしたのだ？」

「わ、若旦那さま 旦那さまが大へんなのでこさいますよ」

「殺されたか？」

駈けよつて来たおさきの顔が、まづ、肯である

おさきは、もう十年も林家に奉公している下女で、生まれは下総・佐原の在だそうだが、年少のころから江戸へ出て、芝・田町九丁目の紙問屋「万屋甚兵衛」方へ下女奉公をし、十二歳のとき、同じ田町二丁目に住む足袋職人で音吉という者の女房になった。

ところが、子も生まれぬままに十年を経て、音吉は病死してしまい、ふたたびおさきは「万屋」へもどつてはたらくうち、主人の甚兵衛と親交のあつた林十右衛門が、「妻に死なれて六年。どうにも女手がのうては……」

というのをきき、

「では、うちにいるおさきを……」

万屋甚兵衛がすすめるままに、おさきに來てもらうと、

「うむ。これはよい」

林十右衛門は、おさきのはたらきぶりを見て、大いに気に入る、年に三両という、下女奉公にしては破格の給料を出すことにした。

そのときは、まだ少年だった小十郎も、

（あのけちな父上が、ようも出したものだ）

びっくりしたものであった。

ところが、林十右衛門は、

「あれほどの女ゆえ、いつまでもいてももらいたい。そのためには、こちらもおさきの氣に入

あらわれた父の聲が、弱々しいのを、小十郎は意外におもった。

「おそいではないか」

「は……ちよつと、その……」

「小十郎よ」

「は……？」

「実にまったく……どうも、その、けしからぬことになった」

「どういたしました？」

「小村郡兵衛<sup>ぐんべえ</sup>め、わしから金を借りたおぼえがないと申すのじゃ」

それで、わかった。

小村郡兵衛は、この近所に住む幕府の徒目付<sup>かきめつけ</sup>で、役高は百俵五人扶持<sup>ひゃくわうごにんすけ</sup>の士である。

ちなみにいうと、幕府は徒士<sup>かき</sup>といつて、いわは將軍の警備にあたる兵士があり、これか十八人ずつ一組となつて二十組の編成になつてゐる。

その組屋敷の一つが、春木町の近くにあるのだ。

小村郡兵衛のつとめてゐる徒目付という役目は、この徒士組とも関係があり、將軍の外出時には先行して目的の土地なり場所なりをさくり、

「異状なきや？」

をたしかめもするし、平常はそこそこへ出入りし、場合によつては幕府から密命をうけ、遠国<sup>たんこく</sup>へもひそかに出張して「探偵」の役目をつとめる。先ず、幕府の「下士官」としては、



おもわずきいた。

というのも、小旗本相手の貸金を取り立てるとき、十右衛門はいさごかの容赦もせず、責めたてるものだから、腹にすえかねたのか、

「こいつ、無礼な……」

前後を忘れて借主が、刀をぬきかけたことも、何度かある。

それで、今日もまた借主とあらそい、ついに、

（殺されたか……？）

と、おもわずよろこび？の声をあげてしまったのであるが、

「なにをおっしゃいます。そんなばかなことがございますものか」

言下に、おさきは否定し、坂道をわたりきった小十郎の袖をつかみ、

「さ、早く、早く」

と、せきたてる。

町角から南へまがり、左がわの細道を入った突当りが林家であつた。

もとは医師・増田長延の家だったので、四間の小さな家ながら凝ったつくりだし、庭も三十坪ほどある。

「ただいま、帰りました」

父の怒声を頭上へあびせられる覚悟で、くびをすくめながら玄関を入った小十郎へ、

「ど、どこへ行っていたのじゃ」

ここにいたって十右衛門もたまりかね、ついに町奉行所へうったえ出たものである。このことは、小十郎も知っている。

町奉行所は、このことを幕府に通じたところ、若年寄わくねうきの小堀こぼり和泉守いずみうけから、

「小村郡兵衛を、評定所において取り調べよ」

との命が下った。

評定所は江戸城・和田倉門外にあり、幕府の最高裁判所ともいうべきものであった。

郡兵衛の役目柄やくめがら、幕府も慎重を期したもののらしい。

そして……。

小村郡兵衛と林十右衛門の取り調べがおこなわれたのが、今日なのである。

「なに、わしには何ひとつ、やましいところはないわい」

と、父が今朝、勝ちほこったように身仕度をととのえて家を出て行ったあとで、小十郎は外出し、根津権現ねづぐんげん・門前の娼家しょうかへ出かけて行ったわけだ。

それを、すっかり忘れていたというのは、小十郎から見ても、この訴訟が、

「父の勝ちだ」

とおもいこんでいたからであろう。

「ところが、郡兵衛め、わしから金を借りたおぼえが毛頭ない、と、いい張るのしや」

林十右衛門は五体をふるわせ、さもさもなくやしげに拳こぶしをもって空間を叩たたきつけるような仕ぐさをしめし、

はたらき甲斐のある任務で、こころきいたものでなく、てはつとめきれない。その徒目付の小村郡兵衛が、金三十両を林十右衛門から借りうけたのは、昨年の暮れてあった。

それから約二年。

郡兵衛は、当初のうちは一両、二両と返していたけれども、そのうちに利息をはらうたけで精いつぱいとなった。

さい、そくがきびしいので、郡兵衛は、利息と元金をいっしょにして、  
「今度こそは、かならず」

と、新たな証文をつくり直して十右衛門へさし出したのは、今年の春であつた。  
十右衛門が小十郎へもらしたところによると、

「郡兵衛め、年甲斐もなく吉原の遊女にうつつをぬかし、その遊び金につまつて、わしから金を借りたらしい」

そのときは小十郎も、冷やりとして腋の下に汗をかいたものだが、返済期限もすぎて尚、小村郡兵衛は利息をふくめて二十両の金を返さうともせず、自宅へ押しかけては返済をせまる林十右衛門老人を、

「あまりうるさく申すと、痛い目を見るぞ」

と、おびやかし、四十をこえた年齢ながらふとくたくましい腕で十右衛門の瘦身を突き飛ばしたりする。

前にて捺したものでござります」

血相を変え、まるでわめきたてるようにいいつのる林十右衛門を見て、二人の目付はいやな顔つきになった。

息子の小十郎は母親似のやさしげな顔だちをしているけれども、父の十右衛門は、まじまじ頬骨の張った眼つきのするどい、白髪の老人に似つかわしくない顔貌で、これが昂奮してくるし、だれが見てもよい感じはもてない。

「こやつ、浪々の身とはいいいながら、武士の身で金貸し渡世などいたしておつて……」

というおもしろい、脇坂・菅沼の両目付の表情に露骨に浮いて出た。

「ま、まことにこれは言語道断。な、なによりも、その証文に捺されたる印形が証拠にござります」

「さわがしい。ひかえておれ」

と、脇坂主計が、郡兵衛へ、

「その印形について、申しひらきあるやいかに？」

すると小村郡兵衛が、凝と証文に見入りつつ、

「まさに、私めの印形にござります」

「なんと申す」

「なれど、この印形を捺したおほえは毛頭ござりませぬ」

「なんじゃと？」

「まさに借りたる金を借りぬとは……武士にあるまじきふるまい……」  
おさきがはこんで来た夕餉ゆうじゆうを見向きもせぬ。

## 三

一日おいて、ふたたび林十右衛門が評定所へよび出された  
この日……。

原告の十右衛門と、被告・小村郡兵衛との相對吟味あいたいぎんみがおこなわれたのである。  
双方の顔をつき合せて見て、取り調べようというのである。取り調べにあたったのは、目  
付役・脇坂主計わきさかかずえ、菅沼新三郎すがぬましんざぶろうで、脇坂は二千石、菅沼は千三百石の大身旗本だ。

十右衛門から受け取った証文を見た目付が、郡兵衛に、

「これに見おぼえがあるか、どうじゃ？」

「は……」

証文を見て郡兵衛は、強くかぶりをふり、平然とした面もちで、

「いささかも見おぼえはござりませぬ」

と、いう。たまりかねて、十右衛門が、

「おそれながら……」

「なんじゃ？」

「その証文に捺おしてあります印形いんぎようは、その……その小村郡兵衛殿がみずから、この私の目の

郡兵衛は、どこまでも謙虚に、それでいてものしずかな声に自信をみなぎらせ、

「まことに私、不審にたえませぬ。いずこかへ取り落し、紛失いたしました私の印形か、かくのごとき借用証文に捺されておりますとは……いかにふしぎなることに……まことにもつて、相わかりませぬ」

それをきいて両目付がじろりと十右衛門を見すえ、おどろきのあまり絶句している十右衛門にはかまわず、

「これ、郡兵衛」

「はっ」

「そのほう、印形を取り落したる折に、そのむねをとどけおいたであろうな」

「はい、それと気づきまして、お上へとどけ出しましたのは、……さよう、二月二十七日でござりました」

これをきいて、ようやくに林十右衛門も、

（さては……）

おほろげながら小村郡兵衛のたくらみに気づいた。

つまり……。

郡兵衛は、二月二十七日に林家をおとずれ、さも殊勝げに、証文の書きあらためをたのみ、ことばたくみに、日づけを数日後の三月一日に書きしるさせ、その上で捺印をした

そして林家を出たその足で、おそらく小村郡兵衛は「印形紛失」のことをお上へとどけ出

「この証文の日づけは、今年の三月一日に相なっておりますが……」

「いかにも……」

「なれど、私めの、この印形は、今年の二月中ごろに紛失いたしましたまゝ、いまもつて見つかりませぬので……」

これをきいて、林十右衛門がはつとした。

元金と利息をいっしょにして、

「証文を書きあらためていただきたい」

こういつて小村郡兵衛が、平常に似合わぬいんきんさで林家をおとすれたのは、二月二十七日のことであつた。

さらにそのとき、

「区切りもあるし、今日は日もよくないので、ついでのことに来月一日づけにしていただけたら……」

と郡兵衛が、見るから殊勝げに、あくまでもおとなしやかに、金一両をおさめた上でいい出したものだから、さすがの林十右衛門も、

「わけもないこと」

ついつい、承知をしてしまい、日づけを三月一日に書きしるしたのである。

（なんと、あの日よりも前に、郡兵衛めは印形を紛失してしもうた、というのか……）  
十右衛門は、不安になつてきた。

ではある。そこで両目付は、それぞれに十右衛門と郡兵衛を取り調べてみた。その結果が、どうなったかというところ……。

「どうも、林十右衛門があやしい」

こういうことになってしまった。

「これはまさに、郡兵衛が取り落した印形をひろった十右衛門が偽証文をつくり、これへ捺印をいたしたのか……」

と、なった。よくよく考えて見れば、偽証文をつくってまで金をうばいとうとする者が、わざわざお上へ訴え出るということそれ自体がおかしいのである。

しかし……。

取り調べの場における両人の風貌や態度が、二人の目付役の脳裡へそれぞれに影響しそのことにとらわれた目付役の判断が、われ知らず狂っていったものであろう。

この日。ついに林十右衛門は帰宅をしなかった。小村郡兵衛も同様に、評定所へとどめおかれたのである。

次の日。目付の報告が、さらに若年寄までとどけられたけれども、その目付たちの眼が狂っているのだから、十右衛門にとっては、まことに不利をきわめた。

二日後……。

町奉行所も、十右衛門を引きとった上で、奉行所の仮牢へ押しこめた上で調査をすすめた。十右衛門から金を借りた小旗本や御家人たちが取り調べられる。



たものにちがいない。

（わ、わしとしたことが……）

まさに、あれだけぬけ目なく金貸しをいとなんでいた林十右衛門の、これは千慮の一失というべきものであった。

「よしなに、じゅうぶんの御吟味下されますよう……」

つつましかに両手をつかえる郡兵衛を見るや、十右衛門こらえきれず、

「これは、い、陰謀にござります。小村郡兵衛が恐ろしきたくらみにござ……」

「だまれ」

脇坂主計がいっかつ一喝し、

「取り調べるはわれらが役目じゃ。ひかえておれ」

「ははっ」

「いまずぐにも取り調べつかわす」

というので、すぐさま下役を出して調べさせると、

「まさに、小村郡兵衛は印形紛失のとどけを、二月二十七日に出しております」との報告があった。

二月二十七日に紛失とだけが出ていた印形が、三月一日づけの証文に捺されているというのは、郡兵衛自身のことばでないが、

「まさに、ふしぎのこと」

「まあ、おさき。そうさわぐなよ」

むしろ、落ちついていたのである。

ところが……。

十余日を経て、

「林十右衛門こと、謀判をいたし、無実の申しがかりをいたせし段、不とどきしごくにつき……」

なんと、死刑に処すという判決がくだったものである。

「げえっ……」

と、おさきは、このことをきいて気をうしなった。

まさかに、とおもっていただけに小十郎も、

(こ、このようなことが、あつてよいものか……)

茫然<sup>ぼうぜん</sup>としてしまったのである。

決定的なことは、二月二十七日の当日、小村郡<sup>こむらぐん</sup>兵衛<sup>べゑ</sup>が林家をおとずれた姿を見たものがない、ということであつた。

その当日。

小十郎は、根津権現のお松のもとへ出かけていたし、おさきも買物か何かに出かけていたらしい。

判決がくだつたその日に、早くも林十右衛門は、千住<sup>せんじゅ</sup>・小塚原<sup>こつかはら</sup>の刑場へはこばれ、

林家の家宅調査がおこなわれる。

小十郎も、

（まさか、おやじが……）

いまはもう、父親殺しを考えたことなど忘れてしまい、

（これはおかしい。まさにおかしい。おやじが、偽証文をこしらえてまで金がほしいなどと

……そうしたおやじではない。あるはずがない）

のである。

だが、近辺の者たちも、ましてや金を借りたことがあるものなどが、金貸しをよくいうわけがない。借金を返していないものなどは、

（これで十右衛門が罪をうけるようなことになれば、うまく借りた金<sup>ちゆう</sup>が棒引きになる）  
べりり、かげでは舌を出していたようだ。

「なんと、十右衛門が偽証文をこしらえたそうな」

「あのじじいがのう」

「それほどまでに金がほしいものか」

うわさもひろがる。

ひとり躍起となって、十右衛門の無罪を叫ぶのはおさきのみで、小十郎とても、父は無罪だとおもっているが、そのことは、お上の手によって間もなく解決されるものと信じきっていたから、

行つた。

首の番をしているやつに、金をやって、うまく首をもらい下げるといふ手段も考えぬではなかったが、

（無実の罪におとされたおやじの首を引き取るのに、なんで、金をつかうことがあるものか！）

小十郎は、小塚原へ着くと、おさきをはなれた場所へ残しておき、単身、刑場へ潜入した月も星もない暗夜である。

父の首をたしかめ、小十郎が、これを用意の箱におさめ、大風呂敷おふしきに包んでいるとき、

「わりや、だれだ？」

番人が、わめき声をあげ、走り寄つて来た。

小十郎も、必死である。立ちあがりざまに、腰の脇差わきざしを抜き打った。

そのとき、刃を返して峰打ちにしたのは、意外に小十郎、しっかりしている

「うーん」

気絶して倒れ伏した番人を尻目しつめに、それからまっしぐらに刑場を駆けぬけ、いらいらと待つていたおさきのもとへ駆けつけ、

「おさき。うまくいったぞ」

「早く、早く」

夢中で逃げた。

「あつ……」

という間に、首を切られてしまった。

あまりにも呆氣あつけないことではある。

一人息子の小十郎が刑場へ駈かけつける間もなかったのだ。

（畜生め！）

勃然はつぜんとして、突如として、小十郎の胸へ怒りがこみあげてきた。

小村郡兵衛「徒目付かちめつけ」という公儀の役目をもつ男だけに、何やらいち早く彼の身をかばい、早く、

（父を処刑してしまったのだ）

と、小十郎にしてはおもえぬことのないのである。

父は、獄門にかけられているという。

小塚原の刑場で、

（父の首が、さらしものになっているのだ。）

のだ。

小十郎は、たまらなくなってきた。

なんとしても、

（父の首だけは、この手に取りもどさねば……）

と、小十郎は、おさきとともに、処刑のおこなわれたその夜ふけ、小塚原の刑場へ忍んで

「のう、おさきや」

と、和尚がおさきを見て、小十郎をあごて指し示し、

「こやつ、おどろいたものじゃの」

「はい、はい」

おさきも、しきりにうなずき、両眼に<sup>なみた</sup>涙をいっばいたたえながら、

「はい、もう、ほんとうに……」

「いや、おどろいた……」

「へえ、まさかに、これほどしっかりとした<sup>わかべしな</sup>若旦那とは……はい、まったく今日かひまで、

おもつてはおりませぬでございました」

「わしも、よ」

小十郎が、二人を交互に見やり、不審そうな顔で、

「私が、どうか、いたしましたので？」

「おうよ」

「いったい、その……」

「お前はな、むかし、この近くで両親と共に暮らしていたころのことを、おぼえておるかえ？」

「いや、別に……」

「泣き虫でのう」

逃げながらも小十郎は、

「小村郡兵衛め、よくも、おやじをおとしいれたな！」

今度は、その一事をおもいつめている。亡父にかわって数度、郡兵衛のところへ貸金のといそくに行つたことがある小十郎は、そのときの印象からみて、郡兵衛の犯行を確信していた。

#### 四

林小十郎が、父・十右衛門じゅうえもんの首をはこんだのは、市ヶ谷いちがやの道林寺という小さな寺であつた。

この寺の天栄和尚てんえいと十右衛門は、むかし、いわゆる「碁がたき」だったのである。小十郎が三、四歳のころまでは、十右衛門も亡母・朝江も市ヶ谷に住んでいて、天栄和尚とは、そのころからの交際であつた。

「ほ。やったか……」

と、和尚はおどろきもせず小十郎とおさきを迎え入れ、

「十右衛門どのの首は、たしかにわしが、ほうむってやろう」

「ありがとうございます」

「それにしても、よ……」

「は……?」

「あの、父がで？」

「いかにも、お前が発熱して苦しむとき、亡き十右衛門とは、一睡もせず、夜を明かすこと、一年のうちに何度あったことか……」

「ははあ……父は一度も、さようなことを申しませんでしたか……」

「いささかも恩着せがましいことをいわぬ、せぬのが親の愛じゃ。十右衛門殿はな、よいがお前が病弱だからと申して、いたわりすぎてもならぬ、さりとて尋常の子のごとき、あつこくてもならぬ、というので、それはもう非常の苦勞をしたものじゃ。高価な薬をもとめるかために、おもいきって、あのような金貸し渡世もはじめたのじゃ」

これも、はじめてきくことだ。

小十郎も、おさきも息をつめてきき入った。

金貸しなぞになったのは、そのことが原因であるけれども、年を経ることに、それか板についてしまい、

「それがし、われながらおどろいております」

と、市ヶ谷から、本郷・春木町へ移って五年ほどすぎ、林十右衛門が道林寺をおとすれたとき、

「ついつい、身が入ってしまいましたな」

と、いったそうである。金貸しとしての毎日に、身が入ってしまうというのだ。

「それがし、前世は、金貸しをしていたのやも知れませぬ」



「は……それは父からも、よくきかされました」

「ひと通りの泣き虫でない」

「ははあ……」

「蚤つみに喰くわれても泣く、というやつよ」

「なるほど……」

「病弱での中」

「私が、で？」

「うむ」

「ははあ……」

「いつもいつも、ひいひい泣いて、夏でも冬でも風邪をひいてのう。熱を出しては何度も死にかけてものよ」

「私が？」

「知らなんだのか？」

「父は申しませぬし、母は私が十歳の折に亡なくなりましたが、そのようなことは一度も……」

「きかされなんだか？」

「はい」

「親の愛は尊いものじゃ。両親はな、お前が幼少のころは一時たりともこころ安まらず、病身のお前を介抱することに明け暮れていたものよ」

おさきは、泣いている。

なんとなく、いままで自分が考えていた十右衛門よりも、

（おやじは、もつと、いろいろなものをもっている人だったらしい……）

そうおもうと、今度の父の死が、なおさらに、くやしかった

「小十よ」

と、和尚。

「はい？」

「今夜のお前がそれよ」

「え……？」

「父の首をさらしものにしておきたくない一心で、お前は恐れけもなく小塚原の刑場へふみこんで行き、なんと、生まれてはじめて引きぬいた刀で、しかも峰打ちに番人を倒し、父の首をうばって逃げた。こりや、なまなかな男にはできぬことじゃぞ」

「ははあ……」

「おのれでは気もつくまいが、の」

「はあ……」

「父の金をかすめ、酒と女に入れあげていたお前か……」

「和尚さま、よく御存じで……」

「十右衛門殿からきいたわえ」

苦笑する十右衛門に、天栄和尚が、そのとき、

「それよ。人はそれぞれ、自分<sup>わづれ</sup>にてもはかり知れぬ才能を心身にひそませておるものじゃ、これはのう、やつて見ねばわからぬことでないまの世では、さむらいの子はさむらいに、職人の子は職人に、百姓は百姓、町人は町人と……すすむ道がきまつてしもうておるようなものじゃし、また、おのれの隠れたる才能を見つけ出すことが最もむずかしいのよ」と、こたえたそうな。

つまり……。

林十右衛門は、なんとかして病弱の我子へ、すぐれた医薬をあたえたい、そのためには先ず大金を得ねばならぬ、というので、敢然、金貸しとなった

その必死のおもいから出た転身が、意外にも十右衛門の性格にも合い、才能をのばすことにもなったのである。

ものごころついてから、病気で寝ていた自分をおぼろげにおぼえてもいた小十郎であったが、春木町へ引き移ってから二年もすると、両親の丹精の甲斐<sup>うづ</sup>あつてか、めきめきと丈夫になり、それからはほとんど患<sup>わづつ</sup>ったことがないだけに、

（おれは、丈夫だ）

と、おもいこんでしまっていた小十郎なのだ。

（おやじは、そのようなことを一度も、おれにいったことはなかった……）  
得体の知れぬ感動が小十郎の全身をみたした。

「なさけなくって、涙も出やあしない 月を、つ差しているなら小十さん もつて、しつかりしておくれな」

と、いったものである。

（なるほど……そのおれが、今夜は、よくまあ、やってのけられたものだ）

無我夢中というものは、おそろしいものだ、と、いまさらながら小十郎は、今夜のけたことに冷汗がにじんできた。

「さて……」

白みかけた障子を少し開けながら、天栄和尚が、

「小十よ。これから、どうする？」

と、問うた。

むし暑かった部屋の中へ、障子のすき間からあかつきの冷気がながれこみ、その冷気か小十郎のあたまの中を爽快にそうかいした。

小十郎は言下にこたえた。

「父の敵を討ちます」

「それから、どうする？」

「あとは、まだ考えていませぬ」

すると、和尚がぼんとひざを打ち、

「できた」

「えっ……？」

「十右衛門どのは、こう申しておられた あれほどの病弱の子が、とうやら丈夫に生いそだち、酒ものめ、女も買える軀からだになったること、何よりうれしく……と、な—

「……………」

「しかし、野放図にしておいてはいけぬゆえ、知らぬ顔して、絶えず目を光らせておるなれど、ともあれ小十郎がそれほどまでに丈夫な若者となってくれただけで、わしはうれしい、と、かようにいうておられた つい半年ほど前に、ここへ見えたときにのう—

「さ、さようでしたか……」

「どうじゃ 人のころのうちは、はかり知れぬものであらうが」

「は、はい」

「さむらいの子に生まれたくせに、剣術もまなばず、喧嘩けんかに勝ったこともないお前が、刀をぬいた瞬間、殺してはならぬと感じ、峰打ちにした……これはもう大へんなことだよ そのときのお前は剣術の名人だ」

と、和尚は両手をひろげて、大仰にいう。

ま、小十郎もそこまではおもわぬが、それにしてもだ……

つい先ごろ、根津権現ねづこんげんの岡場所おかやしろで、お松と遊んでの帰る道、娼家しょうやの店先で、酔いどれの職人しやくじんにからまれ、二つ三つ、なぐりつけられても手出しさえできず、あわてて逃げ出した小十郎を見ていた便牽牛べんけんぎゆうのお松が、その次に会ったとき、

おさきは、というと、

「私のことなら、だいじょうぶです、若旦那（やすのじんべえ）—  
といい、旧主の芝・田町の紙間屋（かまぐら）—万屋甚兵衛（まんやじんべゑ）一方へ出かけて行つた  
のちに……」

刑場にさらしてあつた林十右衛門の首を取つて逃けたのは、

「せがれの小十郎らしい」

となつて、奉行所から万屋にいるおさきへ取り調べがあつたけれども、

「私は、旦那さまがお首を打たれた日の、お昼すぎに、荷物をまとめてこちらへ来てしまひ  
ました」

と、おさきは申したて、万屋甚兵衛も、

「その通りでございます」

うけ合つたので、奉行所も調べようがない

「小十郎はいずれにかくれておる？」

「存じませぬ」

である。

おさきは、小十郎の行方を万屋甚兵衛にも洩（も）らしていない

小十郎が、

「父の敵を討つ」

と、叫んだ。

「は……？」

「それでよい、それでよいのじゃ」

「さようで……」

「わしも、十右衛門の無罪は信じておる」

「ありがとうございます」

「討て！」

「はい」

「父の敵を討つことによって大公儀の裁判さいはんのまちかいを正せ」

「はっ」

「それをなしとげたときこそ、次に何をすべきか、おのすとお前の胸に考えか浮かひあがつてこよう」

「は、はい……」

「よし。それでよし」

## 五

その夜以来、林小十郎は道林寺から、歩も出なかった。和尚が、かくまってくれたのである。

郡兵衛の妻・みねは、大へんに温和な女で、林十右衛門も、いつであつたか、

「あの男には、もつたいたないほど、氣質きせきのよい女じゃ」

と、小十郎へ語つたことがあるほどだ。

小村夫婦は男一、女二、合せて五人の子もちであつた。

あの事件以来、

「これというのも、いささか、おれが酒色に迷うたからじゃ」

と、郡兵衛は妻にいい、

「なるほど、たしかに林十右衛門から金、十両ほど、……借りた。なるほど借りたが半年ほどのうちに、すっかり返している。いやなに、その金はな、いいにくいことだが、いささかその博打てんくさみをして勝つた金で、な」

いいぬけておいて、

「なれど、けしからぬ。返したものを、返さぬといい、あのような偽証文までつくり、二重取りをしようとは……、実にもつて、見下げはてた男じゃ、十右衛門というやつ」

たくみに、善良な妻をいくるめてしまった。

しかし、おなじ徒目付わきめづをつとめている回僚たちの中には、郡兵衛の平常をよく見知つていて、

(どうも、ふに落ちぬ)

とおもう者もあり、



と決意したことも、である。

いっぽう、小十郎は道林寺の和尚から、

「坊主になりきれ」

といわれ、青々とあたまを剃りあげられてしまい、それこそ本当に、経文をおぼえさせられたものだ。

「しばらくは、うごくな」

和尚が、きびしくいいわたした。

おさきも、当分は小十郎に会ってではならぬ、と申しわたされている。たちまちに、半年を経た。

この間、道林寺の僧や下男たちも、まさか小十郎が林十右衛門の息子だとは考えてもみなかったようだ。

亡き十右衛門は、春木町へ移ってからも一年に二度ほどは天栄和尚へ会いにあらわれたものだが、小十郎は一度も来たことがない。

それでいて和尚が小十郎を見知っていたのは、和尚のほうで春木町の林家へあらわれることがあったからである。

町奉行所も、いまは林小十郎のことなど忘れてしまっているかのようだ。

小村郡兵衛は相変らず元気で、役目についているらしい。

ちなみにいうと……。

「いやもう、笠をかぶらずとも、いまのお前が林小十郎だとは、だれも気づくまい」和尚がそういうほどに、小十郎の坊主ぶりは板についてきている

寺の中で、きびしい修行をついでのことにさせられたため、若いくせにどちらかといえは肥り気味だった小十郎の体軀が細く引きしまり、坊主あたまの所<sup>ところ</sup>方もあつてか、年齢も五つ六つは老けて見える。

「あれ、まあ……」

と、年が明けて間もなく、たまりかねて、そつと小十郎に会いに来たおさきが、若旦那の僧形を見て、しばらくは小十郎と気づかなかつたほどだ。おさきは、こぼした。

「あのときに、こうと知つたら、たとえすこしでも……」

十右衛門の遺金をかくしておくのだつた、というのである。いざ、敵の首を討つて逃げるときも、何より先ず、金である。金がなくてはどうにもならぬ、と、おさきはいま、けんめいに金をためているけれども、万屋でもらう給金などではたかが知れている。

十右衛門の遺金は、手もとにあつたものが二百三十両ほどで、意外に少なかった。もつとも貸金や、諸方への投資は別であつて、小十郎は、そのほうに、

「五、六百両」

はあつたと、おもっている。

これらは書類や帳面と共に、みな町奉行所が没収してしまつた。

「ほんとに惜しい……」

「おれも、林十右衛門から金を借りたことがある。たしかに憎さげな老人であつたけれども、三十両や五十両の金ほしさに偽証文をつくるような人物には、見えなかった」

口に出している者もいた。

そうした気配が、小村郡兵衛へもそくそくと感じられてくるものだから、近ごろの彼は何事にも口をつつしめ、行動もおだやかになつてきて、

「まるで人柄ひとがらが變つてしまつたな」

徒目付の頭の一人で、郡兵衛の上役にあたる岡島伊助おかしまいすけが、

「御役目にも、よう精を出すし、ことはづかいもおとなしやかになつた。よほど、身にこたえたものだろう。いや、たしかに、あのときのことは、林十右衛門の悪事にきまつている」これはしきりに郡兵衛をかばう。

というのも、郡兵衛の妻・みねは、岡島伊助の姪めいにあたる、ということもあつてだろうか……。

年が暮れ、年が明けた。

宝暦七年である。

「もう大丈夫。そろそろ外へ出てもよいじゃろ」

と、和尚がゆるしてくれ、外へ出るときの用意に托鉢僧たつぱつそうの衣裳いしやうをあたえた。

これなら笠かさをかぶっていることだし、だれかに顔を見とがめられることもない。それに、

「はい、はい」

「いまは、すこしちがう」

「え……？」

「おやじもぬけていたよ」

「なんでございますって？」

「あんな男の口車にのせられ、つい、うかうかと証文に先の日づけを書いたことさ。おやじらしくもないことじゃないか」

「ですが、それとこれとは？」

「ま、おやじにも郡兵衛にあのような悪<sup>ゑ</sup>だ<sup>く</sup>み<sup>ゝ</sup>を考えさせるような落度がなかったとはいえぬ。いやもう返済の約束を違<sup>ちが</sup>えたときの借主に対しては、お前も知つてのように、おやじは、なさけようしゃもなくあつたものな」

「それは、お金がほしいのじゃありません。旦那さまは、きちょうめんなお人でございますから、いったん約束をしておきながら、それを違える人のところを憎んだのでございますよ」

「ま、そうだろう」

「それなら……」

「おれたちは、そうおもう。だが、世間の人たちは、そうおもつてはくれまい。なにしろ、おやじは金貸しだったのなものな」

と、嘆くおさきに、小十郎はこたえるまでもなく、ゆったりと微笑をうかべ、しずかに手をのべ、この忠義者のおさきの肩のあたりを、なぐさめ、いたわるかのようになせさすっている。

「……………」

おさきは、びっくりした。

まるで、半年前の若旦那とはちがう。

腰が落ちつかず、いつも、きよろきよろしていた小十郎のおもかげは、どこにもない「だ、だいじょうぶでございますか、若旦那……………」

「なにが？」

「まさか、旦那さまのかたきを忘れたのじゃ、ございますまいね？」

「忘れぬ」

「ほんとうに……………」

「おやじのかたきを討つ、というよりも、おれは公儀のお裁きがくやしい。こんなことで天下がおさめられるとおもわれては困る」

「さ、さようですとも!!」

「そのために、おれは郡兵衛を討つのだ」

「じゃあ、あの男が憎くはございせんので？」

「憎いと、はじめはおもった」

を十右衛門が、

「わしにあずけておけば、利がつくようにしてやる」

というので、ほとんどあずけてしまった。

それもいっしょに没収されてしまったわけだが、それでもまた三両ほどはしまいこんでいたのであった。

「ありがとうよ」

いいながら小十郎が一両小判を一枚とって、

「これだけ借りておくよ」

「いいんでございますよ」

「一両でたくさんだ。托鉢もするし、な」

「たくはつ？」

「おい、おさき、おれはいま、この寺の坊主で、名も智道ちだうというのだぜ」

「まあ」

「安心しろ。きつとおやじのかたきは討つて見せるよ」

## 六

托鉢僧になって外へ出た、その第一日に、林小十郎は根津権現ねづごんげん・門前の岡場所おかばしよへ駈けつけ  
ている。

「そ、そんな……」

「たしかに、世間の評判は悪かった……」

「……………」

「それに、あのおやじの顔かたち、どう見てもうれしい顔ではないよ」

「わ、若旦那……」

「損をしたものだ。評定所や奉行所でも、おやしの顔と口のききようを見聞きして、とたんに信用をしなくなったのだろう、と、おれは見ている」

この推理は、まさに的中している。半年の間に小十郎、これだけものを考えるちからがそなわってきた、ということになる。

「ときに、おさき」

「はい？」

「すこし、小づかいをくれないか」

「え……………」

「和尚さんに外出をゆるされたよ。これからいよいよ郡兵衛のうごきを追わなくては、な。それにはすこし、金もいるし……」

「はい、はい。もってまいりましたとも」

おさきは、金三両を、小十郎へわたした。

実はおさき、林家にいたころの給金をためたものが二十両ほどあったのだけれども、これ

「おやじに勘当されて、この始末さ」

「すつかり顔を見せねえものだから……」

「たのみがある」

「いって下せえ」

「これから、便牽牛のところへ行きたいのだよ」

「へへっ……」

「この姿なりじゃあ、な」

「ようがすとも」

与吉に小づかいをやり、彼の着物を借りて着替え、あたまはどうしようもなさ、手ぬい、いで包んだ上から菅笠すかんをかぶり、托鉢僧のこしらえは船宿へあすけておき、

「夕方までには、もどるからな」

「行っておいでなせえ」

見送っている与吉へ、さっきの女中が来て、

「友だちかえ？」

「そうよ」

「見たことがある」

「この前、ここへ来たときにやあ、刀を盗んで、りっぱなお前、さむらいの世がれと」

「そ、そういえば……」



岡場所というのは、私娼ししようのいる遊里のことだ。むろん、幕府が公認した遊里ではないから、いろいろと取りしまりもあるし、ここへ、僧形で出かけて行くようなはかなまねは、小十郎決してやらぬ。

浅草橋に近い船宿（みよしや）の船頭で与吉という男が、前からの博打仲間ばくちでもあり遊び友だちでもあつて、さいわいに与吉は、便牽牛べんきんぎゆうのお松同様、

「小十郎」

という名は知つていても、どこの小十郎なのだか、そのようなことは問題にもせぬ人種なのである。

「どこかの坊さんが呼んでいるよ」

と、船宿の女中にいわれ、裏手へ出てきた与吉が、

「だれでえ？」

「おれさ、小十だよ」

笠を上げて顔を見せるや、

「え……やや……ふうむ……」

「この顔がわかったか？」

「やっとなかった」

「久しぶりだね」

「いったい、どうしなすつたので？」

「やっ和外へ出られたものだから、何はともあれ、その、ごほうのような軀を抱きかかると、  
てね」

「いけすかない、小十さんだこと」

「どうした、達者でいたか？」

「ためしてごらんな」

というので、すぐさま事におよんでみると、これがまた実に新鮮なのだ

ということとは……。

お松のほうには別に変ったところもないが、小十郎の体格というものがまるで変わってきてしまっている。

前のようにぶくぶくと腹がふくれてはいず、胸も腕も腹も、細く引きしまつてきているものだから、お松の全身の肌だが小十郎のそれにびたりと密着し、得もいわれぬ感じとなり、

「こ、こりゃあ、おい、どうも、おどろいたな」

「あたしもさあ……」

お松も欲得なしに、しがみついてきて、

「今度は、いつ？」

「さ、そいつがどうも……」

「どうして？」

「なにしろ、勘当の身だ 前のようにには行かぬさ」

「おやじに勘当されて小十さん。坊主ほうずにされたとよ」

「あら、まあ」

「女に会いに行くのに、身なりを変えてからと、こういうわけさ」

「まあ、しゃれた坊さんだねえ」

さて小十郎は、まっしぐらに根津へ駆け向つた

この岡場所は、根津権現社が宝永三年に建立けんりゅうされると同時に出来たものとかで、本郷界限ほんごうかいわいの岡場所では先ず歴史も古く、規模も新吉原しんよしわらにならつてかなり大きい

門前町から一ノ鳥居、宮永町への参道の両側に水茶屋（兼）引手茶屋が軒をつらね、権現社の東に「切見世きりみせ」がかたまっている。

この中の「しなのや」というのが、かの便牽牛のお松がいる娼家であつた。

「あれえ……？」

あらわれたお松、手ぬぐいをあたまからとつて、にやりと笑つた林小十郎をまじまじとながめ、

「こ、小十さんかえ？」

「そうさ」

「いったい、どうしたのさあ？」

「おやじに勘当されてな」

「まあ……いけすかない、おやじだこと」

和尚がこちらを見つめている、針のように細い眼は、

(なにもかも、知っておるぞよ)

と、いわんばかりのするどいひかりをたたえている 小十郎はうつむいた。  
和尚の、しずかにして重おもしげな声が、

「今日より、寺を出よ」

といった。

「お、和尚さま」

「これよりは何事も、お前のおもうままにせよ。人の世というものは、煎じつめれはな、何が善い、何が悪いとも決められたものではない 女に迷うて一生を終るもよし、父のかたきを討つもよし」

「は……」

「何にせよ、一事に徹しきればよろしい わかったか」

「まことに、私は……」

「いうな、いわずともよい。父ごのめいふくは、わしがいのつていようゆえ、お前は好きにいたせ。ただし、一つのみ、お前に申しておきたいことがある」

「な、何事で？」

「来る十一月二十日に、將軍家が小菅御殿へ鷹狩りにおもむかれるそうしや」

この和尚のことばに、小十郎は胸ふるいしたものである

うしろ髪を引かれるおもいで、小十郎は帰って行つた。こうなると、父のかたきのことなど、どうしても忘れがちになる。

「一両でいいよ」

などといつていた小十郎が、おさきおさきのふところから残る二両を引き出してしまひ、おまけに托鉢たくはつをしてもらつた錢までもためこみ、お松へつきこむ始末になつた。

夏が来ていた。

亡父・十右衛門じゆうえもんの命日も近い。

その命日の当日。

小十郎は、おさきのみをまねいて、天栄和尚あまぎやうしやうにたのみ、ひそやかな供養くやうをしてもらつた。寺僧たちは、おさきの縁類の供養だとおもっているらしい。

林十右衛門の首は、和尚が一年前のあの夜、みすから墓場むらばの一隅ひとすみに埋めてある。白木の墓標むらふしすら、まだ立つてはいなかつた。

いや、わざと立てていなかったのである。

供養が終ると、和尚が自分の居室へ小十郎のみをまねき、

「小十よ」

「はい……」

「決心は変らぬか？」

小十郎は、ぎくりとした。

「かしこまりたてまつる」

大岡忠光は、すぐさま手配をおこない、十一月二十日に將軍御狩りがおこなわれるおね、ふれ出したのが、この夏であつた。

小十郎は、すこしも知らなかつたけれども、天栄和尚は大身旗本の諸家にも知己があり、おのずと耳へ入つたものであらう。

將軍・家重は、白痴であつたとか廢人であつたとか、後年になつて評された人たけれども、これは家重がひどい言語障害になやまされ、そのコムプレックスが昂じ、ついには側用人・大岡忠光のみが、この將軍のことを解することができ、これがために忠光は、元禄の時代になつた。將軍・綱吉つなよしの側用人として權勢をふるつた柳沢吉保やなぎたけやすと同じような威權をあたえられるようになった。ともあれ徳川九代の將軍・家重は、こうした人物であつたが、學問にも武道にも、亡父・吉宗のいいつけで、通りは心得てい、狩獵も父ゆずりのものであつたといえよう。

そこで……

將軍が外出するということになれば、徒士組かちぐみはむろんのこと、徒目付からめつけも出張つて、小菅・帶の地を檢分すると共に、御狩りの当日も、前夜からあたりを警戒するのが役目である。

ゆえに……

將軍御狩り、と天栄和尚からきいたときの林小十郎は、

（父のかたきを討つは、この機会をおいて、ほかにない）  
と、おもつた。

## 七

小菅御殿は……。

現・東京都葛飾区小菅一丁目にある東京拘置所（小菅刑務所）の地点にあった。

ここは、千住町の東、荒川をへだてた対岸一帯の地で、寛永のころ、將軍がこの地・十万余坪を関東代官の伊奈半十郎へたまわり、以来、この屋敷へ、將軍がおもむき、泊りがけて鷹狩りをするようになった。

もつとも熱心であったのは前將軍（八代）徳川吉宗であつて、ほとんど毎年、小菅をおとずれ、狩りをおこなつた。

したがつて、伊奈屋敷といつても將軍別荘の役目をおびていたわけだから「小菅御殿」とよばれたものであろう。

その吉宗の子の現將軍・家重も、まだ將軍位につかぬ前の元文元年、父將軍・吉宗につれられて小菅御殿へ鷹狩りにあらわれたが、その後、間もなく御殿が火事を出して焼失してしまい、以来、家重も小菅へおとずれることもなかったという。

だが、仮御殿も六年前に完成していることだし、家重も將軍になつて十四年、五十に近い年齢となつて、むかしのことをおもひ出してか、

「一度、小菅へ鷹狩りに行きたい—

と、側用人の大岡出雲守忠光にもらした。

かといって、郡兵衛の外出時をねらうことは、なかなかむずかしい。

なにしろ郡兵衛は、幕府の探偵をつとめているほどの男であるから、いつ家を出て、いつ帰つて来るのか、そこがなかなかにつかみにくいのだ。しかし、將軍が小菅御殿へ、自ら鷹狩りとなれば、かならず郡兵衛も先行して役目につくはずであつた。

おさきと共に、小十郎が市ヶ谷道林寺を出るとき、天榮和尚は山門の外まで見送つてくれ、  
「これが、別れじゃ」

「はい。ながながと、お世話に……」

「饒別せんべつじゃ、とれ」

和尚が金十両を包んだものを、小十郎へわたした

「かたじけなく存じます」

「好きにっこうたらよい」

「は……」

「討つもよし、討たぬもよし」

「はい……」

父のかたきを討つ、とは和尚にいわなかったけれども、いまの小十郎の決意は、もう微動だにせぬ。彼はまたも、一年前のあの夜、小塚原こづかばらの刑場へ無我夢中で駆けつけた彼になつていたのである。

林小十郎は、理性よりも感性にすぐれた素質をもっていたようだ。



このごろの小村郡兵衛は、徒目付として実績もあげ、以前の悪評も消えかけているし、所懸命に役目をつとめてはいるけれども、その胸の底には、絶えず、林十右衛門の子・小十郎の姿がうかんでくるのだ。

（まさかに、あの、おとなしそうなせがれが、おれをかたきとねらうはずもないが……）と、おもいはしても、小十郎が行方不明になっているだけに、何となく気味がわるいことはたしかだ。

（なに、十右衛門はおれが手にかけてたわけではないのだし、まさかに、おれが……）しかし、ゆだんはせぬ。

この一年。小十郎も根津のお松へのみおぼれこんでいたわけではないが、どうしても郡兵衛の隙がない行動へつけ入ることができず、それで却って、お松との情欲へおぼれこんでいった、といえぬこともない。

日中でも夜でも、小村家の戸締りはきびしい。

屈強の下男二人が、小村家には住みついているし、郡兵衛自身も剣術を相当につかう、ということを小十郎は調べあげている。

うかつに自宅へは飛びこめぬし、それに、

（出来得るなら、郡兵衛の妻や子のおらぬ場所で仕かけたい）

と、小十郎は考えていた。

女子供の前で流血の惨劇をおこしたくないのである。

彼らは、いずれも何気ない風体で、小菅一体を内偵し、警戒をする。一団になったのことは、ではない。一人、または二人であたりを巡回するのであった。

そして、十九日の四ツ刻（午後十時）に、徒目付の総員が小菅御殿へ参集する。

そこで明朝の御狩りを警衛するための打ち合せがなされ、しばらく仮眠をとったのち、組頭の指揮の下に徒目付と、その下に属する小人目付が、全員（黒羽織）をつけ、足こしらえもきびしく、將軍の順路へ配置されるのだ。

その十九日の五ツ（午後八時）をまわったころであつたが……

小菅御殿の北方約半里ほどにある嘉兵衛新田の田圃道を、小村郡兵衛かひとりて歩いてゐる。

参集の時刻もせまっていた。

（すこし早目に……）

と、郡兵衛はおもっている。

すでに冬の気配が、夜の闇にたちこめていた。当時の十一月十九日は、現代の十二月下旬にあたる。

郡兵衛の吐く息が、闇に白かった。

くもり空は月も星もかくしている。

綾瀬川にかかる土橋を、小村郡兵衛がわたりきつた……その瞬間であつた。橋たもとの松の木蔭から、

なればこそ、そのときどきの状態に向って、まことにスムーズに自分を投げこみ、その中へ無心に没入して行けるのであろう。

これまで道林寺にいたとき、和尚にいわれ、手習いをはじめたものだが、これを見るや、「お前、これまでに習字をしておったか？」

「いいえ」

「ふうむ……」

和尚は、小十郎の書いた文字のみごとさに嘆声を発し、

「お前というやつ、まことに、ふしぎなやつじゃ」と、いった。

## 八

將軍・家重が、江戸城を出て小菅へ向う十一月二十日の二日前、すなわち十八日から、徒目付六十四人のうち半数が、小菅方面へ向った。

昭和の戦前には、天皇のみならず、皇族の旅行先には、かならず刑事が出張して、「異状の有無」

を、内偵し、たしかめたものだが、徒目付のそれと同じことをするわけである。

徒目付の残り半数は、十九日に小菅へ向った。

小村郡兵衛は十八日出発の組に入っていた。

尚も狼狽し、逃げるように後退した郡兵衛が、さしづえの脇差を引きぬいた。

もとより提燈も地に落ち、これがめらめらと燃え出す火影に映じた小十郎の姿は、このあたりの百姓が、將軍御狩りにあつめられて人夫にかり出された風体そのものなのである。小十郎は、このあたりの百姓へ金をつかい、手段をめぐらし、たくみにまぎれこんだのだ。「郡兵衛。おぼえがあるな」

「うるさい」

「きさま、まことに卑怯なやつだ」

「だ、だまれ！」

「父を殺したのは、きさまのほかにもあるが、その連中に父の無実を知らしめるためにも、きさまを討たねばならぬ」

「知らぬ。知らぬぞ、おれは……」

「またも無言で、小十郎が斬りつけてきた。」

「あつ、ああ……」

かなりの剣術をつかうはずの郡兵衛が動転しきっている。

剣術の稽古と真剣勝負とは別のものだ。

それに、自分のやましさに郡兵衛は度をうしなっている。闇を切り裂いて襲いかかる小十郎の切先に追いまわされ、

「ゆ、ゆるしてくれ……か、かんべんを……」

「小村郡兵衛」

よびかけたものがある。

「だれだ！」

ぱつと飛び下つて郡兵衛が、そこは役目柄やくめがらのす早はやとて、提燈ちようちを左手に持ち替え、松の木陰へさしつけながら、右手に大刀をぬきはらった

「おれだ」

ぬつと、あらわれたのが林小十郎だ。

「や……？」

「忘れてはいまい。林十右衛門のせがれ、小十郎だ」

「あつ……」

ぎよつとなつた小村郡兵衛へ、ものもいわずに小十郎が刀をたたきつけてきた

「あつ、あつ……」

あわてて、はらいのけたつもりだが……

なんと、小十郎が叩たたきつけてきた刃やいばにこもっているちからは恐るべきもので、郡兵衛の刀をつかんだ右手がしびれるほどの衝撃をうけ、

「ああ……」

郡兵衛の大刀が宙にはね、飛ばされてしまった。

「こ、こいつ……」

小舟が一つ、もやってある。

その小舟へ、小十郎が敵の死体と共に乗りうつり、竿をあやつつて岸辺をはなれた。

## 九

夜が明ける前に、林小十郎は小村郡兵衛の死体が入った菰包みを、なんと、本郷の郡兵衛自宅の前まで小さな荷車で持ちこんで来たものである。

彼は綾瀬川を小菅御殿こすけごでんの方向へは下らなかつた。小菅に近づけば近づくほど、警備がきつしいからである。

そこで、舟で川をさかのぼり、大きく迂回くわいして江戸市中へ入ったものだ。荷車から死体をおろした小十郎は、郡兵衛宅の門をたたき、

「もし、もし……」

声をかけると、中年の下男が起きて来て、門の内から、

「どなたで？」

「荷物をとどけに来た」

「え……荷物？」

「ここに置いておく。早く仕まいなさい」

「え……？」

「では、たのむよ」

田圃道をころげまわりながら、ついに郡兵衛が悲鳴をあげはじめた。

「あ、ああ……」

「郡兵衛、覚悟しろ！」

「い、いかぬ……助けて、助けてくれえ！」

その悲鳴も、やがて、絶えた。

ぐったりと仰向けに倒れた小村郡兵衛の喉もとへ、小十郎はとどめを入れた。

（これで、よし）

ふしぎに、落ちついている。

用意の書状を、郡兵衛の死体のふところへさし入れた。

書状といっても簡単なもので、

「……小村郡兵衛を討ち果したる者、林十右衛門が子、小十郎なり。亡父・十右衛門の無実をはらさんがためなり」

と、書きしたためたものである。

郡兵衛の首も掻き切らず、刀を鞘におさめた林小十郎が、郡兵衛の死体を何枚もの菰で厳重に包みはじめた。

小十郎は、いったい何をしようというのか……

菰包みにした郡兵衛の死体を、小十郎が引きずって行き、綾瀬川の川べりへはこんだ。そこに……。

妻子のことをおもうと、まことに気の毒なれども、これは天下の大法があやまって用いられたことを正すがためにしたことゆえ、どうか、ゆるしてもらいたい。なれども、もしも杯小十郎を討たむとするならば、決して逃げかくれはいたさぬ。

これを読んでも、妻のみねは、ただもう茫然たるありさまであった。夜が明けた。

この日。

家重、將軍の御狩りは無事にすみ、この夜は小菅御殿へ一泊。翌二十一日に、江戸城へもどった。

「郡兵衛が、急に行方知れずとなった」

というので、徒目付三人と、組頭・岡島伊助おかしまいすけが小村家へ駆けつけて来た。

「こ、これを……」

と、みねが小十郎の書状二通を叔父にあたる岡島へわたす一読して、

「ふうむ……」

岡島伊助は顔面蒼白となる。

「いかが、いたしましたら……」

「みね、あわてるな」



駈け去る小十郎の足音をきいて、

「な、なんだ、いったい……う」

門の戸を開けて見ると、門の前に大きな菰包みが、

「こ、こりゃ、なんだ？」

びっくりしながらも、もう一人の下男を起し、菰包みを門内へはこび入れ、中を開けて見て、  
「げえっ……」

二人とも、まっ青になった。

それは当然であろう。

一昨日の朝早く、元気に出ていった主人の小村郡兵衛の斬殺死体がころげ出たのである。  
「た、大変……」

知らせをきいて郡兵衛の妻・みねがあらわれ、ひと目見て、

「あれっ……」腰をぬかしてしまった。

小村家は、大混乱におちいった。

死体の胸にさしこまれた書状のほかに、もっと部厚い手紙が、郡兵衛の妻女にあてて死体と共に菰包みの中へ入っていた。

その小十郎の手紙の大意は、次のごとくだ。

亡父の無実をはらすため、郡兵衛を討ち果した。

郡兵衛の遺族に対しては、

「しばらくは、そのままでおれ」

という内意らしい。

事件の当初は、小十郎の行方をきびしく追っていたらしいが、これもいまは、むしろ、

「ほうりすて」

のかたちになっている。

また、一年がすぎた。

すなわち宝暦九年となった一月二十五日に、小村郡兵衛の遺子で十八歳となった<sup>うん</sup>之助<sup>すけ</sup>へ、

「家をついでよろしい」

との許可が、幕府から下りたのである。

世間の人びとは、もうあの事件を忘れかけていたようだ。

郡兵衛の妻・みねの叔父で、徒目付の組頭をつとめる岡島伊助が来て、みねに、こういった。

「このことは、たれにも洩<sup>も</sup>らすまいぞ」

「は……う」

「みね。ようきけ」

「はい」

「あの事件<sup>こと</sup>はな、どうも郡兵衛が悪かったらしい……と、お上も気づかれたようしや」

「は、はい……」

「落ちついて、よく考えるのだ」

こういったときの岡島伊助は、小十郎を討つ、ことなどを考えてはいない。  
(なにともして、姪の<sup>めい</sup>みねを不幸にしてはならぬ)

その一事のみであつた。

そのためには、なんとしても小村家の後を絶やさぬようにせねばならぬ。  
しかし、まずい。

部下の徒目付<sup>からめつけ</sup>三人が、この場において、すべてを見とどけてしまっている。  
まさかに、小村郡兵衛<sup>くんべえ</sup>を病死したことにして、お上<sup>うへ</sup>へとどけ出るわけにもいかなかった。

## 十

小村郡兵衛斬殺の事件を取り調べた幕府は、翌年の春になつても、これといった断定を下さなかつた。

もちろん、林小十郎が死体につけそえた二通の書状も、目付の手へわたされている。  
夏が来た。

林十右衛門が死罪となつてより二年。小村郡兵衛が討たれてから一年の歳月が経過したわけである。

まだ、幕府からの裁断がない。

ちも母のみねをかばいこそすれ、父親に対して、あまりよい感情を抱いていない

「ともあれ、弓之助だけには、これより小村の当主となる身ゆえ、このことをつたえておけい」

「はい」

「よかった……ともあれ、よかった。家がつぶれては、お前も子たちも路頭に迷うことになるばかりか、場合によっては、お上の御仕置をうけねばならぬ」

「心得ておりまする」

「その道理を、よくよく、弓之助へ語りきかせい。父を討った男のことなと忘れろし、な」

「はい」

夜になって、みねが弓之助へ叔父のことはをつたえるや、弓之助はにっこりと一、

「もとよりのことです」

うなずいてくれた。

これで、小村家の遺族は安泰ということになったわけだ

いっぽう、林小十郎は……。

「もう大丈夫でございます」

との知らせをおさきからうけとり、二年ふりに江戸へ帰つて来た。

ときに小十郎、二十六歳。

みねは、おどろくとおもいのほか、わずかにうなずいた。彼女は亡夫の犯行を、このころになって、うすうすは気づいていたらしい。

「これは、まさに、お上の失態といつてよからう」

「叔父さま……」

「よし、よし。もう何もいうな。これからだまつて暮せ。ともあれ、小村の家名は、そのま  
ま、弓之助につがせて下さることになったのしゃ。ありがたいとおもえ、な。それもこれも、  
お上が、みずからの失敗をみとめたからだろう。この失敗が天下に知れわたったなら、幕府  
の面目は丸つぶれとなる。ゆえに……ゆえにこそ、あれから長々と月日をのはし、人ひとが  
あのことを忘れてしまうまで、お上はほうりすておいたのじゃ、と、わしはおもう」

「は、はい……」

「おそらく、林小十郎に対しても、おかまいなしと、いうことになろう。小十郎がおとなし  
くしているかぎりは、な」

「は……」

「くやしいか？」

「いえ……」

「弓之助は何と申しておる。父の敵を討ちたいとでも、申しておるのか？」

そうではないらしい。

郡兵衛は妻や子たちに対して、実に横暴で、女あそびにも酒にも目がない男ゆえ、子供た

「ああ、うれしい、若旦那さえ捕まらないのなら、それでよいですよ」

「それぞれ、そこが女だ、ということよ」

「なんとでもおっしゃいまし」

## 十一

林小十郎が、上野・池の端仲町の書物問屋「須原屋伊八」の店舗裏の小さな家に、おとぎ、ともども暮すようになったのは、それから間もなくのことであつた

その家は須原屋の持ち家だし、主人の伊八は亡父・十右衛門とも親交のあつた人である。道林寺の和尚といひ、須原屋伊八といひ、林十右衛門がここをゆるして交際してゐた人たちは、みな、亡き十右衛門をしのび、小十郎に、

「よい父ごだった」

と、いう。

そして、小十郎を親身になつて世話してくれる

（あの父が……？）

と、おもわざるを得ないのだが、このころでは小十郎も、

（おやしも、ただ取り立てにきびしい金貸し、というだけの人ではなかつたのだから）と、わかりかけてきた。

金貸しとしての父十右衛門と、人の子の親としての十右衛門と、友人に対して信義のあつ

この二年間、小十郎は越後・村上の城下にいる亡父の縁類で、酒造業の三沢勘左衛門方をたより、そこにかくれつつけていたのであった。

江戸へ来て、おさきの口から、小村郡兵衛の遺子・弓之助が家をついだことをきくや、小十郎は莞爾として、

「それでよし」

といった。

「けれど、憎いじゃございせんか、若旦那、郡兵衛の女房子がのうのうと暮して行けるなんて……」

「お前は五十をこえても、やはり女だなあ」

「なんでございますって？」

「ものごとの裏が、わからぬということさ」

「へ……？」

「郡兵衛の家が絶えなかったということは、お上が、おのれの非をみとめたことになるのだむろん、世の人びとは口に出さずとも、わが父の無罪であったことを知ってくれよう」

「さようで……」

「そうとも。おれだつて大手をふつて歩いて、もうおそらくは安心だろうよ」

「ほんとうでございますか？」

「ほんとうとも」

「当寺に、金貸しの資本になるような金があるとおもうか」

「たとえ一両でも三両でも、けっこうでございます」

「十両ほどなら出してやってもよい」

「ありがとうございます」

「それほどにて、やれるのか？」

「やれなくとも、やらねばなりません。それでないと、私も、おとこも乾上（かわあがり）ってしまいます」

「所懸命にやります」

「よろしい。やってごらん」

「はい」

「お前は無我夢中になると、おもいもかけぬちからの出る男じゃ。よし、待つて」

和尚は、十五両出してくれた。

「かならず、お返しいたします」

「そうしてもらわぬと困る」

須原屋伊八も、これをきいて、

「では二十五両ほど出しましょう」

貸してくれた。

合せて四十両である。

現代（いま）の金にして、およそ二百万以上というところか……



い男としての十右衛門と、それらはそれぞれに異なっていなから、ふしぎに矛盾を感じさせないのである。

「さて、これからどうするな？」

道林寺へあいさつに出た小十郎へ、天栄和尚が問うた

「なにか、やりたいことがあるか？」

「ない、こともございません」

「ほほう……で、なにをやりたい？」

「金貸しをやりたいのですが……」

「ふうむ……」

「なれど……資本がもとでございませんで、先まず、その資本をこしらえなくてはなりません」

「ほんとうにやる気かの？」

「前に父の手つだいをしておりましたし、およそ要領がわかっておりますし、それに……」

「それに？」

「なにやら、亡き父のしていたことを私もして見たくなりました」

「なるほど」

「いま、私は一文なしでございます」

「そうじゃろ、な」

「いくらか、資本を貸していただけませんでしょうか、和尚さま」

余裕ゆとりができてくると、小十郎の女あそびもまた元へもどり、いそがしくはたらし、いそがしくあそぶ。

かの便牽牛べんけんぎゅうのお松は、岡場所おかばしよをながれ歩いている女で、もう根津ねづにはいない

しかし、小十郎にとつてはあそびなれた根津の岡場所がもつともよく、また自宅にも近いので、やはりお松のいた「しなのや」へ通いつめていた。

もう二十八歳になる小十郎へ、

「そろそろ、身をかためぬと……」

須原屋伊八がしきりにすすめるのだが、

「家の始末は、おさきがいるし、そのほかのことで、女へ用事があるというのなら、根津へ行けばよい」

と、おもいこんでいる小十郎だけに、須原屋のすすめにはあまり気がのらぬ。

それでも、恩義のある須原屋のすすめをことわりきれなくなり、二十九歳になった宝暦十二年の三月に、小十郎は妻を迎えた。

新橋竹川町に住む銀細工師で松村長六の次女・まつというのを、須原屋の口ききて嫁にもらったのだ。

この縁談を小十郎が承知したのは、根津のお松と、おなし名のむすめであることに気をひかれたものか……。

細っそりとしていながら、あさくろい肌はだになめらかな光沢をたたえているまつを見たとき、

この金を資本として、林小十郎は夢中にうきはじめた。近所の子供へも、習字を教えたし、よい借主をあつめるためには、すいふんと研究もし、苦心もしたらしい。

それから二年すぎると、小十郎はもう一人前の「金貸し」として、らくらくと生きて行けるようになった。

道林寺の和尚へも、須原屋へも、借りた金を返してしまい、

「ほんとうにもう、夢のようでございますよ」

おさきは、依然まめまめしく小十郎につかえて、いまの暮しをよろこひながらも、

「けれど、旦那」

「うむ？」

「この商売は、人のうらみを買いますから、くれぐれも氣をつけて下さいまし」

「おやじの二の舞か……」

「えんぎでもない」

「それも、いいだろうさ」

と小十郎、いまは大小を捨てて、すっかり町人の姿になり、

「このほうが気らくていい。なまじ、刀をさしている金貸したつたから、おやしは妙なものになつたのかもしれないね」

「まあ……」

いつの間にか、おさきは小十郎の母親のような気になっていたのである。また新妻のまつは、これまた気の強い女で、おさきのいうことなれど一語もきこうとはせず、あくまでも、

「おさきは下女」

であるとの態度をくずさぬのである。

（これは困った……）

小十郎が、あたまを抱えはじめた。

気の強い女ふたりが、家庭内いがみ合っているのだから、たまったものではない。さりとて、長年にわたって、亡父と自分につくしてくれたおさきを追い出すことはできぬ。まつは、すっかり小十郎をわがものにしたいとおもひこんでしまい、自信たっぷり、

「追い出さぬのなら、わたくしが出て行きます」

と、せまる。

（勝手にしろ）

ふいと、小十郎が池の端仲町の家から消えてしまった。

どこへ行ったのか、それきり帰ってこない。

一年、二年と歳月がながれた。

その後の、おさきやまつのは筆者も知らぬが、失踪してより十三年目の安永二年の秋に、立派な旅の服装をした中年の男が、供の小者をつれて、市ヶ谷の道林寺をおとずれた。

(これなら……)

と、小十郎はひと目で氣に入った。

おさきはおさきで、

(あんな、まずいむすめのどこがいのだろう?)

舌うちをもらした。

たしかに器量がよいとは、世辞にもいえぬ。

ぽってりとくちびるが厚いし、鼻は、

「あのむすめには、鼻すじというものがないねえ—

などと、実家の近辺の人たちがうわさし合っていたそう。

ところが、いざ夫婦になつてみると、小十郎には、

(やはり、よかった)

なのである。

躰つきも、便牽牛にそっくりだし、小十郎が腕によりをかけて教えこむ愛撫の段階をのぼ

つて行く速度も早く、

(まるで、便牽牛の再来だな)

小十郎は大満悦であつたが、おさきはおもしろくない。

なにがおもしろくないかといえは、はっきりとした理由もないのだ。なにからなにまで小十郎の嫁がおもしろくない。

「ははあ……」

「おぬしが残してあつた証文は、嫁ごのまつどのが手に入れ、だいふんにその、かきあつめたようじゃよ」

「は、はは……」

「うふ、ふふ……」

二人して、さもおもしろげに笑い合つたが、

「ところで？」

「なにをしている、と、おっしゃいますか？」

「うむ」

「なんと、ごらんになります？」

「さあて、な」

「申しあげましょう　いまの手前は、京の柳馬場、四条上ルところの薬種屋あるじの主人にて、十八屋庄兵衛しやうべゐと申しまして、清水観世音御夢想みんせうによる霊方十八丸の本家でござりまする」

（「読物専科」昭和四十四年十月号）

この男、四十一歳になった林小十郎その人である。  
天栄和尚は、八十余の長寿をたもち、まだ生きていた。

「まだまだ御健在であることを信じておりました」

と、小十郎がいう。

四十一歳の小十郎は、見たところ五十にも思える老けかたであったが、体格も顔貌もふっくらとし、白髪まじりの上品なあご髯を生やし、血色もつやつやとしてゐる

「ふうむ……」

和尚は、おもわずうなづいて、

「おぬしまことにもって、ふしぎな男よなあ」

「さようでございましょうか」

「自分にてはわからぬか……いや、わかるまいな」

「わかりませぬ」

「ところで……？」

「いまは、京に住み暮しております」

「京へ、な……」

「おさきは、元気でおりますようか？」

「知らぬ。おぬしが消えてしまったのち、どこかへ行つてしまい、以後は田町の方屋へもあらわれぬそうな」

毒





「このことを、だれにも申すな」

「はい」

「お前が、出てくれてよかった」

「はあ……」

森は、微笑をもつてこたえる。

こうしたことは、いままでになかったことではない。

吉野道順は、この年で三十五歳。

彼が、この吉野家へ養子に入つたのは、五年ほど前のことである。

幕府の御番医師といえば、百俵の御番料をいただく身分だし、能力しだいによつては、將軍のお脈を拝見する〔奥御番医師〕へ昇進することも不可能ではない。

幕府の医官となれば格式も高く、ともかく、諸大名家への出入りもあつて、収入も大きい養子に入るまでは一介の町医者にすぎなかつた道順（そのころは彼、小村昌伯と名のつていた）であるけれども、吉野家のひとりむすめ・お邦の聲になれたのは、ひとえに彼の医術がすぐれていたことによる。

吉野家の家族や親類の中では、だいぶん異論もあつたようだが、

「わしの後つぎは、あの男よりないわえ」

押しきつて、道順を迎えてくれた養父（先代・吉野道順）は、二年前に病歿（ひょうまつ）をしてゐる。その後は……。

## 一

幕府の表御番医師・吉野道順よしのどうしゆんが、その手紙をうけとったのは、その年の秋も深まった或る日のことであつた。

手紙をとどけて來たのは、実直みちただそうな商家の手代とも見える若い男で、  
「筋違御門外すじかきごもんの茶問屋、尾張屋利兵衛おわけやりべゑの使いにござります。主人からの手紙を道順先生へおわたし下さいまし」

と、取次の医生で森為之助もりためのおすけというものへ、くだんの手紙をわたし、

「御返事は、ちようだいいたさずとも、けつこうなそうにござります」  
いうや、すぐに去つた。

「なに……茶問屋の尾張屋とな……？」

くびをかしげつつ、手紙を讀した吉野道順の顔色が変わつたのを、森はたしかに見た。  
「む……」

森へうなずいて見せた道順が、す早く手紙をふところへしまひこみ、あたりに眼めをくばつてから、森を手まねぎした。

すり寄つた森の手へ、道順が一分銀いちぶぎんをつかませ、小鳩こばとのような眼の片方をつぶつて見せた。

「うむ、うむ」

そそくさと、供の者もつれずに門を出て行く道順の、小柄なうしろ姿を見て、

(先生、浮気かな)

森は、同情のこもった苦笑をうかべたものだ。

今日は、お保がお邦と孝子をつれ、麻布へ寺参りに出かけている。先代の命日なのであった。

池田玄竹は、道順と同じ御番医師で年齢も近いし、仲のよい「碁がたき」でもあったから、鬼婆の養母と善良な妻をあざむいて息ぬきをするときは、道順はいつも、この僚友を利用するのである。

芝・愛宕下の自邸を出た吉野道順は、露月町で駕籠をやとい、

「急いでおくれ」

まっしぐらに、京橋・浅蜷河岸にある「よろずや」という鰻屋へ向った。

筋違御門外の尾張屋という茶問屋はたしかにあるけれども、吉野道順とは何の関係もない。だから道順は、あやしみつつ、あの手紙をひらいて見たのであった。

その手紙に、こうある。

「……このでがみ、うまく、お前さまにとどくことをいのりおります。あさがしのよろずやでまっていますゆえ、ぜひぜひ、すこしもはやく、おかおをみせてくださいまし。だいにのことゆえ、すぐにもきてくださいまし。ちよ」

病弱ながら、いたって温良な妻のお邦と、道順は大婦の仲もよく暮して、孝子（うやうやしい）という女の子をもうけていた。

それはよいのだが、難点は養母のお保（おほり）であつた。お保は、下谷・新黒門町の糸物問屋、大黒屋から多額の持参金つきで吉野家へ嫁入り、先々代の道楽がたつて借金だらけだった吉野家の急場を救つたことを、いまでも鼻にかけているし、しかも癪（が）が強く、養子の道順などでは齒がたたぬ。

剛腹な養父が生きていたころは、養母を押えていてくれたものだが、いまはもう、まるでお保が一家の主（あるじ）のごとく、家庭に君臨をしているのだ。

（先生も、お気の毒にな……）

森為之助は、すこしもえらぶることのない道順の人柄（ひとがら）を好しくおもっているだけに、お保が奉公人たちのいる前でも、はばかりことなく、

「うちの跛（ひつこ）どのは、どこじゃ？」

などと、道順のことをいいたてるのに、憤慨（ふんがい）をしている。

道順は、少年のころの怪我（けが）が原因で、かるい跛をひいていたのであつた。

で……。

玄關（わき）傍の自室へ入ろうとする森のうしろから、吉野道順が急いで廊下をやつて来て、「みながもどつたなら、池田玄竹殿（けんちく）へまいつた、と、つたえておいてくれ。たのむ」「心得ました」

小男の上に、瘦せていて、才槌頭の……どう見てもばつとせぬ容貌の上に、跣をひいてゐるものだから、

「あんな、びつ、このお猿さんなぞ、まっぴらだよう—

若い妓たちには、まったくもてなかつた。もてない夜が、何年もつづいたのだ。

そして、道順がもっとも長くつづいた妓こそ、お千代なのであつた。

お千代は道順より一つ上の、初会ときは二十七歳で、これもやせぎすの、四つ五つは老けて見える顔だちで、これはもう当然ながら、あまり売れない。

もてない男と売れない妓だけに、たがいの「いたわりごころ」もわいたのか……なしんでみると、道順にとつては、

「おれを、どうやら男らしくあつかつてくれるのは、お千代ぐらいなものだ—

と、いうことになった。

父はすでに亡くなつていたし、道順は蛤町の家で、気楽な独身生活をつづけていた。縁談もなかつたわけではないが、

「女に困つてはおらぬよ—

どれもこれもことわつてしまふ、これも若い女には好感をもたれぬという自覚と経験が、こうした反動的行为になつてあらわれたのやも知れぬ。

無精な老下男の八十五郎というのを（薬籠もち—にもさせ、小さな家に住み、

「おれも若いときには、ずいふんと勉強をしたものだが……—

道順の顔色が変わるのも当然と、いうべきだろう

ちよ……お千代は、道順の子を生んだはずで、その子が生きているなら、（六歳になるはずだ。お千代も、三十六、になったか……）

駕籠の中で、道順はも一度、手紙を読み直し、青い顔で嘆息をもらした。

## 二

そのころ……。

道順は、深川・蛤<sup>はまがう</sup>町に住み、深川の漁師や町民たちを相手に開業していた。そこは亡父小村昌庵<sup>しやうあん</sup>ゆずりの土地<sup>とこ</sup>で、父は陋巷<sup>ろうこう</sup>の町医ながら腕はたしかなものだし、若いころは日本諸国の医家をまわって医術をまなび、その蓄積を、惜しみなく息子の道順へ教えつたえた。道順には兄がいる。

この兄・小村源一郎は、医者をきらって、早くから、本所・つ目に屋敷をかまえる二千五百石どりの大身旗本・鈴木四郎左衛門<sup>しろうざえもん</sup>の家来になっている。

母は、早くから亡<sup>な</sup>くなっていたし、道順が二十歳になると、父が、  
「お前にも、この道を教<sup>おし</sup>えておかねばなるまい—

と、いい、深川八幡<sup>はちまん</sup>うらの岡場所<sup>おかばしよ</sup>（官許の遊里以外の遊所）へつれて行き、女あそびの手ほどきまでしてくれたものだ。

しかし、若きころの道順、どうも、もてなかった。

(いっそ、お千代に来てもらおうか……)

と、おもいついた。

おもいついたら、独りきりなのだから、実行にうつすのは、たやすいことだ。

「あれまあ……」

きいて、お千代が、

「ほんきかえ、先生……まあ、あきれた……」

「女房しやうぼうにしても……いいよ」

「ば、かなこと、いいなさんな」

「この店の亭主うちぬしにもはなしてある。お前に足をぬかせる金は、おもったよりやすかった。それぐらいの金もちなら、亡くなった父がのこしておいてくれたよ」

「じゃあ、ほんきにほんきかえ、先生」

「そうだと。いやか？」

「いやなんて、そんな……あたしだって、もう何年も、こんなことをしているのだから、実のところ、もう体も神経しんけいも、疲れきってしまっているし……ほんきで、先生がそういって、おくんなさるのなら……ま、いってわわるいがわたりわたりに舟ふね、ゆつくりとやすませてもらえるものねえ」

「よし。きまった」

「けど、先生……」



このまま、陋巷に埋もれきってしまうのか、と、いささかさびしくもないこともなかった。そのうちに……。

八十五郎が病氣になり、間もなく死んでしまった。この老人は医者の子の下男をしていなかった、

「わしゃあ、まっぴらごめんだ」

いくら道順が診察しようとしても、頑として見せない。

急に、めつきりと弱りはじめ、

「わしが、いなくなったら、先生困るだねえ」

などと、いつていたものだが、

（まだ大丈夫……）

と、道順がおもっているうちに、呆気もなく、あの世へ行ってしまった。何かの「癌」のようなものであったのだろう。

数カ月もすると、さすがに道順も、

（これはどうも、不自由きわる）

困惑した。

そもそも、食事の仕度、洗濯などという雑事を、みな八十五郎がしてくれていたのだから、たまったものではない。

ついに……。

こうして、約一年が経過した。

吉野家への、養子のはなしがもちこまれたのは、そのころだ。

もちこんだのは、かの池田玄竹である。

玄竹は、道順の亡父・小村昌庵の医術を非常に高く評価してい、昌庵亡きのちも、息子の道順と交際を絶やさなかった。

一年に三度ほど、深川の家へあらわれる池田玄竹も、お千代のことを、まったくの下女だとおもいこんでいたらしい。

同じ御番医師の吉野家が、養子をさがしていることをきいて、玄竹はさっそくに、道順のことをはなしてみた。

すると、

「身分も何もない。それほどに診察みためのすぐれた男なら、よろこんで、わしは後つぎにした  
い」

吉野の先代が、大乗り気になったのである。

「せっかくですが、玄竹殿。どうも、それは……」

「いやかね？」

「私など、相手にされませんよ」

「いや、むすめごは、父さませだ、と……こう申しているような。考えてもみなさい。何と申しても御公儀の御番医じゃ 諸方への出入りも多く、おぬしの腕がおもいきりふるえよ

「む……？」

「夫婦にならずとも、いいんでしよう？」

「そりゃその、お前がいやなら……」

「そんなことをきちんとしなくとも、先生が出て行けというまでは、いっしょにいますよ、それで、いいのじゃありませんかえ」

「なるほどね……」

「ありがとうございます」

お千代が家へ来ると、その日から、たちまちに道順、便利となった。

お千代は娼婦あがりでも、いちおう女のすることを知って、あくまでも下女のかたちをくずさず、よくはたらいてくれる。

家の中がきちんと片づき、衣食の世話もどこおりなくしてくれ、夜になると道順の腕に抱かれる。

「そんなにお千代、はたらいて大丈夫か？」

「なあに……前のことを考えれば極楽でござんす」

お千代が、めきめきと健康を回復し、肥つてもきた。むろん、道順がお手のもので、お千代の体の悪いところを癒してやったためもあるう。

（これは……長い目で見ると、かえって安上りだな）

と道順。肉おきがゆたかになったお千代を見直すおもいで、大満悦であった。

が、先代がびしりと押えているから、

「心配はない」

と、池田玄竹もいつてくれる。

道順も肚はらをきめた。

自分の医術には自信がある。その自信をひろく世に問うことができる身の上になれることが、何よりも道順を魅了した。

「実はなあ、お千代……」

ついに、金十両をそえて切り出してみると、

「それは、ようござんした」

お千代、いささかもおどろかぬ。

「すまんなあ」

「いいんですとも。あたしこそ、お礼を申しあげなくちゃありませんよ」

「なあに、そんな、お前……」

「おかげさまで、体もすっかり丈夫になりましたし……それに先生のお子を……」

「えっ……?」

「来年、生れます」

「お前にか?」

「あい」

う」

そういわれると、道順どうしゆんもころがうごかぬでもない。

小村の家は兄がついでにいるし、養子に行ったとていつこうにかまわぬ。しかも、一介の町医にすぎぬ道順にとつては、まさに出世の階段へ一歩をふみ出すことになる。

さいわいに、お千代と夫婦になつてゐるわけでもないのだから、このほうは、いくらか金をやつて別れることに文句はいうまい。しかし、吉野家よしのけの人びとから自分が気に入られる自信はなかった。

そこで道順は、お千代にはあくまで内密にし、吉野家へ顔を見せに行ったのである。先に  
お千代を出してしまい、吉野家からことわられたのでは、たまつたものではない。

（おれも、ずるいやつだな）

道順は、くびをすくめた。

ところが……。

吉野家では、先代も、むすめのお邦おねも、道順を見、そのはなしをきき、道順でよい、と、いうことになつた。

すこし弱々しげに見えても、お邦は芳紀十九歳。とびぬけての美女ではないが十人なみのむすめだし、いかにも初々うづうしく、おとなしげだ。

（こんなむすめを、おれが妻にすることができるのか……）

道順、いささか興奮してきた。養母となるべきお保やすは、はじめから反対をしていたらしい

待っていたお千代が笑いかけて、

「よう、来て下さいましたね。お久しゅうございました」

あいさつをした。ことばつきが品よくなり、でっふりと肥った体にまもっている衣類も、こざっぱりとしている。

「し、ばらく、だね」

「ま、ここへ、どうぞ……」

「うむ」

「お酒は……あがりませんでしたね。じゃあ、お鰻うなぎを、すぐに……」

「それよりも、先まず……」

「え……？」

「はなしを、きこう」

「はい……」

「いったい、どういうことなのだ？」

「それが、ちよいと、おねがいごとがございましてねえ」

それきた……と、道順はおもった。

「あのときの、子は……？」

「生れましたとも 女の子で、いま、故郷ふるさとのお祖父ちゃんがあずかってくれているんですよ」

「まさか……」

ながい間、客をとっていた体に、そんなわけのあるはずがないとおもひ、あわてて診察を試してみると、まさに、お千代は身ごもっている。

「ふうむ……」

「大丈夫ですよ、先生。このお腹なかの中の子は、あたしひとりの子。決して世間へもらしはしません。せつかくですから、このお金、ありがたくいただきます」

「だが……」

「いいえ、いいんですよ。この子が生れりゃあ、あたしもまた生きて行く張りが出てきます」

「しかし……」

その夜は、ともかくねむったが、朝起きてみると、お千代がいない。

道順のまくらもとに、紙きれがおいてあり、道順が教えてやった「いろは」を、ようやくにおぼえたたどらしい文字で、

「ながながと、おせわさま」

### 三

そのお千代と、七年ぶりに会おうという……浅蜷あさり河岸がしの「よろずや」の二階座敷へ入ったときの吉野道順は、生きた心地もなかった。

「ほんきですから……」

お千代が、白い眼で凝<sup>め</sup>と道順をにらむ。

道順は、ふるえあがった。

お千代に乗りこまれてもしたら、幕府・御番医師・吉野家の体面はまるつぶれになってしまうし、せつかくに、自分がこれまでに得た「先代以上」の評判も水の泡<sup>かた</sup>となってしまうではないか。

「ほんとうに、のりこみますよ」

お千代が、じつとりとした口調で念を入れてきた。

「い、いつてごらん。その……その、ねがいごとを……」

「はい、けれど、他人にももらしたりなざると、あたし、お昌といっしよにのりこみます」

「わ、わかったよ、わかったから……」

「先生も、すっかり貫禄<sup>かんろく</sup>がおつきになつて……」

「そんなことは、どうでもよい。早く、いいなさい」

お千代が、にじり寄つて来て、いきなり、道順の右手をつかんだ。道順は寒気をおぼえ、

「な、なにをする」

「おしずかに……」

「む……」

と、声をひそめたお千代が、



「故郷の……」

「下総しもとうの、大綱おおあみの近くの、小百姓なんです、身よりといったら、その人ひとり」

「そうだったかね」

「名前は、先生の前のお名をいただいて、お昌まさとつけましたよ」

「ふうむ……」

「ところで……」

「金かえ。出せるだけはなんとかするが……いまの私は、その、養子のことでもあるし、ね……」

「まあ……」

お千代は、可笑おかしげに笑った。

「先生の、気が小さくなったこと」

「え……」

「このあたしが、むかしのことをたねにして、いえ、お昌を楯たてにとって、先生をゆすりにかけるとでも、おもっていなすったのですかえ？」

「ち、ちがうのか……？」

「はい。でも、このおねがいをおことわりなさるなら、あたしもお昌を抱いて、先生の御養子先へ、のりこむつもりですよ」

「おい、おい……おどしにかける気か」

老主人はもちろん、息子夫婦の気にも入られたが、とりわけ、むすめのお品が、なにごとにつけても「お千代」でなくてはおさまらず、「私がお嫁入りをするときには、お千代だけに

はついてきてもらうから」

といい、事実、その通りになった。  
お品は、今年の三月に、日本橋・通り三丁目にある「白粉紅間屋」の下村屋長右衛門方へ嫁入ったのである。

このとき、十八歳のお品につきそい、お千代も下村屋へ入った。新夫婦の仲はしごくよろしかった。

ところが、どうもいけない。

夫の清太郎は温和おとなしいのはよいのだが、母親のお政まさにまったくあたまが上らぬお千代にいわせれば、

「とんでもない甘ったれ」

なのだそうだ。

大旦那おおだんなの長右衛門は、吉野道順同様の養子で、これまた妻のお政のいうままになってい、お政は店の帳場にまで口をさしはさむ。それにくらべたら、道順の養母のほうが仕事に口を出さぬだけ、まだましだといえよう。

このお政が、若い嫁のお品を、

「いじめぬく」

「毒をもつていただきたいのですよ」

「なんと……」

「いえ、毒藥をいただくだけでいいんです。あとは、あたしがやりますから……」  
「なれど、お千代……いったい、毒を、だれに……？」

お千代が、沈黙した。道順を光る双眸つようめに見すえつつ、何か考えているらしい。道順はがたがたとふるえ出した。

「では、申しあげましょう」

「い、い、いいなさい」

「でも、きいておいてからおことわりなぞは、承知しませんよ」

「わ、わかった……わかったとも」

七年前のあのとき、お千代は道順からもらった金十兩をふところに、下総の祖父のところへ行き、ぶじにお昌を生み、しばらくしてから、また江戸へはたらきに出たのだという。

今度は、岡場所おかほしよなぞではない。

大網出身で、赤坂・一ツ木町の「御琴・三味線師」の亀屋宗八かめべ ぶちやち方へ奉公をしている者の口ききで、亀屋へ女中奉公に出たのである。

この亀屋が、お千代の身状を知って大いに同情をし、大へんによくめんどうを見てくれたらしい。

お千代もまた、一所懸命にはたらいたものだ。

考えてみたらどうだ」

「だいじょうぶです。うまくやってのけますとも」

「お上のおしらべは、きびしいよ。そんなあまいものではない」

「いったい、毒ぐすりを下さるんですか、下さらないんですか。いやとおっしゃるなら、あたしにも覚悟があります」

「おい、おい、おちつかぬか」

「さあ、どうして下されます!!」

こうなったら女という生きものは前後の見さかなくなってしまうらしい。お千代は、こども退かなかった。

「むう……」

低くうなって吉野道順、うつ向いたまま黙考することしばし、

「よし」

やがて、ちからなくなずき、

「毒をあげよう。三日後のいまごろ、このよろずやでわたそうと、いった。」

#### 四

それから三カ月がすぎた。

としか、おもえぬようにきびしくあつかう。

箸<sup>はし</sup>の上げおろしに、うるさい。若夫婦が寢間へ引きとつてから、急にすかずか入つて来て、清太郎をよび、自分の寢酒の相手をさせたりする。どうも異常だ。目にいれても痛くなかつたひとり息子を、お品にとられたような気がして居たたまれないらしい。

清太郎も母のいうままになっているのだが、さすがに、たまりかね、先日はずい、母へ喰<sup>く</sup>つてかかつた。そのときはもう大さわぎになり、当りどころがないお政は、ことごとにお品へあたりちらす。

これを見ていてたまらぬのは、ほかならぬお千代である。

だが、なんといつてもこちらは一人きりだ。

いっそ離縁になつてしまえばよいとおもうのだが、お品は夫の清太郎がきらいなのではない。

「死んだつもりで、しんぼうする」

お品がそつと、お千代にささやき、なみか涙をふいたりする。忠義のお千代が見ていて、たまつたものではない。

（こうなつたら、毒をもつてやる!!）

ついに、お千代はおもいきわめた。

そこでおもいついたのが、吉野道順のことであつた。

「ばかをいいなさい。もし、わかつたら、お前はただじゃあすまないのだよ。お昌のことを

肥つていた体が、半分ほどにやせてしまい、

「いったいお千代。どうしたの……お前が、そんなふうだと、こころ細くて仕方かない」  
お品は、氣をもむばかりである。

「なんでもございませんよ」

こたえはするが、このごろのお千代は食欲もなくなつてくるし、頭痛はするし、体力もめつきりとおとろえてきて、

「あんな女は、実家へ帰しておしまい」

などと、お政が嫁のお品にいい出しはじめた。

すでに、文化二年の年が明けている。

お品も、義母のあつかいにたまりかねてきているのだけれども、夫・清太郎が、それでも懸命に、束の間の二人きりの時間になぐさめてくれるので、どうにか辛抱しているのだ。

それに現代とちがい、百六十年ほど前のそのころは、いかに年齢が若くとも「出も二、三女」の身になることは、女としての人生を捨てることになる。

がまんがまんをかさねてきている若いお品を見ると、お千代は、

「ああ……まだ、毒が効かないのか……早く、もう、あの鬼婆が死んでくれなくてはお、お嬢さんがたまつたものじゃあない……それにしても、私は、こんなに体が弱つてしまつて……」

それでも必死で、床へもつかず、お品の部屋につめていて、こころへあらわれるお政へ、例

下村屋の内儀・お政は、まだ死なぬ。

相変らず元気で、若い嫁をいびりつづけているのだ

（こんな、はずはない。もう効目<sup>ききめ</sup>があらわれてもよさそうなものだけれど……）

お千代は、気が気でなかった。

三カ月前に、吉野<sup>よしの</sup>道順は白い水薬を出し、

「急に死んでしまつては、お前にうたがいがかりかねない。だから、ゆっくりとやんなさい。この毒薬を、毎日すこしずつ、そのおふくろさんへのませるのだ。茶をのむときにそつと一滴、たらしこんでやれ。すこしずつ、体が弱つてきて、やがて死ぬるよ。これなら、だれにもわからぬ、と、おもう」

「ほんとうですか」

「あ……ほんとうだ」

道順が、なま<sup>なま</sup>つば<sup>つば</sup>をのむようにしてこたえた

お千代は、それから、日に一度はかならずお品の部屋へあらわれ、よくもたねがつきないほどに訓戒をたれるお政へ、茶をさし出すとき、道順からもらった毒薬の一滴を茶わんへたらしこんだ。

お政は気づかずに、のんでしまふ。

気の強いお千代も、毎日、毒をたらしこむ緊張と、憎いお政の死を待つ神経<sup>しんけい</sup>の疲れが三カ月もつづいてゐるのだから、すっかり憔悴<sup>しょうすい</sup>してしまつた。

近頃ちかごろの吉野道順は、

「人柄ひとがらもよし、見たてもすぐれている」

との評判へうばんが高く、池田玄竹いけだちんちくなども、

「あと五年もすれば、かならず奥御番医にとりたてられよう」

と、いつてくれている。

そうなれば、役料も二百俵となり、將軍家の侍医ということになるのだし、外出時の駕籠かには、侍、挟箱はささん、薬箱から長柄持ながえちなど、十人もの供がつく。

位も法眼ほうがん、法印ほういんという高位にのぼり、何から何までがちがつてくるのだ。

お千代が、まだ見ぬわが子のお昌をつれ、吉野家へ乗りこんで来たなら、そうしたもののいつさいが消えてしまうことになる。

去年のあのとき（よろずや）の二階で見たお千代の途みちにおもいつめた様子からおして、（お千代なら、やりかねぬ）

吉野家へ養子に来るとき、別ればなしをもち出され、しかも道順の子を腹に宿しながら、淡々と消え去ったお千代であるだけに、道順は、

（怖い……）

のである。

あの日……。

三日後を約して帰邸した道順の心境をありようにいえば「一時のがれの約束」であった



の薬をたらしこんだ茶を出すことをやめない。

日に一滴ずつなのだが、もう残り少なになってきていた。

（ああ、もう無くなる。どうして、効かないのか……ともかく、もう一度、先生にお目にかかり、毒ぐすりをもらっておかなくては……）

そのときはお千代、また浅蜷河岸（あさりかし）の「よろずや」へ行き、店の若い者に堅気の風体をさせ、吉野道順へ手紙をもたせてやるつもりだ。茶間屋の尾張屋（おわげ）の名をつかったのは、尾張屋が、この下村屋の親類すじであることからおもいついたまなのである。

いっぽう……。

吉野道順も（気が気ではない……）毎日を送っていた。

ともかく、お千代に、

（ここへ乗りこんで来られては、たまったものではない）のである。

下村屋の鬼婆にくらべたなら、こっちの鬼婆のほうが「毒殺」を考えたこともないだけ、まじだともいえるし……それに、妻のお邦と、四歳になるむすめ・孝子（たかこ）は、いまの道順にとって、かけがえのない「たからもの」なのである。こっちの鬼婆は口やかましくとも金銭の出し入れには目がうといし、道順がたまさかに「かくれあそび」をするほどの小づかいに困ることはない。

さらに……。

「道順どの。体をくれぐれもたいせつにして下され。池田玄竹殿に診ていたたいらいかがじゃ」

部屋へ見舞ってくれる声も、やさしい。

これは何も、道順に愛情がわたたのでも何でもなし。道順の評判がよいのは鬼婆どのも知っているし、いまここで道順に死なれては、後つぎの子もない吉野家は「御番医」の御役御免となってしまう。養子の道順はさておき、むすめや孫の幸福をおもえば、道順に死なれては困るのである。

## 五

その日——文化二年二月二十日の昼下りのことであつたが……

例によつて、下村屋の若夫婦の居室へ姑のお政があらわれ、折から夫の着物を縫っているお品へ、そばから口うるさく指導をはじめた。

「うちの清太郎へ着せるつもりなら、もちつと、お針修業の仕直しをするがいい——にくにくしげにいいはなつたとき、次の間から、お千代が茶をはこんであらわれた。いうまでもなく、例の毒薬……が、たらしこんである。」

鬼婆の毒口をきいたばかりだから、茶をさし出すお千代の顔色が変つていた。すると、これを見とがめたお政が、

「なんだえ、その目つきは……」

しかし、怖い。

考えあぐねた結果が、毒にも薬にもならない白い水をつくり、

「これを気長に一滴ずつ、たらしこめば、しだいに体が弱って死ぬるよ」

もったいぶったうそをつき、お千代にわたした。

（あれから、もう三月……つまらぬ白い水も無くなるころだが、ほんとうにお千代、あの水を鬼婆の口へ……）

あれから、何のよび出しもかからぬのが、道順にはいつそ無気味でならない。いくらのもせたとこで、単なる白い水なのだから害にはならぬのはわかつていけるけれども、お千代が一滴、二滴とたらしこんでいるところを、その下村屋の鬼婆がもしも見つけたら、

（大変なことになるぞ、これは……）

あやしまれたお千代にお上のお調べがとどけば、

（私のことも、お千代は白状してしまうだろう。そうなれば……）

お千代に乗りこまれるより、もっと大変なことになる。毒をわたしたのでもないのに、むかしの情婦をつかつて下村屋の内儀を毒殺せんとした嫌疑はまぬがれぬ。

（ああ、もう……どうしたらよいものか……）

吉野道順もまた、このごろは、めっきりとやつれてしまった。ひまさえあれば床についている。

それを見て、吉野家の鬼婆どのの態度が、がらり変った。意外なことではある。

うにして突き込んだものである。

「ぎゃあつ……」

お政が、すさまじい悲鳴をあげて、仰向けに倒れる上へ、のしかかったお千代が、  
「畜生、畜生、畜生……」

おそろべきちからで、鋏を柄のところまで突き入れていった。  
お品が、気をうしなつた。

物音をきいて、清太郎はじめ店の者が駆けつけたとき、すでに息絶えた「鬼婆」の体への  
しかかったまま、お千代も息絶えていたのである。烈しい怒りと昂奮が、おとろえていた彼  
女の心ノ臓のはたらきを急速にとめてしまったらしい。

庭先から、惨劇のおこなわれた部屋ひばりの畳へ、春の陽光がやわらかくながれ入っており、空  
のどこかで、ほがらかな雲雀のさえずりがきこえていた。

○

この騒動は、江戸中の評判になった。

同情は、お千代のみへあつまつた。

殺されたお政の葬儀は、下村屋の身代にかけても盛大におこなわれたが、通夜のときには、  
店先に酒樽さかだるをつみあげ、飲みほうだいにさせ、お政の棺の前では、さすがにつつしんだけれ  
ども、夜がふけるにしたがい、大戸をおろした下村屋の中で、大旦那の長右衛門が、ついに

今度は、矛先<sup>ほこさき</sup>をお千代へ向け、

「ものを食べさせずにおきはしまいし……なんだえ、その幽霊<sup>おはけ</sup>のような顔つきは」  
ぐいと、茶わんをつかみとつて、

「この女、私への面<sup>つら</sup>あてに御飯<sup>ごぜん</sup>も食べないのか」

いうや、茶わんの中の熱い茶を、いきなり、お千代のやせおとろえた顔へ打ちかけたものである。とても大店の内儀<sup>おおだん</sup>がなすべき所業ではない。

「あつ……」

お品が、悲鳴をあげた。

異様な叫びを発して、お千代が突立ったのは、このときである

その小火鉢<sup>こひばち</sup>の灰に、お品がいま裁縫に使っている鋺<sup>こて</sup>がさしこまれてあった  
いきなり、お千代が、この鋺の柄<sup>え</sup>をつかんだ。

「何をする」

お政がうろたえて腰を浮かせたのと、

「お千代……」

お品が両手をさしのべるように上体を泳がせたのが同時であった。

「畜生!!」

と一声。

飛びかかったお千代が、熱く灼<sup>や</sup>けた鋺を両手に持ち、お政の胸もとへ、体ごとぶつかるよ



たまりかね、

「いや、めでたい。おお、めでたい」

酒に酔って踊りはじめたというから、いかに下村屋の上から下まで、お政の死をよろこんだかが知れようというものだ。

お上の、この事件に対する裁きは、双方の〔死損〕<sup>しにぞん</sup>ということ、遺族たちへは累をおよぼさなかった。

むろん、お千代が、かの白い水を用いたことなどは判明するよしもない。

お品と、お品の実家の嘆きはいうまでもあるまい。

お品の実家亀屋宗八は、下総からお千代の祖父と、お千代の子のお昌を引きとり、お昌は、お品の兄夫婦の養女として育てられることになった。

その翌年の夏の或る日。

すっかり、亀屋での暮しにもなれたお昌が、近所の氷川明神の境内で、同じ年ごろの友だちと遊んでいるのを、遠くからながめていた品のよい、小柄の、いかにも高名な医家と見える服装の男が、かるい跛をひきながら近寄って来て、

「亀屋さんの、お昌ちゃんかえ？」

やさしく、声をかけた。

「ハイ」

「いくつ？」

伊勢屋の黒助



「それにはおよばぬ。おじさんは、急ぐのでね」

「でも、おじさん……なぜ、泣いているの？」

「泣いちゃあ、いない。よろこんでいるのだ。これがその、うれしなみだというものさ」

も一度、お昌のあたまを撫でてから、跛の医家は、蟬か鳴きこめている境内の木立の中へ、何度もお昌をふり返りつつ、消えて行った

〔小説新潮〕昭和四十四年十二月号）

「おれほど気楽な男は、この世に二人といめえ」

などと、これまでは大威張りでいた弥吉も、病気の床についてみると、

（ひとり暮しの長わずらいが、こんなに、心ほそいものとは知らなかった……）

しみじみとわかったが、すでにおそい。

長年の、わがまま勝手で不規則な暮しが、いまになってたまったものか、弥吉は全身の力がぬけきってしまったような虚脱感に身をまかせるのみであつた。

金は、一文もない。

だから医者も来てくれぬし、薬を買うこともできない。

長屋の連中も、このごろでは弥吉を見はなしてしまい、

「近いうちに葬式を出さなくてはなるまい」

などと、うわさしている。

重湯ぐらいはつくってくれる親切はあつても、長屋の人々はいずれも弥吉同様のその日暮しなのである。とても、これ以上の、

「めんどろは見きれないよ」

と、いうことになるのだ。

（ああ、金がほしい……）

魚売りの弥吉は、幽霊のようにやせおとろえた<sup>つかう</sup>骸をもたえさせ、

（まだ死にたくはねえ……金がほしいなあ。金さえありゃあ、医者にもかかれるし、薬も買

（ひよつとすると、このまま、あの世へ行っちゃうかも知れねえ）

深川・蛤<sup>はまご</sup>町の裏長屋に、間きりの家の中で、魚屋の弥吉<sup>やきち</sup>は、もう一月も寝たきりであつた。

梅雨の最中のある日、ふりつづく雨にくさくさしてしまい、弥吉は、あんまりよくない友だちから金を借り、大酒をのんだ。

魚屋といつても、ちゃんとした店をかまえているわけではなく、三十五のこの年齢<sup>とし</sup>まで女房<sup>はう</sup>をもらつたことのない、いわゆる棒手振<sup>ぼうてふり</sup>の弥吉なのである。

朝くらいうちに河岸<sup>かみ</sup>へ出かけて魚を仕入れ、天びん棒で荷をかつぎ、町をまわって売り歩くしがない渡世であつたから、病氣になつてしまつたのでは、まったくのところ、

「鼻血も出ねえ」

ことになつてしまうのだ。

その夜の大酒がたたたり、腹をこわし寝こんだのがもとで、弥吉は起きあがれなくなつてしまつた。

女道楽は気もないのだが、博打<sup>ばくち</sup>と酒にうつつをぬかし、かせいだ金は一文ものこらない。親兄弟も女房子もいるわけでなし、

「あ……？」

弥吉の目が、張りさけんばかりに見ひらかれた。

「こ、小判じゃあねえか……？」

おもわず、弥吉は口走っていた。

まくらもとに反古紙からはみ出した小判が三枚、たしかに置かれてある

（ゆ、夢じゃねえのか……？）

足をたたいたり、頬をつねってみたりしたが、三両の小判は消えなかった

当時の三両といえ、現在の実質的な価値に直して十五、六万円に相当するであろう

「ゆ、夢じゃあねえ、夢じゃあねえ」

弥吉は三枚の小判に頬ずりをしながら、ぼろぼろと泣き出していた。

## 二

夏が、すぎようとしていた。

魚売りの弥吉は、どうにか起きられるようになった。

弥吉は杖にすがり、二月ぶりで外に出た。

本所・松坂町一丁目に「伊勢屋久兵衛」という紙問屋がある

弥吉は、この伊勢屋の台所へ新鮮な魚を担いで行き、よく買ってもらった。弥吉にとって、は上得意なのであった。

える……)

たまらない気もちであつた。

梅雨が明けると、一時に暑熱がきた。

その暑さが、弥吉をさらに衰弱せしめた。

(も、もう、いけねえ……)

ある夜。

ほとんど失神状態のねむりにさそいこまれつつ、

(明日、おれは死ぬ。ちげえねえ、きつと死ぬ……)

おもいながら、いつしか意識をうしなつていった。

弥吉がめざめたのは、翌日の夕暮れであつた。

しきりに、のどがかわいている。

(ま、末期の水か……)

のどのかわきに、たまりかねた。

弥吉は、まくらもとの茶わんに手をのばした。

(み、水……水がのみてえ)

その一心で、弥吉は渾身こんしんのちからをふるって、半身を起し、まくらもとの茶わんを、もう

一度手にとつた。

そのときであつた。

と、弥吉が下女のおなかにきいた。

黒ちゃん……すなわち「黒助」である。

黒助は、もう二年ほど伊勢屋で飼っている雄猫であつた。まっ里にやせこけたこの猫は、あまり人にもなつかず、どんよりとした目つきの、いかにも不器量な猫で、伊勢屋のたれもが、

「こんなかわいげのない猫もめずらしいよ」  
相手にもしない。

ただ、久兵衛の孫で七歳になる文太郎が、「黒助」をおもちゃにしてあそぶ。いやがる猫を追いかけまわし、地面へたたきつけたり、線香の火を尻尾につけたりしておもちゃにする。かわいそうにな、黒助も……さぞかし逃げてしまいでえところなのだろうが……かといつて、ほかの人が、あんなにまずい猫をひろってくれるわけもねえ。黒助め、そいつを自分でもちゃんと知っていやがるのだ。だからよ、しーんとがまんをして伊勢屋に辛抱をし、おまんまを食わせてもらっているにちげえねえ。

なんとなく、弥吉もあわれになり、伊勢屋へ来るたび、

「黒や、こつちに来ねえ」

勝手口の隅で、そつと黒助へ魚の切れはしを食べさせてやることになつてしまつた。

黒助も、そうした弥吉のところがわかつたのか、弥吉があらわれると、いこからこもたふ、

それというのも、伊勢屋の主人・久兵衛はなかなか口をおこつていて、弥吉が行く、みずから台所へあらわれ、魚の品さだめをする。それだけに弥吉としても商売の仕がいのある旦那であつた。

その朝。

弥吉は河岸へ行き、一尺余の鱸ササギを買いもとめ、ほかに小魚も少しもとめて、それを手みやげに、伊勢屋へ出かけていった。

（伊勢屋の黒助め、どうしているかな……）

弥吉の顔に、なつかしげに微笑がうかんだ。

「お前、ずっと姿を見せなかったじゃあないか。いったい、とうしなすつた？」

伊勢屋久兵衛が台所へ駆けあらわれ、

「お前が来ないので、私はこのごろ、まずいものばかり食べさせられているのだよ」と、いった。

「申しわけもございません。ずっと、患うづつつておりましたので」

「そうかえ、それは知らなかった。なに……この鱸を私にくれるというのかえ、そりやあじうも、すまないねえ。ふむ、これはどうも、みごとな……」

「洗いにでもして下さいまし。塩焼きにしても、うもうござんすよ」

「うむ、うむ……」

「ときに、黒ちゃんは、どこにいますかね？」

「するとだよ。また二日ほどして、あの猫が小判をくわえ出すのを見つけた。そのたびに手ひどくしかりつけたらしいが、いっこうに、こりないのだね。また二度、三度と、帳場へ来ては小判をくわえ出すのだ。これはきつと前になくなった三両も、黒助の仕わざにちがいない。どうもけしからぬ猫だ。商人の家に、こんな猫を飼っていたのでは縁起がわるいというのでね、由蔵が棒でなぐり殺してしまったのだよ」

弥吉は、ものもいわずに外へ飛び出して行った。

「どうしたのだ、あの魚屋。まっ青になって、ぶるぶるふるえて……」

「だんなさま。弥吉さんは黒助と仲よしだったんでございますよ」

「へへえ……」

「ですから、きつと悲しくなったんでございましょう」

「へへえ……」

しばらくして、弥吉がまたあらわれた。

弥吉は、わなわなとふるえる手につかんだ一枚の反古紙を伊勢屋久兵衛の前へさし出し、  
「こ、これを見て下さいまし。私あ、字が読めねえ。ね、旦那。その紙に書いてある字に、見おぼえはございませんか?」

「どれどれ……あっ……こりゃ、私が書き損じたものだよ。どうしてこれが……」

「その紙に、小判が三枚つつんであったんでございます」

「なんだって……?」



かならず姿を見せたものだが……。

（おれが来たっていうのに……黒のやつ、どこにいやがるのか……）  
入ってきたときから気になっていたのである。

下女のおなかは、事もなげに弥吉へいった。

「あんな猫、死んじまいましたよ」

「へえっ……病氣をしたので？」

すると、主人の久兵衛が、

「うちの手代の由蔵よしぞうがね、殺してしまったのだよ。由蔵は、ちよいとらんぼうな男だし……  
それにさ、あの猫も悪いことをしたのだ」

### 三

「ま、こういうわけなんだよ、弥吉さん」

と、伊勢屋久兵衛が語りはじめた。

「そうさね、一月も前だったか、昼間のうちに、店の帳場から小判が三枚、どこかへ消えてしまつてね。帳場にいる番頭さんも、どうにもおぼえがないというのだよ。さ、ところがだ。それから三日ほどして、あの黒助がなんと帳場から小判を一枚、くわえ出すのを小僧が見つけたものだ」

われ知らず、弥吉は蒼あおざめていた。

久兵衛は、その後も黒がくわえ出しただけの小判を弥吉に貸してくれた。  
弥吉は、伊勢屋の裏の草地に埋めこんであつた黒助の死体を掘り出し、これを本所の回向院へほうむつた。

三年後……。

弥吉がたてた黒助の墓には、法名が、

〔徳善畜男の霊〕と、きざみこまれていたそうなの。

そのころの弥吉は、おきぬという女房をもらい、男の子が生まれていた。  
その子の名は、

〔黒助〕

〔山形新聞〕昭和四十五年八月十六日号

「そして、それを私がねむっている間に、まくらもとへおいていつてくれた人……いいえ、その恩人は、猫。まさしく黒助に、ちがいません」

弥吉が号泣した。

「そ、そんな……」

ばかな、といいかけた久兵衛も、何度か小判をくわえ出した猫を、その目に見ているのだ。「その三枚の小判で、私あ、医者にみてもらい、薬も買えました。へいへい、私あ、黒ちゃんにいのちを助けられたのでございます」

弥吉はすべてを語った。

伊勢屋久兵衛夫婦も、まっ肯になり、おろおろと顔を見合せるばかりであった。そのうちに……。

久兵衛夫婦も、弥吉の涙にさそわれ、

「そ、そうとしかおもえない……」

「ほんとうに……猫は恩知らずなぞといわれますけれど、あの黒がねえ」

「ひどい目にあわせてしまった……」

「さっそくに供養くようをしてあげなくては……」

「そうしなさい、そうしなさい」

病みあがりの魚屋弥吉は、鱸をみやげに伊勢屋をおとずれ、これからはたらくための、魚を仕込む元手を借りるつもりだったのである。

内<sup>ない</sup>

藤<sup>とう</sup>

新<sup>しん</sup>

宿<sup>しゆく</sup>



ま、家康をまねいて、

「徳川殿に、これからの関東をおさめてもらいたい—

と、切り出している。

家康は、言下に承知した。

年少のころから、血みどろの戦闘をくり返し、苦心の経営をつづけ、ようやくに一わがものとした三河・遠江・駿河など実りゆたかな領国を秀吉へわたし、そのかわりにまた草深かった江戸に本拠をかまえて引き移ることを、徳川の重臣たちは、なかなか承服できなかった。

秀吉は、家康のちからをもっとも恐れていた。

ゆえに、めぐまれた東海の領国から追いのけ、関東という新領国の経営をさせて、家康のちからを殺ぎ、合せて、京・大坂から遠去けようとした、という説は、そのまま信じてよいだろう。

家康は、なにからなまでに新しくやり直さねばならぬ

だが家康は、黙々として秀吉の命令にしたがった。当時の家康は、まだ五十そこそここの年齢であつたし、新天地の開発に、むしろ意欲を燃やしたといわれている。

ともあれ、このときに江戸の発展が約束された。現代の新宿の繁栄もこれにつながるころになる。当時の歴史が生まるましい人間の活力によってうごき、その影響が、まだ現代に尾を引いているのかとおもえば、その残映をのぞむ最後の地点に、私どもが生きていることを

## 一

〔新宿〕は、江戸郊外の一宿駅であつたが、江戸が東京とあらたまり、日本が近代国家としての歩をすすめはじめてからも、尚、郊外の町にすぎなかつた。

明治四十年に発行された吉田東伍博士の名著〔大日本地名辞書〕は、  
「内藤新宿は人口九千。府内四谷区の西に連続し、甲州街道ならびに青梅街道の交會にあたる」

と、記している。

現代の、われわれが見る新宿のすさまじいばかりの変貌とメカニズムを、このとき、だれが予想し得たろう。現代の新宿は東京の副都心になつてしまつた。

それにしても……。

とくがわいえず  
とよとみひよし

徳川家康が、豊臣秀吉によつて関東へ封ぜられたとき、その居城を江戸へ定め、先ず、いまの新宿一帯の地へ注視の眼を向けたことはおもしろい。

てんしょう  
天正十八年（一五九〇年）七月。

さがみ  
豊臣秀吉は、相模・小田原城の北条父子を討滅し、ここに文字通りの天下統一を成しとげ

た。

ここに、北条家の支配下にあつた関東の地も秀吉のものとなつたわけだが、秀吉はすぐさ

布・赤坂を経て、末の下刻（午後三時）ごろ、貝塚（現・麴町平河町）のあたりで食事をしたのち、江戸城へ入ったといわれる。

遠山景政の城といっても、景政は長らく小田原城へたてこもっていたし、城の外廻りの芝土居もくずれかかり、屋根板が腐って雨もりがする始末なので、重臣の本多正信が、見るに見かねて、

「これでは、関八州をおさめらるる二百五十万石の大名の御城とおもえませぬ　せめて玄関まわりのみにても普請をなされまいては……」

と、いい出すや、家康は事もなげに、

「いらざる立派だてじゃ。わが住む城をととのえるより先に、することがいくらかもある」  
笑って、とり合わなかったという。

徳川家康は、ことに辺幅をかざらぬ人だったけれども、戦国時代の大名というものは、およそ、このように質素な生活をしていたのである。

家康入国当時の江戸は、現代の品川駅から田町・浜松町・新橋にいたる国電の線路のあたりまで、海であった。

江戸湾は、日比谷から江戸城の真下まで入江になって侵入しており、平川にかかる日本橋のすぐ近くへ、海がせまっていた。

城下町というより茅野原の寒村といってもよいほどで、現在の佃島や石川島も、入り海のはるか彼方に浮かんでいたのである。



あらためて想わざるを得ない。

小田原が落城したのは、七月十日であるが、家康は早くも八月一日に江戸へ入った。この日は、いわゆる「八朔の吉日」であって、現代の八月三十日にあたる。そのころの江戸は、

「……東の方の平地の分は、ここもかしこも汐入の茅原にて、町屋侍屋敷を十町と割りつくべき様もなく、さてまた、西南の方は平々萱原武蔵野へつづき、どこをしまりというべき様もなし」

と、ものの本にあるように、かつては太田道灌の城下町であり、家康が来るまでは遠山景政が北条の城代として入っていた江戸城ではあるが、

「……町屋なども茅ぶきの家が百ばかりあるかなしかの体、城もかたちばかりにて、城の様にもこれなく……」

というありさまであった。

小田原落城から間もないことだし、北条家や関東方の残党が江戸周辺に蠢動することを考へ、徳川家康は、譜代の家臣・内藤清成に、甲州街道すじを、

「きびしく、かためよ」

と、命じた。

同時に、青山忠成をもつて、厚木大山道（青山通り）を警備させたのである。

家康が江戸入城の日は、初秋の空が青々と晴れわたり、家康は上きげんで、品川から麻

清成も年少のころから家康の小姓となり、のちには、二代將軍となつた秀忠の侍臣となつた。このとき、青山忠成も秀忠づきの侍臣になっている。

そして家康が江戸へ入るや、江戸の背後をかためる重要地点に、内藤・青山の両氏を置いたところに、いかにも家康らしい思慮が見られる。やがては二代將軍となるべき息・秀忠の傍近くにつかえた内藤・青山の二人を特にえらび、それぞれに広大な土地をあたえて、警備をまかせる。こうした細やかな配慮は、豊臣秀吉もおよぶところでない。

当時、内藤清成は五千石ほどの旗本で、その身分にくらべて、あたえられた土地はあまりにも広かつた。これほどの邸宅地をもらつた人は、徳川の家臣で内藤清成ひとりといつてよい。

清成は、家康の江戸開発がすすむにつれて身分も上り、秀吉の朝鮮出兵のころには従五位下・修理亮に任じ、本多正信と共に「関東奉任」の要職に就いた。

そして、秀吉が亡くなり、関ヶ原戦争に勝利をおさめた家康が、いよいよ天下統一に乗り出さんとするとき、内藤清成は、万六千石の加増をうけ、合せて二万一千石を領した。

清成の拝領したころの新宿は、俗に「関戸」とよばれたさびしい草原にすぎなかつたが、内藤氏の屋敷が構えられてより、おのすから、その周辺に聚落を為し、甲州街道を往来する旅人のための旅舎や茶店がたちならぶようになったのである。

当時、現在の新宿四丁目一帯から、一、二、三丁目の大通りにかけても、内藤氏の屋敷内であつた。

さて……。

家康は、江戸入国にさいして、甲州街道すじを警備した内藤清成に、

「そちが乗った馬が、一息に走り廻っただけの土地をつかわそう」

といったので、清成は愛馬に打ちのり、いまの新宿御苑の傍にあった榎の大樹を中心にして疾駆したが、一周して多ると、馬は泡をふいて転倒し、息絶えた

家康は約束どおりに、内藤清成が一周した土地をあたえたというのだが、これは説話であらう。

しかし、家康が内藤氏にあたえた土地は、東は四谷、西は代々木、南は千駄ヶ谷におよぶ広大なものであった。家康の内藤氏へかけていた信頼の厚さが、これをもって見ても知れようというものだ。

## 二

内藤清成の祖父・甚五左衛門は、家康の父・松平広忠につかえ、広忠横死の後、創成期の徳川家と苦楽を共にし、武功が大きかった。甚五左衛門の四男・忠政は年少のころから家康の傍近くにつかえ、寵愛が深かったといわれる。武勲もあつたが、それよりもはなはしい戦場の舞台の蔭にいて、いろいろと家康を補佐してきたものらしい。

忠政の子は女ばかりであつたので、武田宗仲の子・弥一郎を養子に迎えた、これが内藤清成なのである。

かれ、新宿も、成木・青梅の両街道をふくみこむ要衝となった

現在の四谷見附に「大木戸」が設けられ、番小屋を置いて旅人の通行を取締つたのは、家康が大坂城に豊臣の残存勢力を討ちほろぼし、名実ともに、

〔天下人〕

となった元和二年であつたが、そのころは大木戸の西方は、まだ内藤氏の領地になつていて、民家も、あまり無かつたといわれる。

土地の名も、まだ「新宿」とはよばれていない。

俗に「内藤宿」とよばれていた。

だから、新宿が甲州街道の宿駅の一つとして繁昌の第一歩をふみ出したのは、前にのべた元禄十一年に内藤氏が領地の一部を幕府に返上してからのことなのである。

内藤氏が甲州街道すじの領地を返上したことは、徳川幕府の政治体制が完全にこのえられたことを意味する。かつては見張り櫓を立てて、この土地を警備していた内藤の任務も、ここに解かれたかたちになった。

そのとき、浅草・阿部川町の名主で高松喜兵衛はじめ、浅草の有志五名が、街道すじへ、

〔宿場設立〕

のねがいを幕府へ申請し、これがききとどけられた

喜兵衛たちは、五千六百両という莫大な金を幕府へおさめ、街道すじの利権を得たわけだが、この大金、現代の十何億円にもあたろう。

だが、後年になって、元禄十一年に、内藤氏は、領地のうちの七万九千余坪を幕府へ返上している。

そのころの内藤氏は、信州・高遠城主として三万三千石の大名となっていて、藩主は内藤清枚であった。

内藤氏の江戸藩邸は、本邸ともいうべき上屋敷が神田の小川町にあり、下屋敷（別邸）は下渋谷にあった。だから新宿の宏大な屋敷は（別邸）ということになる。  
ところで……。

徳川家康が何故に、新宿の地を当初から重要視していたかという点、もしも敵が江戸へ攻めこんで来た場合は、甲州口を退路の一として考えていたからである。伊賀の忍びたちの組屋敷にまもられた江戸城・半蔵門は、まっすぐに四谷見附へ通じ、そのまま一本道となって新宿から甲州街道へむすばれているのだ。

家康は、慶長八年に「江戸幕府」をひらき、天下の政治をとりおこなうことを声明すると共に、五街道を定め、一里ごとに一里塚を築かせた。

江戸から、新宿追分へ出て、府中、八王子、大月、甲府へ至る三十四駅をさだめ、甲州街道が五街道の一つになったのはこのときであった。

当時、江戸からの第一の宿駅は「新宿」ではなく「高井戸」である。甲州街道の道幅約十一メートルで、その折、第一の一里塚が新宿の追分に築かれた。

家康の江戸開発は、目まぐるしい速度ですすみ、江戸市中はもとより、諸方に街道がひら

ぜられた。

そのときの説話に、こんながある。

四谷に住む四百石の旗本・内藤新五右衛門の弟で大八という者が、大への道楽者であつて、夜な夜な新宿の飯盛女を買いに出かけた。

大八は五尺そこそこの小柄な男なのに六尺の大刀を腰へさしこみ、鯨雪駄をはいて新宿を闊歩していたが、或夜、飯盛女と口争いをしたことから、土地の無頼どもにかこまれて袋だたきにされてしまった。

徳川將軍の家臣の弟として、これは、まことに不名誉きわまることである。

兄の新五右衛門は、弟大八に、

「腹を切れ！」

と命じ、大八の首を切り落し、これを大目付の松平凶書頭のもとへさし出し、

「かくなる上は、わが家の知行を將軍家へ返上つかまつる。そのかわりに、新宿の宿場をとりつぶしていただきたい。それでなくては、天下の旗本の意気地がたち申さぬ」

と、申したてた。

幕府が、新宿を廢駅にしたのは、このためであつたというのだが、これも説話にしておいたほうがよからう。

内藤新五右衛門は実在の人物だが、新宿を領した内藤氏とは関係ない。彼は四百俵の旗本であつて、幕府の御役をいろいろとつとめ、享保二年に病死をしている。

喜兵衛たちは、いまの新宿一、二、三丁目の道すじの両側に家をたてならべ、さまざまの商人が店をひらいた。

ここに、甲州街道の第一駅としての「内藤新宿」が生まれた。内藤は内藤氏の領地だったところのおもかげを残し、新宿は、「新しい宿場」

という意味である。

### 三

こうなると「新宿」のにぎわいはたちまちに、東海道の品川、奥州街道の千住、中仙道の板橋と共に「江戸四宿」とよばれるほどになり、他の三宿同様、私娼（しちゆう）でもあるの売春地帯としても有名になってしまった。

四宿の中では、新開地だけに新宿の飯盛女の客引きが、

「目にあまるもの……」

だと評判されたほどである。

もつとも、江戸四宿の飯盛女は、私娼ではあるが幕府公認のかたちであつて、私娼の取締りがきびしいときにも、四宿には手入れがおこなわれなかったそうなの。

四宿から種々なかたちで幕府へ入る収益も、なみなみのものではなかったにちがいない。だが、内藤新宿は設立されてから二十年目の享保三年に、突如として、幕府から廃駅を命

宿場女郎というべきであろう。

こうして〔内藤新宿〕は、甲州街道の宿駅であると同時に、一種の遊廓（ゆうかく）として発展しつづけて行くのである。

宿場の南、内藤家・中屋敷の前には玉川上水がながれ、年ごとにふくらむ江戸市民の飲料となり、用水となった。玉川上水には宿場女郎の投身自殺が絶えなかったという。

こうして、繁栄のうちに〔新宿〕は、幕末時代を迎え送り、明治維新の変動後は、明治新政府によって、

〔武蔵県知事〕

の所管となった。

明治二年には、なんと〔品川県〕となり、廃藩置県の後、新宿があつた武州・豊島郡（とよしまぐん）は、東京府の所管に移された。

そのころの新宿は、遊女屋二十、遊女三百七十五人、芸者三十人を擁して、依然、東京近郊の遊里としてにぎわっていたのである。

四谷見附から新宿三丁目に至る道すじの両側には、これらの妓楼（きろう）が軒をつらね、その間に種々の食物屋が点在し、宿場の北側はこんもりとした木立や田畑がつらなり、南側は、旧内藤屋敷の木立がひろがっていた。

政府は、明治十八年に、日本鉄道の〔新宿駅〕を設けた。信越線と東海道線をむすぶ拠点として、ここに、現在の山手線が開通したわけだ。



新宿が廃された享保三年には、この世の人ではなかったわけだ。

この説話は、岡本綺堂<sup>おかもときどう</sup>によって、

〔新宿夜話〕

のタイトルのもとに戯曲化され、昭和二年に市川左團次が初演して大好評を博し、その後もたびたび上演されている。

芝居では、弟・大八のために家を捨て、一介の旅僧となった内藤新五右衛門が、のちに新宿をおとずれて、むかしの事件をしるぶところがラスト・シーンであった。

新宿が宿駅として再開されたのは、安永元年の四月であるから、五十四年間も廃駅となっていたのだ。この点においても、内藤兄弟の事件はつじつまが合わないのである。

再開のときも、あの高松喜兵衛の子孫・喜六が中心となつて幕府に請願し、許可を得ている。新宿が廃されたのは、五代將軍・綱吉<sup>つなよし</sup>の華美で墮落した政治が、八代將軍・吉宗<sup>よしむね</sup>の、「初代將軍・家康公の質実剛健の世にもどそう」とした政治改革によるものであつたろう。

それが五十余年後の、いわゆる〔賄賂横行<sup>わいろ</sup>〕の十代將軍・家治<sup>いえはる</sup>の世となり、財政に苦しむ幕府が町人の威勢に圧<sup>おさ</sup>され、またしても莫大な公認料をうけとつて、再開をゆるしたことになる。再開後の新宿の飯盛女は、まったく公認の遊女のかたちとなり、新吉原<sup>しんよしわら</sup>の遊里同様、引手茶屋が七十軒も新宿にたちならぶことになった。

もはや、飯盛女ともいえぬ。

## 解 説

八 尋 舜 右

説

解

353

昭和三十五年、池波正太郎さんは「錯乱」で、その年上半期の直木賞を受賞した。この文庫には、その昭和三十五年から同四十五年までの十年間に発表された短編小説十篇と、歴史随筆ふうの「内藤新宿」一篇が収められている。この十年間は、作品の数も急速に増え、池波文学の骨格がくつきりと形づくられていった時代といつてよい。どの作品も三代後半から四十代後半にかけての作家の、精気に満ちた力作ぞろいで、なかには、池波作品の代名詞のようになった人気シリーズ「鬼平犯科帳」の原形ともいえる作品もふくまれており、興味つきない一巻となっている。

わたくしごとで恐縮だが、わたくしが編集者生活に足をふみいれて、時代小説というものに眼を開かれたのと、池波さんが時代小説作家として脚光を浴びはじめた時期とはほぼ重なっていることもあって、ここに収録されている作品は、いずれも発表されるたびに新鮮な思いで愛読した思い出ふかいものばかり。解説を書く役目をおおせつかったいま、一篇ずつ読みかえしながら、なんとも懐かしいおもいにとらわれている。

巻頭の「尊徳雲がくれ」は、三十五年、著者三十七歳の秋に書かれた作品。

このとき、新宿は新時代における発展の芽をふいたことになる。

新宿駅は、いちめんの木立と田畑のつらなりの中に、ぽつんと設置された。

そして、明治二十三年から三十六年にかけて、新宿を始発とする中央線（当時の甲武鉄道）が開通するにおよび、新宿は俄然<sup>かせん</sup>、発展の速度を速めることになる。

ところで、内藤家の中屋敷が「新宿御苑」となったのは、明治三十九年五月であった。

かつての渋谷川のながれに沿った、この庭園を見ると、むかしの内藤屋敷の結構がいまも尚<sup>なほ</sup>、まざまざとしのばれるのであった。

大正天皇が崩御されたとき、その大葬は新宿御苑内においておこなわれた。

それより前の大正十年の大火で、新宿の遊廓は全焼したが、すぐに息を吹き返し、以前にまさる五十三軒もの遊女屋が新築した。

関東大震災後の復興も早かったようだ。

震災後は、下町から郊外へ移住する東京市民が激増したことにもよるが、震災の翌年には、それまで町はずれだった二幸の前に、早くもバス・ターミナルが出来ている。

新宿はその後、昭和の大戦の空襲によって焼土と化したのが、復興のときの活気はすさまじいばかりの熱気をたたえていた。

その熱気は、東京オリンピックを契機とした、東京のメカニクな膨張につれて、いよいよ異様な烈しさ<sup>はげ</sup>を呈するにいたるのである。

わけだ。小田原藩からの仕法金二百兩と自分の財産を売却してつくった資金を活用して、尊徳は荒田、廃田の復興——尊徳はそれを「起発」とよんでいるが——をすすめ、数年のうちに、治水工事のほうもかなりはかどった。協力者には、尊徳流のやりかたで惜しみなく無利息で金を貸したりもした。にもかかわらず、反対派の妨害などもあり、おもいどおりに仕法が進捗しなかったのは、作中にのべられているとおりである。

尊徳の事歴をみていくと、文政十二年（一八二九）に、記録上空空白の時期がある。一月に桜町陣屋を出奔、三月に下総の成田山に参籠とあるだけで、その間、尊徳がいったい、どこで、なにをしていたか、まったくわからない。家族も陣屋に置きざりにされたままだったように、文字どおりの「尊徳雲がくれ」である。

この作品は、その三カ月の空白の期間に焦点をしぼり、その謎の日々における尊徳の行状を巧みに小説化したものだが、四十三歳の中年男尊徳に、若いおろくという「たらし」の商売女を配し、房事に溺れながら仕法がはかどらぬ愚痴を尊徳にこぼさせたりするという大胆な構成をとっている。明治期には宮内省から伝記『報徳記』が発行され、神社にまで祀られた「偉人」の裏面に隠された好色の一面をあぶりだし、人間くさい尊徳像を鮮やかに描いてみせた。全体的には、尊徳の事績を下敷きにして書かれており、時代小説というよりも、たぶん歴史小説的な色合いの濃い作品だが、おろくとのからみの部分は、まぎれもなく池波世話物の世界である。

「恥」「へそ五郎騒動」と「舞台うらの男」は、それぞれ著者が掌を指すごとく通曉した

二宮尊徳、通称金次郎（一七八七—一八五六）は、若い人にはなじみがうすいかもしれないが、戦前・戦中、当時の国策に沿ったまことに都合のよい節儉、徳行の人として、修身の教科書などにもとりあげられ、おおいに賞揚しょうようされた人物である。現在の神奈川かながわ県小田原市の近く、相模国足柄郡栢山村さがみのくにあしがらぐんかやまむらに生まれ、十四歳で父を、十六歳で母を失ったが、極度の貧窮にもめげず、徹底した節約の精神と工夫努力によって、親が失った田畑を買いもどし、ついに栢山村屈指の大地主となった。

小田原藩家老職・服部十郎兵衛家の財政建て直しをはじめとする仕法家としての腕を買われ、小田原藩主大久保忠貞おおくぼたださねから直々に、野州（栃木県）桜町領の仕法を委嘱されたのは、文政四年（一八二二）、三十五歳のときである。

仕法というのは、著者の説明を借りれば、「負債整理、殖産開拓、一村一藩復興や財政建て直し」などをおこなうことで、ここでは、小田原藩の分家である旗本宇津家の荒廃しきった領地の復興を指している。藩はそれまでに復興資金として千両余の金を桜町領につぎこんできたが、藩の役人のやりかたではどうにも埒があかないので、忠貞としては、あまり金をかけることなく、独自の方法で仕法をやつてのける尊徳を起用して、いまふうというならば、民間のエキスパートを起用して「村起こし」を試みようとしたものであったろう。

尊徳は翌文政五年、百姓身分から五石二人扶持ふち名主役格にとりあげられたが、同時に、宇津家から家をあげて赴任せよと命じられたため、苦心して手にいれた栢山村の家屋敷田畑をすべて処分、同六年春、家族をひきつれて桜町陣屋に移った。文字どおり背水の陣で臨んだ

どにしばられない人間の自由で多様な生きかたを淡々と描くこと、この作家は、人間のさ  
 ざりない可能性に満ちたコスモスを提示してみせる。封建制下の歴史に材をとり、男の世界  
 を描きながら、この作家がまちがっても偏狭な（へんきょう）体制訓話的（ていしきんわ）一作風に陥つたりしないのは、  
 ブッキッシュな思考によらず、あくまで、みずからの庶民感覚に根ざした人間洞察にいたが  
 って作品を書いているからだ。

「へそ五郎騒動」も、「恥」と同様、執政の原が登場する真田騒動ものの一つである。数あ  
 る池波作品のなかでも、わたしの好きな作品の一つで、いくと読みかえしても飽きることか  
 なく、じつに清爽な（せいそう）読後感がある。ここにも、バターン化されない、多様で味わいふかい人  
 間解釈がふんだんにちりばめられている。「舞台うらの男」とともに、その後の池波作品の  
 ベースをなす文学的特徴がよく出ている。

「看板」は、池波さんの代表的なシリーズとなった「鬼平犯科帳」の原形ともいえる作品だ。  
 昭和四十年に書かれた小説だが、ここに、おなしみの火付盗賊（かきとく）改方・長谷川平蔵（はせがわへいぞう）が初めて  
 登場する。たし、まだ「鬼平」中心のストーリーではなく、鬼平がまぎれもない主役で登  
 場するのは、「オール読物」昭和四十二年十一月号の「浅草・御願河岸」の発表を待たねば  
 ならない。この「浅草・御願河岸」が非常な評判をよんだこともあり、四十二年正月号から  
 「鬼平犯科帳」の通しタイトルで連載がはじまり、こんちちまでつづいていくことになるのである。

鬼平こと長谷川平蔵は、実在の人物である。幼名は鍬三郎（くわさん）、諱（なづな）を宣（のり）以（もち）ていった。

著者が語るところによると、長谷川平蔵に目をつけたのは昭和三十一年、このころ「寛政

真田、赤穂両家に材をとった作品。著者は、二つの藩の、きわめてドラマチックな歴史の抽出のなかから、燦々銀のように底光りのするテーマを見つけだしてきて、感動的な作品に仕立てている。

「恥」においては、権勢をほしいままにし、藩政を私している藩執政の原八郎五郎に、友人の児嶋右平次は「断固斬るべし」と立ちあがるが、主人公の森万之助は、原が藩にとって「悪」の存在であることを認め、友人の正義に共鳴しつつも斬る気にはなれず、愛情に似た気持ちさえ抱いてしまう。べつに理屈があつてのことではない。万之助は、原が自分とおなじく、遊女あがりの女を妻にしており、「女というもののよさを、しっかりとつかみとっている」らしくおもわれることから、そんな原に、どうしようもなくインチメートなものを感ぜてしまうのである。

人生は多種多様な、矛盾したもののうえに展開する。万之助もまた、その矛盾のただなかで、「政治家としての原八郎五郎は大きらいだが、人間としての原は好きだ」「これが人間の情というものだ」とおもうのである。封建道徳からは、はみだした考え方といわねばならない。しかし、万之助はおのれの矛盾した感情に忠実に生き、藩を捨て、父母も妻も捨てる。ただ、「おのれがおのれにあたえた恥」だけは、捨てることなく頑なに抱いて生きていく。

ともすれば人の陥りがちな、時代の通念や、社会の常識というものにながされ、単純にものごとを善か悪かで断定してしまうやりに、著者は、「人間も、人生もそんなに簡単に割りきれものではないんだよ」といつているようにおもわれる。つまり、時代の道徳律な

ップのつもりで書いたものといつてよいかもしれない。そのほぼ八割が会話から成り立っている。

「いまのほとくの文章は、せりふなんです。せりふが文章になっている」(「オール読物」同前) 作者は、凝縮されたせりふの力で一編、一篇の小説を描ききろうとした。劇作家でもある池波さんは、若いころからせりふにたいしては人に倍してセンシブルだったはずで、そのため苦労もおおいにしてきたにちがいない。当然ながら、芝居では、せりふがすべてで、小説のように地の文にたよることはできない。

池波さんの作品は、初期のころから会話にすぐれ、時代小説としては漢語の使用もひかえめで、かなり読みやすい文章ではあったけれど、「鬼平犯科帳」の前後から、さらに会話が多くなり、センテンスは短く、きわだつて平明な文章にかわつていった。

作家がおのれの独自の文体の創造に骨身をけずるのは当然のことと知りながら、なお、わたしは、それが池波正太郎という作家のなかで、どのていどポシティブになされたことなのか、作家の口から直にうかがつてみたいとおもつていたが、はからずも、そのこたえを、前掲の作者のことばで知ることになる。書こうとする「江戸世話物」にふさわしい文章の技法を、池波さんは数年の歳月をかけて創りだしたのである。

蛇足に類するが、過日、池波さんにお会いしたとき、「とりあげる題材にそつて文章が自然にかわつていったのではなくて、やはり、あの時期、さうとう意識的に文章をつくりかえられたのですか」野暮と知りつつも、あくまで確認のつもりでおききすると、言下に、こた



重修諸家譜』のなかに長谷川平藏の名を見だし、芝居にしたいとおもったが、はまる役者がいないために、書きたくとも書けなかった、という。

ちなみに、長谷川氏の系譜は『寛政重修諸家譜』の巻八百六十五、藤原氏・秀郷流に収められている。ご存知のごとく、戦国期以前の家譜は多分に眉唾である。このあたりを池波さんはあえて深入りせず、「平藏の家は、平安時代の鎮守府將軍・藤原秀郷のながれをくんでいるとかで、のちに下河辺を名のり、次郎左衛門政宣の代になって、大和の国・長谷川に住し、これより長谷川姓を名のったそうな」（『鬼平犯科帳（血闘）』とさらりと処理している。

とまれ、長谷川家が争乱の戦国期を切りぬけ、徳川の治世下に世祿四百石の旗本として生きのこることができたのは、駿河国小川の土豪から今川氏の家臣となり、今川家が滅亡した後、いちはやく徳川家に仕えた藤九郎正長が、三方が原の合戦で武田軍と勇ましく戦い、家康の馬前で討ち死にした功によるものといえよう。

池波さんは、直木賞をえたあとすぐに、こんどは、この長谷川平藏を小説にしようとおもったという。しかし、「すぐに書かなかったのは、ほとくの文体が硬かったからです。そのときの硬い文体では、江戸時代の世話物は書けないと思った。自分の思うように文章が出てくるようになるまで温めておこうと思ったんです」（『オール読物』一九八七年五月号）。

この「看板」が書かれたのが昭和四十年、「オール読物」誌上で「鬼平犯科帳」の連載が始まったのが同四十三年であることは先に触れた。「看板」は「江戸時代の世話物」を書くための文体を模索していた著者が、ようやくたしかな感触をつかみ、一種のウォーミングア

にもって圧巻である。それもそのはず、じつはこの食事の場面は、おこらの、その後の死の伏線になっているのだ。車善七支配の浅草見附の小屋にもどったおこらは、仲間をよびあつめて、角右衛門からもらった一両で酒肴をふるまい、「もうおもいのこすことはない」と、その夜ふけに首をくくつて自殺するのである。当時の逸話にモデルを採ったとおもわれる、この女乞食の意外な自殺が、「看板」のストーリーに屈折した面白みをくわえてゐる。

余談ながら、長谷川平蔵は、「鬼平犯科帳」では、火付盗賊改めの面のみクロースアップされてゐるが、この平蔵は、寛政二年（一七九〇）に、人足寄場の制度を幕府に建議してつくつた人でもある。人足寄場というのは、刑の執行を終えた者たちを集めて収容し、更生のために働かせた授産所のこと、隅田川河口の石川島と佃島（いづま）の中間の葦沼（あしぐま）を埋めてつくられた人足寄場取扱いとしての平蔵も、火付盗賊改め鬼平同様、厳しさと同時に人情の機微に通じたはまり役だったようで、その施策に、かれの「悪党もまた人である」の思想が十分に生かされてゐたようだ。ちなみに、山本周五郎の名作『さふ』は、この人足寄場を主題にして書かれてゐる。

表題作の「谷中・首ふり坂」、それから「夢中男」「毒」の作品は、いずれも昭和四十四年に書かれたもので、そのストーリーのはこびのみごころさは、現在の完成された池波作品とまったくかわりがない。これらの作品についても触れたことがたくさんあるのだが、残念ながらあらあたらえられた紙幅がつきた。またの機会を待ちたい。

（一九九〇年一月、作家）

えがかえってきた。「どうしたら多くの読者に読んでもらえるか、そりゃあ貞剣にかんがえたものだよ」。

こうして、現在のまさに呼吸のように自然で、簡潔、精緻な文章が完成されたのである。わたしは、まえに、おなじ新潮文庫の『男の系譜』の解説で、「作者の『思想』は、磨きぬかれた詩句のように一語一語が昇華された会話、練達の織匠が丹精した上布のように肌理あざやかな描写の行間に巧みに隠し縫いされている一云々と冗語をついやして書いたことがある。このときには、まだ池波さんが、「せりふで小説を書いている」とは知らなかった。いまだつたら、短く、こう書く。「すべてが磨きぬかれたせりふで書かれている」と。

この「看板」のなかに、片腕のない女乞食おこうが金を拾い、落とし主がもどってくるのを一刻も待って返す話が出てくる。それを見ていた盗賊・夜兎の角右衛門が感心し、料理屋で、おこうにうなぎをご馳走しながら、「あれだけの大金を拾って、平気だったかえ?」ときくと、「私ばかりじゃなく、乞食というものは、わりと拾いものを返しますよ」「人間、だれしも看板をかけていままさアね、乞食のかけている看板は、拾いものを返すってことなんですよ」と、おこうがこたえる。人を殺さぬことをまことの盗賊の掟とし、それを誇りにもおもって生きてきた夜兎の角右衛門は、のちに、長谷川平蔵に、「女乞食の看板と、お前の看板とは、だいぶん違う。お前の看板の中身は、みんな盗人の見栄だ」ときめつけられることになり、この小説の題名の「看板」の意味がしだいにわかってくる仕組みになっている。それにしても、檻樓をまとったおこうが涙をながしながらうなぎを食べる場面は、まこと

## 文字づかいについて

新潮文庫の日本文学の文字表記については、原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

- 一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは新仮名づかいに改める
- 二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
- 三、常用漢字表、人名用漢字別表に掲げられている漢字は、原則として新字体を使用する。
- 四、年少の読者をも考慮し、難読と思われる漢字や固有名詞・専門語等にはなるべく振仮名をつける

「尊徳雲がくれ」は東方社刊『応仁の乱』（昭和三十五年十一月）に収録され、のち立風書房刊『池波正太郎短編全集下巻』（昭和五十八年三月）に、「へそ五郎騒動」「舞台うらの男」は毎日新聞社刊『仇討ち』（昭和四十二年十月）に、「かたきうち」はアサヒ芸能出版刊『真説・仇討ち物語』（昭和三十九年二月）に、「看板」はサンケイ新聞出版局刊『につぼん怪盗伝』（昭和四十二年一月）に、「白浪看板」として収録され、のち角川文庫『につぼん怪盗伝』（昭和四十七年十二月）に、「谷中・首ふり坂」は東京文芸社刊『錯乱・賊将』（昭和五十四年四月）に、「夢中男」は桃源社刊『夢中男』（昭和四十五年六月）に収録され、のち東京文芸社刊『夢中男』（昭和五十七年二月）、『池波正太郎短編全集上巻』（昭和五十八年一月）に、「伊勢屋の黒助」は東京文芸社刊『この父その子』（昭和四十七年十一月）に収録され、のち『池波正太郎短編全集下巻』に、それぞれ収められた。その他の作品は本書初収録である。

新潮文庫最新刊

宮本輝著

生きものたちの部屋

原田宗典著

わがモノたち

船戸与一著

蝦夷地別件(上・中・下)

日本冒険小説協会大賞受賞

高橋克彦著

鬼九郎鬼草子

多岐川恭著

江戸三尺の空

北川歩実著

僕を殺した女

迫る締切、進まぬ原稿――頭を抱える小説家・宮本輝を見守り、鼓舞し、手を差し伸べる、夜の書斎のいとしいへ生きものたち。

プラモデルに野球帽、グラサンに昆虫採集セット……。あのなつかしいモノたちを、ハラダがシミジミ語るトホホ思考全開エッセイ。

世界が激動する18世紀末。和人に虐げられていたアイヌ民族の憤怒の炎が燃え上がる。未曾有のスケールで描く超経緯歴史冒険大作

会津藩に関わる陰謀の謎、幻戯の術を用いる根来傀儡衆との壮絶な戦い……。おなじみの人物たちが縦横無尽に活躍するシリーズ第2弾

縄抜けして脱走した囚人と、責任をとらされて切腹した牢屋同心の息子との手に汗握る対決。江戸の闇を描いたピカレスク長編ノ

朝目覚めると僕は若い女になっていた。しかも5年後にタイムスリップして……。気鋭の新進作家が送る超絶技巧的ミステリ。長編

池波正太郎著

## 剣客商売

白髪頭の粹な小男・秋山小兵衛と殿のように逞しい息子・大治郎の名コンビが、剣に命を賭けて江戸の悪事を斬る。シリーズ第一作。

池波正太郎著

## 真田太平記(一)

―天魔の夏―

天下分け目の決戦を、父・弟と兄とが豊臣方と徳川方とに別れて戦った信州・真田家の波瀾にとんだ歴史をたどる大河小説。全12巻。

池波正太郎著

## おとこの秘図

(全三冊)

江戸中期、変転する時代を若き血をたぎらせて生きぬいた旗本・徳山五兵衛――逆境をはねのけ、したたかに歩んだ男の波瀾の絵巻。

池波正太郎著

## あばれ狼

不幸な生い立ちゆえに敵・味方をこえて結ばれる渡世人たちの男と男の友情を描く連作3編と、『真田太平記』の脇役たちを描いた4編。

池波正太郎著

## おせん

あくまでも男が中心の江戸の街。その陰にあつて欲望に翻弄される女たちの哀歓を見事にとらえた短編全13編を収める。

池波正太郎著

## あほうがらす

人間のふしぎさ、運命のおそろしさ……市井ものの、剣豪ものの、武士道ものなど、著者の多彩な小説世界の粹を精選した11編収録。

西村京太郎著

猿が啼くとき人が死ぬ

スキャンダルを嗅ぎつけた雑誌記者が殺された。そのときなぜか猿の啼き声が聞こえたという。十津川警部は冷酷な事件に震撼した。

河合隼雄著

こころの処方箋

「耐える」だけが精神力ではない、「理解ある親」をもつ子はたまらない——など、疲弊した心に、真の勇気を起こし秘策を生みだす55章。

近藤 誠著

がんは切ればなおるのか

手術すると危ないがん、手術しなくてもなおる「がんもどき」……がんなんてこわくない。がん治療現場の常識を覆した著者の原点。

山村美紗著

大江山鬼伝説殺人事件

酒吞童子ゆかりの丹後・大江山で、息をのむ美女が岩場から転落死。さては鬼に魅入られた……？ 〈葬儀屋探偵〉明子、最後の事件簿。

南原幹雄著

銭 五 の 海

加賀の古着屋から身を起こし、質流れのオンボロ百二十石船からはじめて、日本一の豪商となるまでの銭屋五兵衛、波瀾と悲運の生涯。

多田富雄著

ビルマの鳥の木

世界的な免疫学者である著者が、旅、学問、芸術そして人々とのふれあいを通して「感動」を発見していく。香り高きエッセイ集。



新 潮 文 庫 最 新 刊

白洲正子著

遊鬼——わが師 わが友

青山二郎、小林秀雄、梅原龍三郎、洲之内徹、……。韋駄天の正子が全身でぶつかり全霊で感電した人生の名人、危うきに遊んだ鬼たち。

星野道夫著

イニユニック〔生命〕

—アラスカの原野を旅する—

壮大な自然と野生動物の姿、そこに暮らす人々との心の交流を、美しい文章と写真で綴る。アラスカのすべてを愛した著者の生命の記録。

H・クーバーJr.  
立花隆訳

アポロ13号 奇跡の生還

想像を絶するクライシスに立ち向かう三人の宇宙飛行士と管制官。無事帰還をするまでの息詰まる過程を描いた迫真のドキュメントノ

D・ケネディ  
中川聖訳

ビッグ・ピクチャー

映画化

ヤッピー弁護士ベンは妻の不貞に気づき、激情に駆られて凶行に及んでしまう。そして過去自分を葬ろうと……。全米震撼の問題作。

R・ラドラム  
山本光伸訳

陰謀の黙示録

(上・下)

欧米を覆うネオナチの影。全世界をパニックに陥れる謎のテロ計画とは？ 戦慄の策謀が明かされた時、壮絶な闘いは始まった。

ジュディス・マイケル  
吉浦澄子訳

嫉

(上・下)

妬

私は、あの女を破滅させて、全財産を奪ってみせる。生れも育ちも性格さえも極端に違う二人の女の、情熱のゆくえを描く長編小説。

新潮文庫  
池波正太郎の本

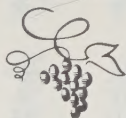
忍 者 丹 波 大 介  
男 (おとこぶり) 振  
俠 客  
剣 の 天 地  
食 卓 の 情 景  
闇 の 狩 人(上・下)  
上 意 討 ち  
散歩のとき  
何か食べたくなくて  
闇は知っている  
雲霧仁左衛門(前・後)  
さむらい劇場  
おとこの秘図(上・中・下)  
忍 び の 旗  
日 曜 日 の 万 年 筆  
真 田 騷 動  
男 の 作 法  
あ ほ う が ら す  
お せ  
男 の 系 譜  
味 と 映 画 の 歳 時 記  
剣 客 商 売  
剣客商売② 辻 斬 り  
剣客商売③ 陽 炎 の 男  
剣客商売④ 天 魔  
剣客商売⑤ 白 い 鬼  
剣客商売⑥ 新 妻  
剣客商売⑦ 隠 れ 簀  
剣客商売⑧ 狂 乱  
剣客商売⑨ 待 ち 伏 せ

剣客商売⑩ 春 の 嵐  
剣客商売⑪ 勝 負  
剣客商売⑫ 十 番 斬 り  
剣客商売⑬ 波 紋  
剣客商売⑭ 暗 殺 者  
剣客商売⑮ 二十番斬り  
剣客商売⑯ 浮 沈  
黒 白(上・下)  
—剣客商売番外編—  
ないしょ ないしょ  
—剣客商売番外編—  
剣客商売 庖丁ごよみ  
映画を見ると得をする  
真田太平記(一)~(三)  
編 笠 十 兵 衛(上・下)  
フランス映画旅行  
む か し の 味  
あ ば れ 狼  
ドンレミイの雨  
谷 中 ・ 首 ふ り 坂  
まんぞく まんぞく  
秘 伝 の 声(上・下)  
池波正太郎の銀座日記[全]  
黒 幕  
原 っ ぱ  
賊 将  
江 戸 切 絵 図 散 歩  
お 武 士 の 紋 章  
夢 の 階 段

や なか くび ざか  
谷中・首ふり坂

新潮文庫

い - 16 - 54



平成二年二月二十五日 発行  
平成十年七月五日 二十四刷

著 者 池 波 正 太 郎  
いけ なみ しやう たろう

発 行 者 佐 藤 隆 信  
さとう たかのぶ

発 行 所 株式 会 社 新 潮 社  
しんそうしゃ

郵便番号 一六二一八七一

東京都新宿区矢来町七一

編集部(〇三)三二六六一五四四〇

電話 読者係(〇三)三二六六一五一

振替 〇〇一四〇一五八八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付  
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Toyoko Ikenami 1990 Printed in Japan

ISBN4-10-115654-9 C0193

KINOKUNIYA  
BOOKSTORES

谷中・首ふり坂

(901)-1 03/2000



9 784101 156545

JB-JB4005-0001

8.40

定価：本体552円(税別)

養子に入った武家の妻にへきえきしていた男が、初めて連れていかれた谷中の茶屋の女に魅せられ、武士の身分を捨ててしまう表題作。自堕落に暮らしていた息子が、濡れ衣を負って処刑された父の敵を討とうと決心した途端に人柄が変わってしまう「夢中男」。そのほか「尊徳雲がくれ」「へそ五郎騒動」「舞台うらの男」「かたきうち」「伊勢屋の黒助」など、全11編を収める傑作短編集。

ISBN4-10-115654-9

C0193 ¥552E

